

るのです。

◇海道下り

それからこんどは三番ほど、昔の猿樂——所謂喜劇的なものがつゞきます。年寄と若い男とが出て来ました。一人は藤の布でこしらへた袋を下げてゐます。ともかくこの二人で遠い都から、東海道を下つて、旅をすると言ふ意味を舞ふのです。そしてその親子が、どちらも旅の神職なので、これを禰宜舞ひと言ひます。しかし普通は海道下りと言ふ日本の藝能では昔から度々行はれる名稱で呼んでゐます。これなんかしみく／＼と見てゐると、なか／＼優美な昔風な味はひを持つてゐると思ひますが、舞ふ人も知らず、我々にも訣らず、唯説明出来ない古典的なものが、胸を打つのです。こんな所に、古典の本道の味といふものがあるのではないでせうか。

◇かんば（君の舞ひ）

今度出て来たのは爺さんと、美しい着物を着た婆さんが年に似合はないえろちつく／＼な動作でたはむれながら、あつちによつたり、こつちによつたりしてゐます。とう／＼二人が重なり合ひました。これは生産を促すために行つた昔からの神事で、日本ばかりでなくどこの國でも古代には行はれてをり、又近代迄つゞいてゐる舞踊であります。動作が人をはづかしがらせるにかゝらず、名前は非常にいゝ名で君の舞ひとも言ひます。村ではかんばと言ふことばの意味は訣らないが、何か一筋縄にはゆかぬ婆さんと言つた感じのすることばで呼んでゐます。そこへ鈴を鳴らし

ながら、娘が出て来て、その爺さん・婆さんの行動を妨げようとする。

この娘が「伊勢の國度會郡……」と言ふのですから、何かこの舞ひがもと、神事に關係のあつた事が想像出来ます。さてそれがすむといよ／＼雪祭りの最後の段階に到達します。

◇朝鬼

あゝさう言つてゐるうちに向うに現れました。三匹の鬼の姿ですが、所ではてん／＼様とも言つてゐます。

「雪祭り」しなりお

新野の古いお面は、大正二年の火事で、皆焼けてしまひました。氏子連衆で心覚えをたどつてお面を作つたのですが、この中この三つの鬼の面だけは、素人の作とは思はれぬ程に精巧に出来てゐます。このお面が雪祭りに重大な意味をもつてゐたことは、想像出来ます。御覽の通り、今禰宜たちが、鬼にむかつて、問答をはじめました。鬼が又それに向つて、名のりをあげてゐます。「愛宕山の大天狗。小天狗」など言ふ聲が折からの朝空にひゞいて聞えます。あゝ陽がさして来ました。鬼のことですから、悪魔だとも、恐いものだとも考へられてゐるのですが、同時に、ありがたいものだ、尊ぶべきものだとか考へてゐることは、「鬼さま負けてお歸りだ」とはやしてゐる氏子達のことによつても、恐いものだが同時に、感謝すべき部分も持つてゐるものだと云ふ、古代人の鬼に對する二重の感覺があらはれてゐると思ひます。

あゝ日が鬼の面の口に當りました。これで祭りが完成した安堵を氏子達が持つのです。古代の日

本では、山の奥に巨人が住んでをつて、里人達のこはがるやうな容貌、風采をしてゐるが、同時に里人の生活をわづらはすものを追ひしりぞけてくれる。さういふ風に考へてゐましたので、鬼に對するこんな不思議な信仰があらはれるわけです。村人がこのまつりに對して持つてゐる感情を、村人の表情或はことばつきから汲みとつて下さい。

これで一通りすんだわけですが、神樂とか神あそびだとか言ふ種類の藝能には、必そのあとでおさへ、しづめの藝能が行はなければ、突發的にどんな事がおこつて來るか不安でならないものですから、最後に押への藝といふものが行はれます。つまり威力の激しいまじなひをしたことになるのです。

◇ しづめ

最後の鬼のあとに出て來ましたのは、こまと言ふ行事で、八幡さまが駒を乗りしづめられる、と言ふ意味のものです。こまは馬の姿をしてゐますが、おそらく高麗の國にゐる恐しい猛獸を意味してゐたのでせう。それを日本の八幡さまが押へつけ、自由に乗りこなす、それでしづめの目的が達せられたわけです。

◇ しづめ

あゝこまはとう／＼八幡さまに押しふせられました。だが、素朴で聰明な點で缺けた所のあつた昔の人は、なほまう一度完全に押へしづめておきたいと思つたらしいのです。こゝで日本の古代

に早くから藝能と共に渡つて、農村の人々に信頼せられた、しゝを出すことになつてゐます。

◇ しゝ

しかしこのしゝも御覽の通り、しづめさまと言ふ神様に對抗してゐる所から見ると、鬼同様にこはがるべき災のものなのです。所がやはり、鬼の場合と同じやうに、恐しいけれども、同時に頼りになる強力なものだといふので、かういふ祭りの場合にも呼び出すのですが、さういふ考へが、まう一つかさなつて更にしづめさまが出て來て、しゝを押し出すといふことで、この呪術的祭典は大團圓に至るのです。しづめさまと言ふのは神樂の神です。伊勢の神樂から系統を引いてゐるものゝやうに思はれます。

殊に三河・遠江、それから信州の南部の神樂系統の藝能には、最後の押へとして、此神があらはれて來てゐます。時としては火の王・水の王といふ名前で、二つに分れてしづめをすることも多いのです。

◇ かぢや

もうこれですんだと思つたら、又さわがしい音が響いて來ました。一人は鍛冶屋の親方で、一人はその手間取りです。親鍛冶とばんごと言ひます。どうもくはしくは訣らないが、ばんごが給金が少いので、怠ける。親方が怒る。そこへ仲裁が這入つて、兩人をつき合せて仲直りさせようとするが、なか／＼兩人があはうとしない。それを間に這入る仲人が追つかけ廻して歩く。

さういふ所に今の人の興味がつながつてゐるやうです。

これですんだのですが、まだ神社の庭の隅に禰宜さんや氏子の人々が集つて何かしてゐます。近よつて見ようぢやありませんか。

太鼓を伏せて、その上に稻穂をかざつてとなへごとをしてゐます。宣命センミヤウと言ふものです。これを田あそびと言つてゐます。となへごとの中には昔の民謡なんかゞ澤山這入つてゐます。今うたつてゐるのは「しなのざかひのこならのはなは……」と言ふやうなものです。どうやらうたひをさめになるやうです。「たかかべるべし」「蓬萊の山より高かるべし」といふ文句が聞えて來ます。祭りの興奮も段々靜かになつて參りました。

根子の番樂・金砂の田樂

昭和十年十一月・十二月
「日本民俗」第四・五號

今度秋田縣北秋田郡荒瀬村根子ネッコといふ山の中の村から、番樂といふものが來る。番樂といふのは、奥州のあちらこちらにあるので、多く此字をあてゝゐるが、この字が當るかどうか訣らぬ。何かの参考になる様なお話をしよう。

東北の藝能

日本の舞踊には、人間の性とか年齢とかによつて異るといふ規則がある。つまり、老人の舞ひ・處女の舞ひ・青年の舞ひと、此三つが、祭りの時に行ふ舞踊の重要な要素になつてゐるので、根子の番樂は、青年の舞ひが中心になつてゐる。併し、其中に青年のもの以外に獨立してゐる舞ひもあるやうだ。尤、或部分は青年がするが、元から皆青年がしたとは言へない。

此は、出羽奥州に通じて行はれてゐる神樂系統の藝能の一つである。出羽奥州に行はれてゐる神樂といふものは、果して正確に、吾々の考へてゐる神樂と言つていゝかどうかは問題だが、彼方

では、凡そ神樂と言つてゐる。だが、神主・禰宜の神樂と、山伏の神樂とに、大體分れてゐる。ひつくるめて言へば神樂と言へるが、地方によつて、名が變り、同時に分裂してゐて、其地方特有の祭禮の歴史と結び付いたりもして、部分々々が残つてゐるといふ形になつてゐるのである。併し、此他に、出羽奥州を通じて、別系のものが無かつたとは言へない。別系のものがあつたのが、大きな神樂が這入つて來た爲に、其中に取り込まれて了うた、と見た方がいゝのかも知れない。とにかく、簡単なものではなからう。

東北の神樂系統の藝能で、番樂といふ名をもつてゐるのは、凡そ翁・三番叟であるらしい。この舞ひには、うら舞ひといふものがある。其に對して、元のを表舞オセテひといふ。中央から西にかけて、古い藝を留めてゐるものが、もどきを持つてゐると同じだ。併しもどきよりはまう一層形のきまつたもので、もどきは、形が極つても即興的な意味をもつてゐるが、裏舞ひとなると、表舞ひと同じく固定して了つたものと思はれる。

不思議なことには、出羽奥州を通じて、部分々々に、偶然とは思へぬ一致がある。殊に曲目に於いて著しい。今度來る番樂の主體になつてゐる翁・三番叟にも、「松迎へ」の翁といふ裏舞ひがくつついてゐる。此は、奥州にも段々ある。早池峯ハヤチネ系統の神樂にもある。つまり、日本國中の神樂、或は其他の神事舞ひが、すべて翁・三番叟で統一された。其と同じ理窟で、此等のものが翁・三番叟をもつてゐるのだらう。

能樂・幸若舞との類似點

が、此翁・三番叟よりも主な處は、若い衆の舞ひだけに、能でいへば四番目物である現在物と、殆ど同じ様なものが澤山ある。此が、この番樂の本態のやうに見える。此らのものを觀た人は、率然として感じるだらう。此は、能樂の出羽奥州に残つた變型だと。併し、さう感じるのは、曲の内容だけで、臺本もちがへば、所作に到つては非常にちがふ。何の通ずる處もない様に思はれる。が、今の能樂が古からあつたものではなかつた筈だ。能の臺本即、謡曲が變化して來てゐるのは、明らかな事である。だから、臺本がちがふから兩者が没交渉だといふ理窟にはならないし、所作のちがふのも、昔の能樂がどんなであつたか、訣らない以上、番樂と昔の能樂とが全然ちがつたものだといふ證明にはならない。とにかく現在の能樂とは、甚しくちがつてゐる。

一體、能の現在物は出所が大抵極つてゐる。大體、幸若舞ひから出てゐるのだ。番樂の臺本は非常に斷篇的なもので、能で言へば小謡みたいな部分、或は仕舞に關係してゐる部分だけ、と言つてもいゝ位、斷篇的なもので、語の間違ひはしてゐるが、非常に要領を得た臺本である。此は、奥羽の神樂の現在物に通じてのことだ、幸若の文句と全く同じではないが、文脈は似てゐる。

處が、能樂との關係をさういふ風に否定するが、奥州の神樂の舞ひの源と思はれる、平泉の延年舞ひ其他のものを觀ると、能樂と大分似てゐる點がある。能の謡ひを思はせるものもあるし、狂

言の或種のものに近付いたと思はれるものもある。併し、平泉のを観ないと、能樂との關係が切れて了ふ。だから、此は考へ方による。平泉の毛越寺で行つてゐる延年舞ひ其他を先に観て了ふと、其に捉はれる。併し、此が必しも能から出てゐるとは言へない。恐らく後に、能樂・謡曲の影響をうけたのだらう。私はさう思ふ。

鳥海山をめぐる

私は前にかう思つた。出羽の鳥海山は人眼につく山だが、此山を巡つて變つた藝能が分布してゐる。まだ西南の部分は訣らないが、他には飛びくにあるやうだ。實は、今度來る番樂の先の候補——今春日本青年館に來た秋田縣西馬音内の近く——田代にも番樂があるので、此が來なくなつて荒瀬のが來る事になつた。其田代が恰度鳥海山の南に當るのだ。又西北の麓には、ひやま舞ひがある。檜山とあてる様だが、此は必、ひやまといふ秋田邊の地名で、其處から移つて來た舞ひだと思ふ。此舞ひが、思ひがけなく吾々を興奮させた。其後、鳥海山の附近を當つてみると、此に似た舞ひが相當に分布してゐる。それで、鳥海山の神樂といふものがあつたのではないかと考へた。が、其は大分當て違ひで、實は、もつと廣く、奥州出羽に行き互つてゐて、恐らくは奥州側から來たと思はれるものが、ずつと行はれてゐたのである。つまり、何處の舞ひもが其要素をもつてゐるといふ事になる。

今度來る番樂も其一種なのだ。

青年の舞ひ

青年の舞ひといふものは、青年が、神事の中心になつた事から起つたので、起原的の意義を考へると、成年戒を授かる時の舞ひである。其印象が、何時までも残つたのだ。かういふ藝能をみる時、其處まで溯る必要はないが、何の爲に青年が舞ひの中心になつてゐるかといふ點が大事なのである。

どうも、番樂其他、奥州に分布してゐる神樂の中には、何か訣らぬが、昔あつた、演藝種目をたくさんもつた藝能の末だといふ感を起させるものがある。どこか、統一があるといふ氣がする。しかも、其元に當るものが思ひつかれぬのだ。吾々は、何でも都から行つたと思つてゐるが、此考へは、ひよつとしたら間違つてゐるのかも知れない。曲目は、一致したものもあるが、無いものもある。其一致しないものに面白いものがあるが、何から出てゐるのか、どうも訣らない。かどかどの類似を集めれば、其はあるが、見當のつかないものが多い。

さういふ種類のもの、巫女舞ひ、即、神子舞ひといふべきものに多い。東北地方の神樂には、男が女に扮する場合が多い。吾々からいふと、女装にしないでよい場合にもしてゐる。英雄に近い男性を現す場合にも、女性に扮してゐる。女形といふものゝあつた事が想像されるのである。

田樂は、古く田遊び（稻の豊作を祈る行事）の藝能化したものである。而も、今尙、田樂と稱しながら、古い田遊び時代の俤を残してゐるものがある。とにかく、種々雑多な田遊び田樂が日本中に行はれてゐたので、その中の或ものは、脇藝である猿樂が非常な發達を示した。

田樂と猿樂との關係であるが、猿といふのは、水の神だといふ意見を、柳田國男先生が出さうとしてをられる。少くとも猿に似てゐるものをば水の精靈の一種だと思つてゐた様だ。水の精靈には種々あるが、その中、猿に類似したものが一番有勢だつたと言へる。猿が田の行事に關係あることは、猿掣の昔話等に依つても知れよう。猿樂といふ語も、多少これに關係をもつてゐる。其以外にも田樂には、猿が非常に關係を持つてゐる。

此田樂の重要な曲目をもつて獨立したのが猿樂である。さうして、猿樂は段々盛んになり、田樂は衰へたが、衰へながらも保たれて來た。其は、社には、田遊び・神遊びの藝能が必要だつたからであるが、社又は寺によつて選擇される時に、自由な選り方をしたので、どのものも同じといふ事がないのである。これには、必然的な理由もあらうが、偶然の場合もあつたらう。殊に、社に田樂の残つた理由の一つは、幕府が、式樂に幸若、或は能樂を選んだので、諸國の社で其をまねて田樂を選んだのだと思はれる。或は、もつと自然な事情で傳つてゐるものもあらう。とに

かく、諸處の田樂を綜合して、はじめて昔の形が決るので、關西にも方々に残つてゐるが、關東にわりあひ有力に残つてゐるわけは、式樂といふ考へが働き掛けたのだらう。關東では、元の日光の田樂、王子權現の田樂、淺草三社の田樂が代表的なものだが、其と同じ様に名高い田樂が、常陸國久慈郡金砂といふ修驗の山に保存されてゐる。此金砂山は、まう少し行けば、磐城國との堺に接した處なので（今は大分離れてゐるが）、常陸の平野から見れば、常陸の國の一番奥とみられたのであらう。そこに、修驗の大きな根據地があつた。早くから東西に分れたので、細い溪谷を隔てゝ對立してゐる。一體、修驗の山は分離し易い。叡山・高野でも谷々に分れてゐる様に、よく二つに分れる。

東と西とでは、田樂の種目が大分ちがふ。各、大體四つづゝある。四方固め・獅子舞ひが共通で、他は違ふ。記録の上では、東の方が遅れてゐる。東では、初春に亂聲ラシヤといふ事を行ふ。鬼と猿とが出て、いろんな動作をするらしい。この亂聲が中心になつてゐる。私は、昭和七年に西金砂のミヅキ水木濱に降りて來たのをみた。七十三年目毎に行はれる行事で、壺に這入つた御神體の鮑を奉じて海邊に來るのであるが、壺の水の入れ替へか、御神體その物を入れかへるのか、神主もはつきりと言はない。東西、數日を隔てゝ、水木濱へ神幸するのであるが、その途中、あちらこちらに滞在して、そこでも田樂を行ふ。私は、西の田樂だけを見たのだが、見てゐて少しの興奮も起らない。西の特色は一本足の高足である。此と、東の亂聲とが兩者の特徴らしい。尙、西では種

蒔きと稱してびんざらを摺る。

七十三年目に一度行ふのでは、人間一代に又と来ないかも知れない。餘程詳しい記録がなければ記憶出来ない訣であるが、實は七年目に一度、つゝ小祭を行ふので、大體記憶に残る。東の方は初春ごとに繰り返す。

東西で、お互ひに相手の田樂ではないといふが、特殊な藝能を區劃する爲にかういつてゐるのだらう。とにかく、昔から名高い田樂である。たとひ、今見て何の興奮も感じないとしても、もとの田樂の形を再現する爲には、あちらこちらのを見て、ある限りの要素を集め、そこから不純な點を取り去つて見る必要がある。さうした點からいつて、金砂の田樂は重要なものである。藝術的價値はあつてもなくても、藝能の發生・歴史を考へる爲には、見ておく必要があるのだ。

東金砂では、巫女舞と亂聲とを主としてゐる、といふよりは、其によつて、西の方と區別を立ててゐるやうだ。西は、そのない事を誇つてゐる。

亂聲ランジャウといふのは、鬼と澤山の猿とが出て来る。猿は日吉山王の廿一社をしんぼらいずしたと思はれる。つまり此は、山伏の山に特有なもので、山伏の山の春の行事には、必、鬼が出る。その鬼と、權現さまに關係の深い猿とが絡んで出る訣だ。

西金砂の方では、其に當るものが、種蒔きである。此は、西の方で非常に重要なものにしてゐるので、此あるが爲に西金砂の田樂があると考へてゐる程だ。觀て面白くも何ともないものだが、

神社の藝能は、興奮が起つて来れば藝能であるが、興奮が起つて来なければ只の行事に過ぎない。唯、其時に、古くから田樂に伴つてゐる一種の見立て、即、感染呪術（かまけわざ）をやつてゐる。びんざらを持ち出して種を蒔く形をするのである。

古くは、金砂の田樂もればあとりを澤山もつてゐて、籐を摺つて種々の事をやつたと思はれるが、今は固定し切つて了つてゐる。四方固めは、どんな藝能でも、日本式の藝能なら必、持たねばならぬ要素である。鬼・天狗・巨人などが出て、四方或は五方を踏み固める。又、獅子舞ひは、本來日本在來のものだが、今は外來要素の方が、寧、多くなつてゐる。其が、どんな藝能にも割り込んでゐる。此等のものは、古い田樂にも重要な位置を占めてゐたらうが、田樂の本格的なものではない。衰へたやうな形になつてゐる高足や種蒔きの方に重大な意味があるのだ。極簡単なもので、吾々が眞似して出来ぬこともないが、吾々が勝手にやると、形式的でも田舎に傳つてゐるのでは、意義がちがふ。見れば、何かの刺戟にならう。

吾々の興味は、譬へば、まづ、田樂をみて、田樂に對する或基礎を拵へておいて、他と比較することだ。現に東京にも、二ヶ所の田樂がある。其淺草三社・王子のものと見較べると、皆異つてゐる。其を寄せ集めてみると、原モトの形が出て來ると思はれる。

西では、東のは後から出來たので、田樂ではないと言つてゐる。或はさうかも知れない。併し、對立してゐる社とか山とかでは、互ひに排斥しあふのが常だから、見ない限りは訣らない。

○
 實のところ、我々は、観てほうとしたゞけで、何の感じも残つてゐないのだが、まあ、一言だけ言つて置かう。

恰度、あの二つの組み合わせが、民俗藝能の歩みを示してゐると思つた。つまり、一つは信仰的關係を離れ切らないもの、一つは其から離れてしまつたもの、といふ事が見られたのである。

で、田樂は、あんな單調なものだが、あれで可なり發達したものなのだ。昔の祭りの儀禮から、或點藝能化して、可なり發達した形が固定して、其が段々崩れてあゝいふ形になつた。面白くないのは、固定して崩れてゐるからでもあるが、又、元の形それ自身がまだそんなに進んでゐないからでもある。

私はその後、柳田先生の賀の祝ひが大阪でもあつて行つたが、その時、私の少年時代からの友達である京大の西田が、丹波の田樂を三个所も活動寫眞に撮つたのを映して説明してくれたが、大分違ふ様だ。西田君の説明では、田樂でも、京都から出たのと、京を經過してゐないのがある。丹波のは京を經過したもの、我々が見て廻つた遠州の田遊び、田樂は京を經過してゐないといふのである。その區別の大切なところをよく訊かなかつたので訣らないが、或はさういふ事があるかも知れない。しかし私には、まだ田樂の形が纏つて頭に這入つてゐないのである。前號でも言

うた様に、田樂は何處でも片輪になつて残つてゐて、甚しいのは、元の田遊びに逆戻りした様な形で保存されてゐるものもある。だから、各所のものを集めて比較をして見ると、その全貌が窺はれるかも知れないと思ふが、しかしそれとても、田樂の盛りであつた時代以後の附加があるに違ひないから、さういふ計畫も或點まで危険である。又、みな見ると言うても、我々の觀察眼は不正確であるから、どうしてもとのおきいに撮る必要がある。

此間の田樂には、藝能的な部分が殆ない。藝能的なと言へば、一本足の高足——あれは一足といふものだが、廣い意味では、あれでも高足である——に乗るのがある。あれは曲藝をとり入れたのだが、田樂では大事なものである。しかしそれよりも、舞踊的なものが殆ない。田樂の藝能化とは舞踊化した事であるが、其がないのである。たゞ、西の田樂の種蒔きを蓮葉躍りというてゐるが、單に、蓮の葉の様な笠を冠るからさういふらしいので、あれは踊りといふよりは悠長に歩いてゐるので、其を種蒔きといふ田の行事で解釋したゞけである。編木を摺つての舞ひの技巧や興奮がなくなつてから、その動作を種蒔きで説明したので、段々種蒔きの動作に近づいたのだと見られる。で、かういふ風に考へる事が出来相だ。つまり、あゝいふ、種蒔きか何か訣らぬが、田を目的として動く形を模した動作が、早くなり、複雑になつて、田樂の舞ひの型が出来たと。が、あれはさうではない。一體、田樂は田遊びだけではあゝはならなかつた。呪師の藝能が這入つてあれだけになつたのだから、我々は、もつと呪師の内容を調べねばならない。

とにかく、先日の田樂で、田樂らしいと、我々普通の知識で言へるのは、種蒔きと高足とだけで、他の種目は忘れてしまつてゐるのである。

番樂の方にも、信仰的な匂ひがあると言へばある。譬へば、翁系統のものがある事だ。番樂といふ語の意味は訣らないが、翁を意味してゐるとも見られ、又、あの一聯の舞ひが其から延びて来たとも見られるので、さう考へれば、愈信仰的な匂ひがある訣だが、舞ひ自身には、もう信仰の形がなくなつてゐる。單に、翁があるからと言ふのだつたら、歌舞妓芝居にだつてあつた。詰り、民俗藝能には翁・三番叟が出ないと始まらない種類のものが多いので、別にそんなものが出なくても構はないと思はれる社々の神樂などにも相當に翁・三番叟から始まるものがある。でないで民俗藝能の約束に叛くと思つて容れて来たのである。で、あの番樂は、翁が基で延びて来たか、翁が後に這入つたか、兩様に考へられる。私達の既に考へて来た事は、一つのものが次第に形を崩した演出が行はれた。其が翁と三番叟との關係で、更に其が形を變へ、意味を變へて演出された、と見られるので、大體はさうなのだが、個々何時でもさうだとは言へない。番樂も、さうだと言へるかも知れないが、先、さう決めてしまはない方が本道だと思ふ。あの中には、番樂そのものに關係のない新しい要素が這入つてゐる。譬へば鐘巻、蛇が出るなどは、元からあつたものでないに相違ない。恐らく人形芝居の眞似であらう。さういふ風にして後から割り込んで来たものがある。だが、此は西角井君の領分だが、東北の神樂系統のものには出入りが激しくて、含

んでゐるもの・ゐないものが入り亂れてゐるのだが、大體、漠然と見て、かういふものが這入つて来れば神樂といふ氣がするといったもの——其を容れないと藝能に貫目が著かないとでも考へてゐるさうなもの——がある様だ。

又、地理的に言ふと、津輕領と南部領と、津輕領の影響をうけた秋田と、此二つは、地理的には區劃があつて、はつきり別れてゐるが、神樂に限つて、可なり共通したものを持つてゐる。此は山伏の神樂とか禰宜の神樂とかいふ事を土臺にして言ふ事は出来ない。どの神樂か訣らないが、自由に南部領と津輕領との間を動いてゐた事が言へるのである。

更に注意すべき事は、東北各所の神樂系統のものが、若、古い昔に別れてゐたのなら、臺本にもつと變化があるべきだが、臺本が何れも近似してゐる。此動きが比較的近代で、その以前はどこが元であつたかは訣らないが、とにかく或地で永く保たれ、相當藝能の價値を持つまでに進んだものが、或時期に諸國に散らばつたと見られるのである。

尙、あれを見て感じた事は、見物に藝能を感じる能力がなければ續いて行はれなかつたらうと思はれるものがある事だ。譬へば、蕨折りなどは、あの文句から女の所作を觀照するだけの能力がなければ面白くない筈だ。如何に演ずる人が主要なものだといつて繰り返しても、見る人が訣らなければ續かなかつたらう。津輕領・南部領の人達にも、あれを觀照する能力があつたと見なければならぬ。

蕨折りは以前にも見たが、何をしてゐるのかよく訣らない點があつたが、此間のでよく訣つた。あゝいふものでも、幾つも見ただから解釋がついたのである。

次に、あの臺本であるが、都の方で出來たものが東北へ持ち運ばれたのか、東北根生ひのものか、其はいづれとも斷言出來ないが、大體、番樂その他、神樂系統のものが、含んでゐるものによつて、此はどういふ種類のものであるかといふ事だけは見當がつく。平泉の方へ行つて見ると、能樂以前の延年舞ひも形式化して残つてゐる。能樂・狂言の影響をうけて、又原へ戻つたと見られるものもある。一方、平泉あたりで、能樂或は能樂以外の古いものに沿うて發達したもの、其とは何の關係もなく出來たもの、など種々あつて、中には、能の現在物——武家社會の人情・事件を寫した、當時の世話物で、能樂に於ける幸若的要素——幸若は能にとり入れられて現在物になつた——と、曲目も、其に通じてゐる感情も殆似てゐるものが少なくないが、しかし、其によつて直に、古く幸若が東北へ這入つてあゝした形で残つたとは斷言出來ない。根子の番樂の中、曾我や鈴木三郎の様な現在物式は頗る亂暴で、改良劍舞の様などころもあるが、東北の藝能には通じてあゝした要素があるのだから、此を直に能樂の原の形と見るのは危険である。別にさうした系統のものがあつたのだらう。あまりに能樂と似た過ぎる。臺本も違ふ。勿論、能樂も昔は今の様に納まりかへつたものではなく、活潑なものであつたらうが、さうしたもので説明するよりも、能樂と違つたものゝあつた事を考へて見るのが本道だと思ふ。

とにかく、この間の大會は、日本の藝能にどこまでもつき纏うてゐる要素——念佛——を避けてやつた訣だ。事實、念佛要素は、大抵の舞踊・歌謡に這入つてゐるので、陰慘な氣持ちがさせられるが、此度はそれがなかつた。その點もの足りなかつたが、いつになく陰鬱な氣持ちから解放されて非常によかつた。

感謝すべき新東京年中行事

——第四回郷土舞踊と民謡の會・評——

昭和四年六月「民俗
藝術」第二卷第六號

大體の感想は、日本青年館での合評會で申し述べたから、其機關雜誌「青年」に載る事と思ふ。其を御参照願へれば結構である。たゞ爰では、熱心な傍觀者が、日本國中の手のとゞく限りの民俗藝術を、眞の意味に於て自分の實證的態度を鍛鍊する氣組みで見つて歩いた、さういつた態度を離さないで、今度も見せて貰つた其感想を記録して置きたいと思ふのである。

まづ演出に對して

日本青年館の此事業に對する毎年の苦勞と言ふものは實に感謝に値すると思ふ。ついでは、柳田先生、高野博士、主としては訓練のない田舎の藝術團の爲に、骨を削る様な苦勞をして下さる小寺融吉さんの努力を、我々會員は協同にねぎらはなければならぬ氣がする。たゞ忌憚のない感じを申すと、あまりに小寺さんの近代的審美感から、極めて僅かではあるが、時々生のまゝの原

感謝すべき新東京年中行事

形をまげて居はしまいかと恐れさせられた事である。しかし、此は東京へ持つて來ると言ふ意識の爲に、縣廳や村に於て既に大修正を施して居るものが多々あるに相違ないのだから、演出者の潔癖な整理から出て來る僅かな形のひずみぐらゐを問題にしては罰が當ると思ふ。欲を言ふなら、其演出の努力の中心を、舞臺效果に置かないで、地方人の謂はれない新意匠の混つて居る點を洞察して、出來るだけ原の姿にひき直させると言ふ點に置かれないだけは願はないで居られない。此はこの事業を、民俗的にするか藝術的にするかの大切な岐れ目だと思ふが、恐らく此點では、小寺さんにも迷ひがあり、尊敬する二先輩にも解決がつき切つて居ないのであるかと思つて居る。一例を申すと、今度も淡路の大久保踊りの音頭の服装に就いて、大分我々の間に修正案が出て居たが、結局、つとめて田舎らしい味を出さうと言ふところに落ついたのであつた。だが、此なども、土地では存外田舎らしくない姿をとつて居るのかも知れないのだから、其を我々の心に這入り易い古風にひき直す事は、やはり藝術的に修正するのと同じ缺陷がありさうに思はれる。どの道、民俗藝術と言ふものは、都會式な、我々の欲しないでかだんすをも滋養分として常にとり込んで行つて居るので、其が同時に發達の動力にもなつて行くのであるから、此點に考慮なく、たゞ我々の趣味に叶ふ古典味を附加しようとする事は、多少本質的の誤りを含んでは居ないかと思ふのである。

尙一言、藝術的態度に就いて申したい。青年館の立ち場からすれば、新しい綜合藝術を田舎生活

へ與へようとする點に、意義を見出して居られるのであらうが、我々から申すと、其ならば今少し大膽な修正を加へていゝと思ふ。しかし、さうした修正は、うつちやつて置いて、刻々に地方々々で行うて居るのであるから、此催しでは、たゞ地方造型美術の展覽會を開く意味に於て、あまり藝術的と言ふところに目標を置いて戴かない方が、演出者も樂であり、見て居る我々も、眞の過去の生活を顧みさせられる事になると思ふ。

悲觀せず居られない日本の民俗藝術

青年館の事業に於てだけでなく、田舎を歩いて見ても常に感じる事であるが、日本の現在の民俗藝術の出發點が比較的近代にあり、而も、其本源が極めて單純で、今尙分化の過程の複雑でない事を思はせる事が屢である。殊に今度のものに於て一層此感が深められた様な氣がする。合評會の席上で此事を話して、柳田先生から大分訓戒を戴いたが、どうも其氣持ちは、やはり移らないで居る。大體に於て、念佛系統・萬歳系統、此二つに分れ、而も其が近世の演藝者の演藝種目の關係上、混亂を來して居ると言つた、極めてものたりない言はうか、寂しすぎると言はうか、當代の隱者、榎本其角でもあり、平賀源内でもあり、又、原武太夫でもあり、更に最適切には蜀山人を思はせる偉才兼常清佐先生をして、極端なる無視と殘虐をホシイマ壇にするにまかせるより外はないと言つた歴史的の事情があるのである。日本の民俗藝術をあまりに悲觀しすぎると、柳田先生は仰言つたけれども、どうしても悲觀せず居られない。其程分化展開の程度が低いのである。

此事に就いては、必兼常先生が同じ誌上で實證して居られる事と思ふが、實際否む事の出来ない事實なのである。

異彩を思はせた臼太鼓踊り

其中、やゝ面影を異にしたものは日向兒湯郡の臼太鼓踊りであつた。此には、南國の種子を十分に有して居る事が見られ、前の二つのものよりは、根本に於て古代が伺はれると思つた。でも、其演技法に於ては、かなり近代化したものを見た。私どもは、舞踊音樂の専門家でないだけに、或點には囚はれないで、其ものゝ本質を見る餘裕を持つて居る様な氣が、他の方々の話を聞いて居る中にしたのである。此踊りが、最現代の生活に受容れられ易い事は事實でもあり、訓練其外に行届いて居る點では感心させられて居るが、不幸にして王様の襦衣を空想化出来なかつたあらびやんないとの子供の様な門外漢は、如何に藝術味を要求しないとは言へ、此を藝術國へ持ち出さうと言つた一部の企てと其勇氣には驚かずに居られない。

全體、臼太鼓踊りなるものには、名前は一つでも、いろ／＼違つた、とんでもない種類のものが含まれてゐる。だから、此一つでは、九州南部はもとより、南島地方の臼太鼓踊りの標準的のものと言ふ事も出来ない。寧ろ、臼太鼓踊りの名をかりた他の民俗藝術と言ふ方が正しいと思ふ。念佛踊り・萬歳の外に立つ唯一のものとして擧げた此ですらも、御覽の通り、其音頭・囃しは極端に念佛であつた。此では、悲觀しないでどう居られよう。此は、鹿兒島の妙圓寺メウエン參りと同じ系統

のもので、一方に祭りの時の大名行列の姿になつて行くものであると思ふ。要するに、成年戒の時にあたつて行はれた激しい南島風の舞踊が、次第に他の民俗藝術を含んで變化して來たものに相違ない。あの背に背負つた、我々を喜ばした、丈高い指物は、確かに或時期に於て伊勢踊りの要素を含んで來た事を示して居る。即、お伊勢様から貰つて來る萬度祓の一種がだん／＼に誇張せられて來たのだと思はれる。

伊勢踊り・たゝら踊りと物忌生活の印象と

伊豆新島の盆祭り祝儀踊り。これも近代に、念佛者——門ぼめ・家ぼめの萬歳式を含んだ——が此離れ島へ渡つて、青年期を印象する舞踊の上に面影を止めたものと思はれる。而も此には、伊勢踊りの要素が十分にとり込まれて居る事は、其演藝種目に伊勢踊りのある事から見ても知れる訣だが、第一、傘ぼうろくと稱する、其傘鉾が證しても居る。又、顔を極度に隠すかゞみ幕を垂れた棲折笠が證しても居る。若しあの中から強ひて、更に古い新島の姿を求めようならば、はちまきの裾を垂らした下緒と稱する、伊豆七島のものいみ生活に通じたはちまきの固定した形である。

更に、此は偶感的な事ではあるが、此盆踊りの中に、或はたゝら踊りの系統が色濃く流れて居るのではないかと感ぜられた。あの扇や足の遣ひ方に、たゝら・棒づき——どうづき——或は堂供養の要素が濃厚に見られる様な氣がしたのである。

たのむの神事から上覽踊りへの推移の跡

同じ系統のものに、飛驒宮村の神代踊りがあつた。此踊りに對する一般的の批評は、新島の盆踊りと對照して、其時代が遅れて居る、其だけ藝術的に或洗練が加はつて居ると言ふ點にあつた様だ。後半の批評は、藝術批評は控へねばならない私にも訣る様な氣がする。けれども、前半の批評は、其が全體の爲組服装などの點から出て居るところを考へると、遽かに賛成は出來なく思ふ。爲組の中にも、部分的に變化があり、固定がありする點を見なければならぬ。殊に服装の上では、其が行はれる場合を考慮において見なければ問題にならない。所謂桃山時代以後盛んになつて來た上覽踊りに於ける庶民の服装が、更に時を経て洗練せられてあゝいふ風になり、又、或期間の中絶が、此を一層華美に飛躍せしめた處なども考へて見なければならぬと思ふ。

此踊りで注意すべき點は、あの一群が四組に分れ、各組に一人宛、女に扮した、さうして風流笠を戴いた男の交つて居る點である。此は數个の字から一个所に練り込むと言ふ風習が出来る以前の形を思はせるものであつて、元は水無神社に行はれた、八潮頃のたのむの神事であつたのではなからうか。即、收穫を直後に控へて此を祈る行事で、西出雲では、現に今でも念佛踊りと稱して居るものである。演技に於ては、練れて居るけれども、新島のものよりは寧ろ素人意識の多いものと考へられる。何にしても大分近代味の加はつた、殊に衣裳に於ては最近のものが加はつて居る様に考へられるのは残念である。此は友人河合繁樹さんあたりが、今少し古風にひき戻す工風

をして戴きたいものと思ふ。さうして、宮に仕へる若者衆が行つた念佛踊りが、更に上覽踊りに變つて行つた道筋を、今少し考へ易くして貰ひたいと思ふ。恐らく昔は、もう少し藝術的感興のあつたものであつたらう。

民俗藝術史の立場から

會津の玄如節は、非常に統一のついたものであつたが、一點のもの足りなさがあつた。あまりに自由で、少しの拘泥もない、と言つたところが、却つて缺點だつたのではなからうか。それに、藝を見せると言つた意識のある事が我々にも感じられた點が、如何にも残念だと思はれた。あれでは、どうしたつて向うに磐梯山が聳えて居るとは思はれない。會津平野で踊つて居ると言ふ氣持ちでなく、やはり東京の人達が見て居る前で踊つて居ると言ふ意識の方が強く、如何に自由な踊りぶりであるかを見てくれと言つた氣持ちが、我々の胸にも這入つて來た。勿論、其が同時にあれの面白かつた所以でもあるのだけれども、まう少し、さうした優越感のなかつた方がよかつた様な氣がする。だから、さうした優越感のあつた人ほどいけなかつた。人を指しては氣の毒だけれども、あの中では一番うまくもあつたのだらう。それにいろ／＼他人の世話をやいたりしなればならない地位にあつたんだと思ふが、最後に水を飲んできつかけをつけた人があつたが、あの人から受けるものが一番感銘が不純だつた。此點では、水を飲ました演出者にも不平はある。しかし、日本のかうした大衆的な藝術に、あゝしたせんちめんたりらずむな氣分は、最早滅びる時

期が來たのだと思ふ。勿論、大衆藝術には當然感傷味がなければならぬのではあるが、現代では、さうしたせんちめんと以外に、もつと外の或ものが加はらなければならぬのだと思ふ。

たゞ、爰で民俗藝術史の立ち場から感じた事を一言申して置くと、普通吾々が言ふ長篇の口説節以外に、どゞ逸に近い形の——なげ節以前から見えて居る傾向の——短い口説が出来て居つて、其が長い敘事詩の代りをして居つた。そして其が、地方々々である空想づけられた名高い來歴を持つた民謡を作る事になつた。譬へば、追分の如き、おぼこの如き、或は此玄如節の如きものが出來たので、其起源は、勿論、ほそり・なげ節などの起源になつて來るのだらう。けれども、さう言ふ一つの、日本民謡史の中の或視野が、此唄をきき、此踊りを見て居る中に展けて來た様な氣持ちがして來たのである。此玄如節の如きも、玄女と言ふ女が居つて此唄が出来たと言ふけれども、其は反對に、此唄からさうした空想の人物が生れて來たので、又、玄女の名そのものが、唄ひ方やら發音やから生れて來たのに相違ない。そして其が無限に替へ唄を作つて行つて、やがて一つの民謡の一群團をなすやうにもなつて行つたのであらう。

練道・立合の演劇化せる前と後と

淡路の大久保踊りに就いては、或晩一緒に見て居た北原白秋氏が、此と同じものを大分の臼杵でも見たと言つて居られた。さうして見ると、存外我々の知らない陰に、いろんなものが廣く分布して居ると言ふ事が感じられる。私の感じた處では、此藝は、阿波方面で盛んに行はれる、先に

述べた堂供養から出發したと思はれる、たゞら踊り・笠踊りの演劇的な要素を多分に含んだものらしい。第一に細い廊下のやうなところを練り歩くと云ふ事が其である。此形のだん／＼發達して行つたのが、川崎音頭・伊勢音頭、引いては明治の都踊り以下の練り踊りを形づくつて來たのである。そして其間變化を求めざる爲に、一組づゝの演劇的な要素をもつたものを入れる様になつて來たのが、白石・寺子屋・土橋などであるのだが、爰で注意すべきは、何故その間に刀の類をとり扱ふ事を主として居るかと言ふ事である。單に演劇的の要素を入れると言ふだけならば、必しも刀を振り翳すものと、此を受けるものとの對立だけにしなくともよい筈である。此は、刀を持たせる前に、相舞アヒマヒよりも、寧、立合タチアヒとも言ふべき、同じとりものを持つて對立的に舞ふ風があつたのであらう。其が多くは長い棒の類であつたところから、かうしたものが發達して來たのだと、私は見たい。そして、其立合の形を作らない前のものが、髭奴・三階笠・片手枕・淀の車などであらうが、此とても、既に練り踊りの形から、一步相唱的な繰り返しの形が出來て居たものと思はれる。だから、其以前には、個々別々な服装と即興的な舞踊で、練道風に練り歩いた姿を思はせて居るのである。

演藝種目の固定に對する打開

尙此機會に述べて置くが、私は、いつでも此郷土舞踊の會に、日本の舞踊の一原理になつて居る、極かすかな演劇的な味を含んだ、演劇的なものが避けられ勝ちな傾向にあるのを遺憾に思つて居

る。若し此が、職業的であると言ふ、或は都會的であると言ふ事の爲にさうされて居るのであるとしたら、そこに尙一層の苦心を願つて、都會的・職業人的でないところの演劇舞踊の發見と紹介とを一つの標目にして戴きたいと思ふ。でなければ、我々は、少くとも平安朝以後の歌謡・舞踊に通じて居る一大原動力を見落す事になるのである。

何にしても青年館の毎年の努力に對しては、二本の手では賛成し切れないほど厚意と満足とを感じて居るのであるが、外の方々も既に感じて居られる様に、こゝで一飛躍をしなければ、演藝種目の上に或固定が出來る事は事實である。其には、かう言ふ方面を考へて見る事も、確かにさうした方面の一活路を開く事になると考へられるのである。

どつさり節と六齋念佛と

あまり長くなつたが、あとの二つに就いて一言だけ言つて置かう。

隱岐のどつさり節の如き、山城の六齋念佛の如き、片方は追分の一分化と稱しながら、極めて追分とは縁遠くなつて居る點に於て、日本民謡の或性質が見られる様に思つた。

六齋念佛では、殊に出て來た村が、上葛宮吉祥院であるだけに、御靈信仰・念佛などの關係が、深く我々の歴史的考究慾をそゝつたのだが、譬へ、私の考へる民俗藝術の範圍は全然離れて居ないにしても、既に私が最後の條件を加へた部分の民俗藝術に入り過ぎて居るものである。若し此を許す事の出來る雅量があるならば、今少し靜かな、今少し演藝的でないので、而ももつと田

舎の演劇的な要素を含んだ——演劇藝能の歴史を顧るに好都合な——材料がたくさんあるに違ひないと思ふ。

しかし、何の彼のと言うても、我々は街に居ながら、靜かに田舎の人と同じ呼吸をかはす一夜を、譬へ一年の間に數夜だけであらうと得られると言ふ事は、幸福な年中行事だと感謝をして居る。

組踊りの話

昭和十一年六月「日
本民俗」第十二號

組踊りは、また冠船踊りとも言うた。明治以前、今の尙侯爵の先祖が琉球國王であつた當時、その代替り毎に、支那がそれを認める冊封使サツポウシといふものをよこした。その使者を乗せた、飾り立てた船をお冠船といひ、それを迎へる踊りであつたからだ。其時には、王宮内に舞臺を造つて、そこで演じたので、役者は、すべて貴族・士族の階級から、主として若いものを選んで訓練をしたのである。それを、踊りの性質から言つて組踊りと稱した。

組踊りの話

すべて演劇は綜合藝術であるが、殊に組踊りはおべらの様なもので、沖繩の演劇・舞踊・歌謡・器樂の類を全部とり込んでゐるので、それが幾組か連続的に行はれるのである。で沖繩の人は、組踊りとは、幾組か組んだ踊りの意だ、と感じてゐる様であるが、私は、さうではあるまいと考へてゐる。何故ならば、演藝種目の全部が組踊りでなく、その中の、特に演劇的なものだけを言つてゐるからである。或は、殊に面白いものを言つてゐるのかも知れない。とにかく、普通沖繩では、劇的爲組みの濃厚なものだけを組踊りと言つて、他の奇術的のものは、組踊りと考へてゐ

ないのである。

ところが、只今では、沖繩でも、此組踊りをいつでも見るといふわけに行かないのである。一人でやれる藝でないから、いつでもやれる、又、一度やれば一年後にやれる、といったものでなく、數人が相當の期間稽古をしなければならぬので、段々衰へて來た。明治以前は國王の保護があつたけれども、明治以後はそれがなくなつたので、もう眞面目にやれなくなつたのである。只今残つてゐるのは、一代前の冠船踊りをやつた人が好きな人に傳へた、それが残つてゐるのであるが、その先輩達も、もう古老に達してゐるので、此人達がなくなれば演出をする人がなくなつてしまふ。我々が急いで此催しを企てた所以である。

今度もつて來る組踊り四つは、いづれも本土の能と關係のあるもので、考へ方によつては、能を觀た沖繩の人が、國へ歸つてその地の事情に合ふやうに作りかへたとも見られるのであるが、本道は土臺になるものが向うにあつたのである。それが、本土の發達した演劇に觸れて、新しいものを書き、振りをつけ、曲をつけるやうになつたので、此中には、まださうした影響をうけない前のものと近代にとり入れたものとが交つてゐる。で、向うまでもて囃されるものは、本土の眞似たもので、沖繩のものは、劇的興奮が少いと言はれてゐる。譬へば、「手水の縁」などは、沖繩の豪族の息子と娘とを取材にした、沖繩の事情に通じたものであるが、一向に面白くない言はれてゐる。

此度持つて來る「二童敵討」は、疑ひなく「小袖曾我」の焼き直しである。工藤に當るのが、勝連の阿摩和利といふ傳説的の梟雄でそれを鶴松・龜千代の二人が討ちに行くのである。阿摩和利は、玉城盛重氏得意の藝で、花道を出て來て、七目付といふ事をする。沖繩の人は、それを大變感心して見てゐるが、恰度、能や歌舞妓を鑑賞するのに特別な見巧者があるのと同じで、約束上感心してゐるだけの事で、根本的には何もないのである。沖繩の人は、勿論、日本民族の別れであるが、永く隔たつてゐた爲に、表情言語に通じない點がある。それを乗り超えて感心出来る處と、それが牆壁になつてどうしても感心出来ない處とがある。藝術に國境なしなどいふ事は、空想であると同時に、根本的に共通な點がある。此度のやうな機會に、それを自分の心で計つて見るのは一つの收穫であるだらう。

「執心鐘入」も、道成寺の翻譯だと見られる。本土でも、鐘巻といふ語を使ひ、能では蛇が鐘に這入る事になつてゐる。それを、地理・事情だけは沖繩風にしてゐるが、土地が狭いので、空想を飛躍させる事が出来ない。従つて爲組みも小さくなる。此などは、種が向うにあつてこちらの爲組みを入れたのか、全然本土のものを持つて行つたのか、問題だが、私は、持つて行つたのだと考へてゐる。

「銘苅子」は、銘苅子といふ農夫が天人に遇つて羽衣を隠し、夫婦になつて二人の子供を儲けるが、十年の後、姉が弟を守りしながら、子守り唄で母の飛衣の在所をあかす。天人はそれを聞いて飛

衣を得て再び天に舞ひ上るといふ筋で、沖繩に昔からあつた話であるが、こちらにも、謡曲の「羽衣」以外に、色々な傳説があつたので、それが一緒になつてゐるのである。實は、銘苅子の發見したのは羽衣ではなかつたのであるが、それを謡曲の「羽衣」風に直してゐるので、「銘苅子」の方が、謡曲の「羽衣」よりも人間的であり、今残つてゐる戯曲の中で一番文學的なものであるが、あまり文學的なものは、却つて、見て面白くないかも知れない。

「花賣の縁」は、首里の士族森川の子が零落して妻子を首里に残し、自分は國頭といふ田舎——昔の奥州といつた所——へ働きに行く。後、妻が出世をして、夫に遇ひに行くといふ筋であるが、それだけでは簡單であるから、中で猿曳きなどが出る。此趣向は、明らかに歌舞妓の影響と思はれるが、筋は本土にも大昔からある話で、その戯曲化されたのが謡曲の「蘆苅」である。沖繩の人にはやはり此が憐れに感じられるのであらうが、我々が見ては、「蘆苅」よりも、その點薄いやうである。來る役者は、同地で名人として尊重されてゐる玉城盛重氏と、同じく名人と言はれてゐる新垣松舎氏との外、二十名ばかりで、市會議員や女學校の先生なども交つてゐるのである。沖繩では、踊りも三味締も、男の藝になつてゐるので、女で三味線を弾くのは、尾類といふ女郎だけである。勿論、近頃では、女學校で三味線を教へるやうになつた相だが、以前は、藝事はすべて紳士のものであつた。

で、かういふ組織の出來てくる前の形を見ると、村踊りといふものがある。今は、孟蘭盆に、若い者がやるので、それを年長者が指導するのであるが、本來は、若者に成年戒を授ける儀式として行つたものである事が考へられる。それが、都に這入つて複雑になつたのであるが、王に見せるといつても、京都の禁裡を思ひ浮かべてはならない。江戸柳營を頭に置いても、比論は成り立ち難いので、先、大々名の家庭に將軍家の生活氣分を加味した位の考へ方がほんたうだらうと思ふ。それほど氣易い處があつたのを思はねば、民間との交渉ぐあひが察せられないわけであるが、とにかく、この村踊りが宮廷に這入り、それが江戸時代になつて、朝聘の爲、屢、江戸や京都に赴いて、能や歌舞妓を見て、その影響をとり込む事になつたのである。かやうな訣で、劇の筋は本土的のものが多く、その爲組みには、出來るだけ、歌や踊りがとり込まれてゐるので、その點に注意を向けられていゝものがあらうと思ふ。役者の身振りや表情などでは、こちらへ影響するものがあるまいけれども、器樂や舞踊には、必、影響するところ多からうと考へるのである。

沖繩舞踊に見る三要素

昭和十一年五月「新
鋪道」第二卷第五號

沖繩の舞踊は、全體に、今常識的に、まひと稱してゐるものと、をどりと稱してゐるものとを兼ね備へてゐる。此、まひの要素は、古い、おもろあそび（巫女の鎮舞）の系統に、やまとの舞ひぶりを加へてゐる様だ。をどりといふべきものは、南島の更に南の海のアマタの島々のものを明らかに印象してゐる。而も、此中間に立つ舞踊が多い。やまとの緩やかな舞ひを南島流の早間に踊るものである。等しく踊りというても、間を緩やかにするものが上品だと考へられたらしく、さうしたものが次第に殖えて行つたのであらう。此島にも、あそびとをどりとの間位づけが出来たのである。だが、此はやまとの檢校流の奏樂法や樂器など、共に傳へた、後のものが多からう。其以外、古く這入つた千秋萬歳のことほぎ系統に屬するものが、極めて多く残つてゐるが、それらは皆、やまとの萬歳に見られぬ程の早さながら、日本の舞ひぶりが基調になつてゐることは、その服裝以上に明らかである。だから、私は思ふ。念佛聖の念佛踊りや萬歳舞ひを見た事は、島人の踊りの上に非常な動亂であつた。さうして、茲に琉球の踊りは、在來の託遊式のあ

そびに近い、而もある觀念と感情とを備へたものらしくなつたのである。其後、江戸への朝聘、鹿兒島との交渉が生じてからは、盛んに新しい使ひを迎へ送るやうになつて、やまと音樂と共に、舞ひや踊りが這入つて來たのは勿論、さうして第二期の整理が行はれたと見てよい。沖繩の踊りを通じて見られるものは、此三種の融合し或は混淆したものである。が、その特色とする所は、手の使ひ方・上體の動し方・足の蹈み方・踊りの間のきり方などに、現れ過ぎるほど現れてゐる、固有のふりである。支那舞踊の影響は、今の處、私にはありさうに思はれない。同様に、能や歌舞妓の所作事なども、交渉はないと見てよいと思ふ。

同胞沖繩の藝能の爲に

昭和二十五年六月「宮
古島縁起」プログラム

渡嘉敷守良君が戦争中を無事でゐたことは、何にしても、琉球藝能にとつて幸であつたと思ふ。戦争前に新垣松舎が亡くなり、又最幸福さうに見えて、定めて圓滿な晩年を遂げるだらうと思つてゐた玉城盛重老人が、國頭のどこかの村で、斃れ死んだと聞いてゐる。そんな中に、恰も琉球藝能の命脈を、この程度につけて行つてくれると言ふことは、藝能人にとつて、どれ程喜んでよい爲事か訣らない。渡嘉敷君は正にその位置にゐる訣だから、十分その名譽と、更に大きな責任を負うてゐる事を自覺してもらひたい。渡嘉敷君は特に女踊りの達人であるが、年輩からして、老人踊りを踊つても如何にも優雅な味を示すやうになつて来た。舞や劇に優れてゐる事に、此人の才能を尊敬するよりも、まづ第一に、私などは、もつと此人の人間の優秀なのを知つてゐる。藝人らしくない、人間のよさにおいては、前にあげた二人よりも出来た人間だと思つてゐる。唯それだけに、人のよさから来る意志の弱さのあるのを、歎かずにはゐられない。あれだけ力を持ちながら、まゝ自信を失ふことがあるのではないか、と言ふ氣がする。又その周囲にゐる人間に

對しても、もつと目を睜る必要がある。さうした人の不心得が、渡嘉敷君の缺點として、人に寫つて来る。それよりももつと惜しむことは、男子の弟子を育てるだけの意力を缺いてゐる點である。沖繩の踊りは、ちつとも女性の力に依頼することなく、永い歴史を経てゐる。女踊りにしても、女性の参加にたよることなく發達して来ただけに、その良さも、すべて男性的な點にある。女性が琉球踊りに不適當なことは、尾類ズリの踊りを見ても訣る。守良君がその名の如く、沖繩の踊りの良質を守り遂げようとするならば、もつと男性の踊り手を養成してくれなければいけない。又沖繩の有志の方々も渡嘉敷ばかりに、藝能の苦勞をさせると言ふことはない。あなた方はもとより、あなた方の子弟、及びそのほかの人々に踊りの教習を受けさせたい。これだけ、何よりも先に氣を揃へてしなければ、沖繩の踊りは亡びる、の一途を辿る外にない。あなた方に、あなた方の嫌ふことを強ひるのではないから、私は楽しい氣持ちで、この提案をあなた方にする。

まづ渡嘉敷に男弟子あれ。

これが渡嘉敷君並びに沖繩同胞の方々に言ふ第一のことばである。

沖繩を憶ふ

昭和二十一年八月「時事新報」

420

一
秋の日は、沖繩島を憶ふ。靜かに燃ゆる道の上の日光。島を廻る、果てもない青海。目の限り遙かな水平線のあたりに、必白く碎ける干瀬——珊瑚礁の波。私は、島の兄弟らが、今どんな新しい経験をしてゐるか、身に沁みて思ふのである。

島の寂しい生活も、も少し努力すれば、心だけは豊かにさせることが出来た筈であつた。元々、我々「本土日本人」と毫も異なる所なき、血の同種を、沖繩びとの上に明らかにすることなく、我々は、今まで経過して來た。今になつても、まだしみじみと血を分けた島の兄弟の上を思ひ得ぬのは、誰よりも、歴史・民族の學徒が、負はねばならぬ咎である。

我々と、島の兄弟とが、血と歴史とにおいて、こんなに親近な關係にあつたことを、本土と、島の全日本に、もつと早く學問の上から呑みこませて置かねばならなかつたのである。どうしても離れることの出来ぬ繋りと、因縁とを、なぜはつきり告げて置かなかつたかと言ふ後悔が、此頃

頻りに私の心を噛む。

支那から殖民したものの子孫だといふ風に、沖繩びとの出自を空想してゐたことが久しかつた。その妄想が、少くとも島の知識人の間では、近年可なり正されて來てゐた。我々の兄弟であることを悟つて喜び誇り、手を取つて、相離れぬ深い因縁を感謝したことであつた。併し其間も、日本本土の人々は、知識あるも、又その乏しきも、さう言ふことには、關心も感激も、持たぬ様な顔をしてゐた。けれどもさすがに、半世紀昔のやうな、新しく領屬した島及び住民だと謂つた考へ方は、せぬ様になつて居た。

くり返して言ふ。

沖繩の人々は、學問上我々と、最近い血族であつた。我々の祖先の主要なる者は、曾ては、沖繩の島々を経由して、移動して來たものであつた。其故、沖繩本島を中心とした沖繩縣の島々及び、其北に散在する若干の他府縣の島々は、日本民族の會て持つてゐた、最古い生活様式を、最古い姿において傳へる血の濃い兄弟の現に居る土地である。此だけは、永遠に我々の記憶に印象しておかねばならぬ事實である。

沖繩を憶ふ
この島々、今後地圖の色わけはどうなつて行かうとも、寂寥なる人生の連続することにおいては、ちつとも變ることはないだらう。さう言ふ島の人生の間にも、この血の歴史を思ひなくさむよすがとして、空漠たる此から先の長い年月を、健康に長らへて行つてくれたまへ、と私はかう言ひ

421

たいのである。

二

島にはまだ、独自の藝術の生まれる機会はなかつた。さう言ふ博い人生の存在を暗示する文化が興るには、島の社會は、狭きに過ぎてゐた。たとへば、些少の誇張を用ゐれば、王宮の門と、町民の背戸とは、相望むことが出来た。事實においても、「尙」王家の數代前の御主「顯王」など言ふ御人は、離宮で作つた瓠を、那覇の市で賣らしめた。人之を「王様瓢」と稱へて、購ひ求めたと傳へてゐた。其程、王と市民との生活は、接近して居た。ほゞ笑ましい生活ではあつた。が、あまりにも世間が狭過ぎた。歴史上久しく、日本と支那に兩屬すると謂つた、首鼠兩端の生活を破算して、元の姿に戻つたのは、明治初年以後のことであつた。彼我共に、歴史と歴史以前の民族の繋りに知識乏しい人々は、此時を以て、琉球が支那領を離れた時だと言ふ風に誤解して來たのである。此ほど、間違つた事はない。我々の親しい琉球の歴史・民族をそんな風に理會し、整頓して居たのだから、今日のやうな形に到達したのも無理はないとも言へよう。

藩籍奉還の後、俄浪士の嘗めた辛酸は、激しかつた。殊に江戸の町侍は、最苛烈な經驗をした。琉球でも、廢藩後日清戰爭までと言ふから、二十年の長きに涉つて、首里の舊士人の生活は、全く傷ましいものだつた相である。蛇皮線を愉しむだけの餘裕すら失つた彼らは、唯二人三人相寄

三

つて、ひそかに指拳を遊んだと言ふ。今も一つ話に傳へてゐる。大きな社會を背負はないところには、當然藝術に對する擁護力も考へられない。又、一躍して大藝術の生れる素地となるべき、面の廣い技術なども、興つて來にくいものである。だから藝能はあつても、藝術に飛躍する時がなかつた。藝術に迫る程の藝能はあつても、其を躍進するだけ技術が進んでゐなかつた。民俗藝術と、一口に言ふが、その内容は、水と油の様なものを一つにして、命けた名である。所謂民藝など略稱せられてゐる造形物には、家具調度の外に、農具・建築の類まであつて、其が更に、もつと廣い言語技術に關するもの、舞踊・演劇の素朴な種類まで含む。藝能といふ語を以てしても、やはり此位の範圍は、指すことになつて居る。藝能と謂つてよい限りに於いては、沖繩には可なり優秀な物と件とがある。畫や建築は發達しなうな種子を十分に示して居ながら、狭い社會が、之を發揮せしめなかつた。手藝に屬する所謂「民藝品」は、柳宗悅さんの同人方が、ほゞ調査し盡して居られる。殊に女の手藝に、著しいものがある。何しろ島の月日は、「暇」と「根氣」とに飽かせた爲事をするに、十分であつた。「紅型」として、以前から愛好者のあつた染め物などを見ると、家庭工藝の度しやかな成迹の、段々高まつて來た徑路が感ぜられるのである。

沖繩には種類は少くても、他に類例がない程、壺屋の技術が発達した。つまり琉球焼きといふのが、其である。瓦と壺との間に行く様な物で、實は、墓に置く骨甕の用が多い所から、出來た産物である。却て泡盛容れの徳利などは、沖繩の地出來ではない様である。

古渡りの工藝品といへば、玉ギョクの類だが、之は古くは、首里王宮から下げられ、後には佩用者自身を買ひ求めるやうになつたらしいが、その水晶或はがらす玉を貫いた御統ミスツルの珠の多くは、我々の夢にも知らなかつた間に、本土の玉磨りの手から交易して求めた物が多いらしい。今日見ると、極めて古い由緒を言ひ立てる邑々の巫女の傳へる物も、心惹くこと少き工藝品であつた。だが、記録も傳説も傳へず、想像すら入れる餘地のなかつたやまと島との交通が、かういふ品々から考へられて來る。

織りと染めとは、やまとでも、王朝の昔から、家庭の女殊に、主婦の手わざの第一義的なものであつた。やまと女は、早く染め物だけは、専門の染屋の手に任せることになつたが、島では今も、年中手を藍色にして、女たちが染めの工風にうき身をやつしてゐる。

女の爲さうなことで、之に手をふれるのを厭うて居るのは、樂器類殊に三味線——所謂蛇皮線である。之を弾く者は男であり、女は遊女に限つて、絲を爪弾く。だから、「何々節」と謂はれるものを謡ひ乍ら三味線を弾くことは、紳士の表藝としてやまとの社會よりも、高く見られて來た。唄も躍りも、地方では男女共に謡ひ又は躍る機會は多く、訝しまれることもないが、都ではやは

り、男藝となつて居た。田舎の唄・躍りは、まだ風の音・浪の響きさながらの歌であり、野の魅靈・山の木靈コノミの躍りを思はせるほど、自然の中から遊離したばかりの感じの深いものだが、首里那覇のは、既に藝能から、藝術にすら踏み入つてゐた。其だけに、之を謡ひ躍りする者は、本格的には、男のすることであつた。唄も躍りも、さうして地方のものを、都會でとりあげ、修正し、整頓し、主題を明示した。多少とも藝術的評價を受けてよい「某々節」と稱する多くの曲目が其だ。其だけ自然の魂魄は、地方民謡にあつて、王宮貴族の間で改調せられた謡には、正雅はあつても、純朴は失はれて居る。躍りの場合だつて、同じである。都の躍りは、藝術として見ても相當なものがあるが、やはり潑刺とした所を失うてゐる。さう言ふこと自身が、この舞踊の價値と品位のある所以だとさへ思はれて來た。今は、良家の女の躍ることもあるが、やはり正しくは、男が女装して躍るのであつた。

併し琉球舞踊として、誰が見ても、特殊な感覺、異常なる新鮮味、更に、島の藝能としての價値の大半を定める異郷趣致は、地方的な躍りに、見られるのである。却て藝術化した御殿躍りとも言ふべきものには、それが失はれて居る。殊に、地方の男女が月夜、謡ひ乍ら躍る毛遊モトアソビびその他の群舞、傳説を斷片化した短篇舞曲などの早間なものに、沖繩藝能の高潮した情熱を疼イタい程に感受するのである。

だが、此種の地方舞踊と御殿踊りとを折り合せ、編曲の基礎をやまとの申樂能や歌舞妓狂言に取

つたと思はれる組躍りは、樂劇として、最異色のあるものであつた。

風のたよりに聞けば、今度の壊滅で、三味線を弾く紳士たちは、あら方戦死したらしい。組躍りを演出することの出来る先輩役者も死に絶えた。辛うじて其部分々々を習ひ覺えた中年の俳優たちも、流離し盡したらしい。

國頭クニガミの山の緋櫻のやうに、寂しいけれど、ぽつかりとのどかに匂うて居た沖繩の音楽・舞躍・演劇を綜合した組躍りも、今は再見られぬ夢と消えてしまつたのであらう。

あゝ蛇皮線の絲の途絶え——。そのやうに思ひがけなく、ぷつぷつと——とぎれたやまと・沖繩の民族の縁エモンの絲——。

東北民謡の旅から

昭和十六年五月「東北民謡試聴團座談會記録」

奥州から出羽へかけての旅、時もちやうど田植多タに近くて、馬鋏マノリや、杖エヅリを使ふ人々が、毎日午前中に乗つてゐた汽車の窓の眺めでした。かうして民謡試聴會場に這入ると必、何か農耕と關係の深い民謡や民俗舞踊を見せて貰ひました。昔、芭蕉は白河を越えるとき、「風流のはじめや奥の田植唄」の句を作つてゐます。此は田植多タに都風な唄を用ゐはじめた昔物語を聞いたからでせう。奥州の村人が都の風流にふれたのは、さうしてはこばれた田植多唄を以つてはじめとする。ところが奥州へ這入つて、直に耳にしたのは、「田植多唄」である。それを聞いて、恍惚として昔人に還つた思ひで居たのでせう。奥州の藝能文化の歴史が、人に知られるほどに、遠からぬ世のことだつたのです。私どもは、毎日々々聞いて廻つた民謡や、舞踊の上に、此句とおなじ感傷を浮べて聞いたり見たりしてゐました。

奥州の田植多タ人に歌謡を興へたのは、平家物語を初めて弾いた生佛シヤウブツと言ふ盲人だと言ふのが、「菅菰抄」以來の説ですが、其菅菰抄には、今一説あつて、某大寺の住僧が、奥の人々のあぢきない

勿論生得東北根生など言ふのも、必、あるにはあるでせうが、どれがさうだと言ふ訣にはまゐりかねます。山唄を元とする山唄、「しほでこ節」「山子唄」「萩刈り唄」それから「木挽き唄」のあるものなどは、その労働の性質から見ても、土地と関係の深いものだといふことは訣るが、それでも唄の文句の類型などはなくとも、曲調がどうしても、おなじ東北の中で供給需要をくり返した記憶の明らかなものが多いのである。歌自身が、人の口に憑いて東北の山々をめぐるて来たのだと言ふ考へ方も出来る訣なのであります。今度の旅行にはわりに出ない方でしたが、それでも舞踊となると、どうしてもその俤を封じておく事は出来なかつたのは、東北風神樂の系統の藝能でした。そんな中には、あまり傳説の制約がやかましくて、詞もふりも類型過ぎるものも言ふまでもありませんが、かう言ふものになると、南部津輕の長い確執の歴史もものかは、と言ふ程に類似を保つて居ります。類似といふよりも、一つの物の岐れといふ方が正しいと謂つたものが多いいです。藝能文化ばかりは、政治經濟の歴史状況の影響ばかりにおし籠められて居ないことが、はつきり訣つたのは愉快でした。相馬大作等が立てこもつた山の更に奥には、そんな感情ばかりに拘泥して居ない山の人が澤山居て、もつと嬉しい人情の文化を佗しい生活の上に、授受してゐたのです。田園を控へた村や町方に時を定めて出入した、乞食者流の藝能人は固よりそんな裏日本表日本の區劃よりも、もつと狭い土地の感性を寧、蔑視する様な顔をして自由に漂泊して歩いたやうです。さうしてそれ等のものゝ撒いて過ぎた唄や藝能は、唄は固より、元來藝能刺戟の乏

たつきを憐んで田植多に唄を興へたのだといふ傳へもあつたやうです。ともかくも相當古い時代だとは言つて居るのですが、人がわかつて居るだけに、時代も自ら想像出來ます。年代が知れると言ふことは、傳説の上においては、それが史上の人物・時期を謂つてゐるにしても、可なり降つた世の事だと思はれるのです。ともかく相應に新しい世に、新しい文化の一つとして、田の藝能が奥州に這入つて來たことを知識にする前に、先以つて情緒に沁ませようとしたものである。此句は全く歴史を回想したものでない様に考へられ、その方が通つてゐる様でもある。旅人が奥州風流にふれた第一の印象が田植多する人、その「田植多唄」だとするのである。それはともあれ、私どもは東北六縣民謡の旅から歸る途にも、これと同じ感動を心に強く持つたのでした。これは座談會の節も申しましたが、芭蕉の心持ちも話したのでしたが、筆記には聲がかすれて出て居ません。それでその出發點から筆をつけて、私の座談の行き届かない所を補ひます。

「田植多唄」ばかりでなく、凡古風など思はれる唄でも、奥へ這入つたのは、相當に新しい時代だつたことが思はれます。その當初の印象が、まだ唄の曲節の上に残つてゐると申したのも、此處のことでした。民謡舞踊一つ／＼について、歴史がある訣ですが、詳しいことは勿論わかりませぬ。唯、可なり古く這入つたものも、まだ生き／＼として居り、それが極近代に這入つたものと、新鮮な感觸を以つて接續してゐることを感じさせるのです。随つて土著の歴史の古いものは考へられても、今のところ固有のものを取り出して見るといふことは出來さうありません。

ふことは、津輕・秋田・庄内などの土地が、憂鬱な風景を四季に交替して見せるからと言ふやうなことは言へないやうです。唄その物の旅行と言ふことが哀切な餘情を迸らして、詞章を悲しませるのである。津輕は措く。秋田や庄内は、何處に屈托した表情を示してゐるだらうか。今度の民謡の旅によつて、尠くとも私のした大きな學問は、東北の民謡が、全體として憂鬱な所のないといふ點である。「追分」が悲しいと思ひつく人もあらうが、「追分」その物の、出處に近い中央日本の方が、以前はもつと違つたものだったかも知れないし、尺八に乗つて謡はれてゐる聲は、聲自身が悲しいといふよりも、尺八を携へて流浪した人の生活が訴へる幾代の旅愁が然らしめるものだと思ふ。「馬方唄」としての歴史を發達・流轉の中間に持つてゐる「追分」は本質として悲しいよりは、朗らかな寂しい秋の空の高いのにも譬ふべきものでありませう。「牛追唄」も、山唄のある物も、それから「刈り上げ唄」なども、此類に這入るものがあるのだが、南部の「牛方節」は、牛方の饗宴に用ゐられる事が多い爲か、少しのどかさ過ぎた所があつた。田舎で實際挽いて歩いてゐる時は、もつと人を寂しがらせるふしがあるのでせう。東北には元來抱かれ易い空想があります。土地が古いと言ふ事が、自家の祖先の土着との歴史の古さを示すといふ錯覺を誘ふらしく、多くあいにぬの居つた舊蹟といふ所が、世間人の話の間にも謂はれる。さうしてやつぱり、だから此邊は古くから開けて居たのだといふ。我々の祖先と先住民との關聯をどう説くかと言ふことを考慮の外にしてさう言ふことを言ふ人が、特にある地方には多い様です。あいにぬを言

しい地方人の心に愛惜せられて、物賣りや祝言人の謡つたものが、その身ぶりと共に、とり上げられて、宴席の藝能となつたものも段々あるやうです。中には、秋田の花館萬歳や、庄内の春田打ちの様に、ある地方には、ある家との關係から固定してしまつて、周圍の同様の藝能と比べると、まるで別物のやうに見えるほどの形を持ちこたへてゐるものもあります。又、あのどう言ふ道を通つてどうしてこんな所に來たのだらうと思はれるほど、その唄の歴史ある流行地から、隔絶した奥羽の村に職人唄や、物賣り唄の謡はれてゐるのは、明らかに職人や物賣りの移動の痕を残してゐるものです。

海上や、又それに續いた大河を通して來た民謡は、それこそ自由に遠い海港のものを邊土の濱や渚に残してゐます。そんな中にも筏唄など言ふものは、勞働の性質、又職業の接續からでありませうが、木遣りの姿を見せてゐたのは愉快でした。海から上るとすぐその地の群飲・群舞の詞章となるらしくて、海岸地の宴席や「盆踊」などにはこれが未だ榮えて居る様子が、まぎ／＼浮んで來ました。殊にあの編笠に紋つき羽織で、嬭たちの踊つた「十三の砂山」は唄の文句も相應に古いが、その詞章の載せられた曲節は、古く十三湊に海を渡つて來た西の唄であつた。唄自身はさうした歴史をうろ覺えに知つてゐて、故郷を忘れた悲哀を思ひ沁むやうに、謡ひての口から出て溜め息のやうに流れるのを感じずには居られませんでした。遠海を航して來た印象の深いのは、殊に裏日本の物に多いやうです。だから思ふ。日本海に向つた海邊で謡はれる唄が寂しいなどい

はないまでも「にやにやとやら」の元歌がやはり、さうした傾向を以つて説かれてゐる。之を萬葉假名などで書いて、尊い御方の御作だと説いたりしてゐます。

元來何のこともない「何なとやれよ。何なと爲されよ。何なとやれよ」と言ふ類の文句で、「ささ何でもせい」と言ふ伊勢音頭の囃しと通じるものに過ぎない。謠ふ人は其意味は知つてゐるに違ひないが、書きとつた人が、土地の發音を、さうした風に説く事によつて、もの／＼しく感じてゐるのです。それと餘程用心しなければならぬのが、誰一人異論なく今度の收穫の様に感じた「ほあはい」です。これの分布も思ひがけなく廣いと思はれるのにも驚きました。町田・藤井兩氏などには、既に調査ずみのやうでしたが、唯之をあいぬ關係と説くのは、程度によつて贊成いたしかねるのです。柳田先生も、其座ではつきり言明せられてゐますが、若し先住民が此邊にも居たゞらうと想像せられてゐる時代から、ずつと殘存したものとする御意見が、此囃しのあいぬ起原説の中に、あるのだつたら、それは何處までも、反對申しあげねばならぬのです。第一、どうして聞き覺えたのか、其ともあいぬを以つて先祖とすると説いてもよろしいのか、又どう言ふ手順で少くとも千年以上の前に退却した筈の生蠻の囃しが、我々の時代まで残り得たのか、こんなむづかしい問題の横つて居ることを考へて頂きたいものです。併し、極近代或は明治以後でも、蝦夷松前へ出稼ぎに行つたものが、一種小唄のはしりのやうなつもりで持つて戻つて來たのが擴つたのだと説けぬこともないのですが、其さへ大分むづかしい問題を惹き起しさうに思はれ

ます。珍しい事は、純粹無垢の我々舊民族の間にも頻々とあるのです。地の遠近を根柢にした系統觀は、時には、同一民族を曾ての異種族の末としてしまひかねないことに注意して頂かねばなりません。

今度の旅行で私として得た收穫は、「ほうはい」もさうですが、「よみうた」(讀歌)とも言ふべきものを聞いたことです。上閉伊の「大漁唄」には殊に其傾向が甚しかつたので氣づきました。其から注意して聴きました。古い宴歌には、共通要素として、こんな部分があつたのではないかと思ひます。

宴歌といふと思ひ出されるのは、「いざやまき」と「西馬音内の盆踊」です。あの二つに限らず、ちよつと見は關係ない様で居て、宴席に關係の深いものが多いことを感じました。座敷踊りのことは、町田さんの唄にもありました。座敷の外に、屋臺で行ふ藝能があります。この違ふ點は、少數の人がするので、謂はゞ舞臺に同じです。が、屋臺に居る人の藝能に續いて、見物が囃したり、踊つたりするのは、舞臺藝能と、宴席藝能との相違なのですが、舞臺藝能も古いほど、段々宴席藝能に近づくのです。盆踊りも、實はその部類に這入るのです。扱「いざやまき」は今其地以外ではどうなつてゐるか知りませんが、これは鶴岡の盆踊りに行はれたのが、初めのやうです。が、利用の範圍はもつと廣くなつたものと思はれるのですが、放送局から貰つた本に、鶴岡の俳人河上兆而の筆にはじまると言ふ風にあります。ともかく氣のとほつた人間の作には違ひは

にすら／＼と觸れあつて行くのです。はあ西馬音内から、此だけよいものを発見したのだなと感心しました。さうして、座談の時の主張のあつたことも訣りました様な次第です。さてもつ／＼話があるやうなのですが、あまり長くなりました。こゝで唄と舞との流傳の違ひを一口述べてやめませう。どうも唄は水上から來るものゝ方が、自由であり、又事實も偶然性と云つたものを土地の人情の上に持つてゐるやうです。之に反して踊りはどうも水上から來ることは少くて、従つてあまり思ひきつて遠く遊ばないのが、近代の形の様です。昔は、宗教と手をとりにあつて、随分邊土へ／＼と昂奮を捲き起しながら這入りこんで行つたやうですが、どうも近代は限度が自らあるやうです。其は一つは水上によることが不思議に少いことも、さう言ふ傳播性を縮めたのだと思はれますが、如何でせう。

ありませんが、分量の非常に多いものです。その中、大山に残つたものがこれで、千本櫻關係の踊り歌の外に、くづれたのがあるやうです。鶴岡の町々で行うたものですが、唄から見れば芝居のふりつけか、役者の類が、ふりを一々つけたものに相違ありません。地方の文句と詞とは不即不離の所におもしろみがあり、ちよつとあくの抜けた感じがあります。此は踊り屋臺のやうなものゝ上で踊つたのでせうが、淡路の大久保踊りの例によると、群舞としても行はれぬ事はありません。が、まづ一人踊りでせう。唄は前に言つた様で、よく出來てゐるが、民謡とは全然申されません。秋田の御山囃しを参考に考へて見れば、かう言ふ風になつて行く徑路は察せられます。其が性質をつきとめて來ると、座敷踊りになつて残るのは知れたことです。秋田の方へ行つて「西馬音内」は、如何にも昔の踊り咄など言つた時代の倂のあるもので「秋田音頭」からしてさうですが、こゝのは咄の要素が非常に多い様です。それにやはり御山囃しの系統から出てゐるもので、屋臺の上の藝が重要視せられて居ます。だから踊りは自然に任せてゐるといふところがあります。

此以上の事は、座談の方で申しました。ところが、民謡の旅の後、東京で小寺夫人清水和歌さんの舞踊會があつて、「西馬音内の盆踊」が出ました。これはなる程とうなづかれました。踊りの間が、わざとらしくなくて、極めて軽く調子に合つて行く。少しもぎくしやくすることなしに、うけ流し／＼踊つてゐるやうでなる程と感しました。踊りや囃子と、踊りの手とか西馬音内以上

人形の起源

昭和八年十一月「子供の詩研究」
〔母性〕改題 第三卷第十一號

人形は古くは雛と言つた。雛といふと、雛鳥とか雛型とか言つて、小さい感じが先に立つ。併し、大きい人形もあつたのである。即、巨人を偶像化した人形が過去にもあつたし、現在にもある。これは普通、疫病・風雨等の厄拂ひに用ゐるので、人間が中に這入つて其役を勤める人形（譬へば、人間が肩車をした上に覆ひを被つて巨人の形を作つたりした人形）と本道の大人形とある。また中位の人形もあつた。尤、この大中小の限度をきめるのは困難だが、とにかく、だん／＼小さくなる傾向はある。

大きな人形は、人が中に這入つたのが最初である。次いで人が這入らなくなり、體を露出して其形を作るやうになつた。それがやがて、手で使ふ人形に變化した。人間は隠れてゐる。つまり、元は人形と人間が同じだつたが、次第に分離した。

寫真で御承知であらうが、南洋邊の土人の祭りでは、人間が恐しい巨人の扮装をする。これは信仰の意味を豊かに持つ。日本でも、南方にはこの風習が残つて居る。北へ行くほど人形がおとな

しくなる。

この巨人の人形は、村を訪問して來た神を指す。これを踊り神と稱して、人々も一緒に踊る。言ひ換へれば踊り祭りの中心になるのである。人間が假裝してもよし、自由に動かし得れば人形でもよい訣である。舊日本の踊りでは、やつてきた巨人は爲方がないから、歓迎するやうにして追ひ出すと言ふ形式が習ひになつてゐる。踊りに捲き込んで快く出るやうにする。後になれば、風の神や疱瘡神の機嫌をとつて送り出すのだが、昔は善惡の神を問はず、共通の送迎の爲方があつたのである。

鷹狩りと操り芝居と

昭和七年七月刊
「國文學者一夕話」

今度計畫せられた此書物は、類變りの隨筆集といふだけに、識り合ひの方がたが、どんな計畫で、思ひもかけぬ事を書かうとして居られるかといふ事が、かうして居る今でもまざ／＼と胸に泛んで来る。多分皆さんが、専門違ひの變つた通の話を、試みられるらしく思はれる。これが、本屋の番頭さんが見えての話である。だからといふ訣ではないが、私も少々變つた話を申し上げたい。鷹に關係した書物、並びに鷹百首といった類の書き物は、我々が見て居るだけでも随分際限のない未見の部分に豫想せしめるものがある。その澤山あるものゝ中から、僅かに讀んで、而も術語によつて覆はれないで理會せられた部分だけから、簡単な幾種の結論を、幸ひに引き出すことが出来た。これからの話もその一つである。

古く、平安の貴族社會に行はれた大臣大饗に、庭前で犬と鷹とを使つて、小鳥狩りの眞似をした。これは愈、あるじぶるまひに這入つて、雉子を出すことの前提と見られて居る。光孝天皇の御幸運に關聯した物語を伴うて居るだけに、この雉子並びに小鳥狩りは、深い因縁を思はせるものがある。

ある。

物識りぶつた思はせぶりを差し挿む事が許されば、この日宮廷から遣される賜物の品物と共に、大變な興味と、疑問とを含めて居るものである。

武家時代の早い頃の繪巻を見ても、宴會の催される家の庭には、多く鷹が架かの上に据ゑ置かれて居る構圖が見られる(拾遺古徳傳など)。さきに出た繪巻の類型と思はれるものもあるが、事實あつたことには違ひなからう。その架には、所謂架衣かえと稱する布が垂れてある。謂はゞ巾の廣い几帳のやうなものと見てよさうだ。

新村出先生は、日本に於ける鷹狩り源流についての權威である。けれども今におき、其稿本を板行する氣におなり下されない。其爲に我々の話も、此程度で止めて置かなければならない程、孤立無援の有様にあるのだ。若しどうかした機會に、この漫談が先生の眼にふれて、苦笑を誘ふならば、それは一つは、先生自身の罪でもあるわけだ。

私どもの力では、大陸から半島への鷹法の傳來、或は渡來後の變化について、大きな口をきく資格はない。たゞ、この島のみかどに於いて、考へられて居たでもあらうその姿を考へ出して、一部分でも眞實に當ることがあつたら、此上の幸ひはないと考へる。

端的に言へば、私の長い宿題として居る一つのものに、所謂、操り芝居のてすりてすりと稱するものがある。それが可なり近代まで、一枚の美しい布ぬいで出来て居たことの理由である。人は此をてすり

即、欄干と言つた説明を胸に持つて居るであらうが、私にはまだその簡単な解説に同感する氣がない。

一體、わが邦で古代の風と考へてもよい記録の敘述によると、とりのあそび（鳥遊）なることばが見え、さうした方法が咒術の上にあつた事を殘して居る。事代主が天孫の使ひに留守をあけて、美保の崎に出かけて居たのは、此事の爲だと謂はれて居る。だが、同様の事ならば、味耜高日子根神の場合にも、ほむちわけの命の場合にも、條件は不備ながら、これのあつた面影は想像出来る。言ふ迄もなく、この場合に目ざされるものは白鳥である。即、たましひをもたらず鳥を見ること、その人の生命をあらたにし、威力を附加する方法となつたわけである。此點に於いて、我々の記憶は、急に渦巻きを造つて心に集つて来る。萬葉の日竝知皇子尊の舍人らの歌に現れた池の水鳥も、さうした用途に用ゐられたことが考へられる。或は出雲國造の神賀詞及びこれに關聯した獻物、所謂生調として見えて居るものは、やはりこの白鳥である。その他、原因は一つで、形の上では關係の次第に遠い鳥の民俗をあげて来る段になれば、際限のないばかりだ。話が半分、こ達はつて來た事を覺えるから、稍飛躍を許して戴くならば、此は鎮魂の方術に用ゐられたのである。即、かうした鳥を、白鳥の玩物と言つたらしい。常に身に近く置いて、それによつて、新しいたましひに觸れようと言ふ信仰なのだ。かうした用途に用ゐられた鳥は、恐らく、色々の種類を含んで居たものと思はれるが、其が白鳥

の白鳥たる鶴に歸一したものと考へるのが順當らしい。しかも尙、その一致が崩れて、後々までも幾つかのたましひの鳥が考へられて居たやうだ。雁であり、鶴であり、鷺であり、猶また臨時に突拍子もなく出現する事によつて、日常目なれた鳥すらも、その役廻りに見なされた例が多い。話しつゞけて來た鷹も、此鳥の一つとして數へられるのである。だが、もつとよく思へば、逸れ行きたましひをつきとめ、もたらし歸るもの、と考へた方面も忘れるわけには行くまい。たましひの鳥であつて、同時にたまぎの鳥なのだ。かうしたものを求める動作は、おほよそたましひの場合に限つて、こひと稱して居る。これが、一方戀愛のこふと言ふ形を分化して行くわけだ。一例をあげると、ほむちわけの場合には、たましひの鳥、鶴を追うて行つた人の名として、山部大鶴と言ふことになつて居る。たましひの鳥を追うたがために鷹の名をとつたのか、或は説話學の考へ方に従つて、鷹の人格化せられた名と見るべきか、いづれにしてもたまごひと鷹との關係を思はせる。

我々の國で、小鳥狩りの行はれた冬の時期は、ほゞ鎮魂祭と同じ頃ほひである。後には、次第にさうした關係を忘れて、二つの儀禮を分離して來たことと思はれる。鳥の使ひの歸る歸らぬを問題にした物語の多いのは、この信仰に根ざして居るものと見てよからう。鷹には鈴をつけて放すのが定りである。この鈴の音が、咒術とうらなひとに交渉を持つて居るものであらう。扱、さうした鷹は謂はたましひの一時の保有者とも考へられる。だから此鷹によつて、鎮魂を

試み、或はうらなひを行ふことになつた過程が思はれる。

我々の間に語原も訣り、その風習の起源も知れて居乍ら、猶一部不明なものを残して居るのは、雛遊びの式である。何のためにひなと言ふのかと言ふ點になると、實はまだ確答は與へられて居ないのだ。人間の雛形なる人型ヒトガタの故に、ひなと言ふだけでは物足りない。

必、鳥に關する聯想が近く、最密接であつたに違ひない。私は、所謂ひなヒナについて、單に人型の撫物ナデモノを稱するとは思つて居ない。所謂、ひなヒナの殿ノボなる謂はゞ箱のやうな物の中にある場合においてのみ、この鳥と關係のある名を稱へて居たものと考へて居る。實は、却つて取つて置ききの結論を流用することになつたが、ひなヒナの殿ノボは、人形使ひの首に下げ、淡島願人の携へて歩いた箱などに變化して行くものだと思ふ。その箱の中に於いて、鳥を使ふ方法が一つの技術と見做されて來て、それが次第に、傀儡の徒の藝と歩み寄つたものと考へる。箱の中で使はれるひなヒナ、箱の外に於いては架垂のかけから使はれる鷹トビ、かうした形を考へることに依つて、所謂鷹匠の祕密の職分が想像せられる。

我々の知つて居る鳥占には、様々の方法がある。が、其一つに加へていゝものは、べろくベロクの神と稱せられる、尖端の曲つた枝、或は紙コシを以てする方法である。即、その鉤の先の向いた方向を積極とする約束を持つト法である。これは又、べろくベロクの鉤とも稱せられて、童遊びとしての分布も可なり廣い。秋田市などでは、神體不明だが、この神を祀つた祠すらある。これと所謂お

しらさまとは、ほど一線をたどる因縁の近いものと思はれる。

此點に於いても、おしらさまに依つて説明されるひな神のものと形が想像出来る。鷹の習性をよく観察した方々は、その首の振り方に特殊なものがあることを、感じて居られるであらう。即、此を以て一つのべろくベロクの神様と見たものと言ふことが出来よう。

話は最後に近づいて、端折らなければならなくなつた。これがもつと具體的な説明を要することは勿論であるが、この上更に鷹部屋と人形箱及びあやつり芝居との關係を説かなければ、輪廓だけでも完成しない訣なのだ。それは、別の場合があるであらう。たゞ結びでもない結びをつけて置かうならば、幕のかけからさし出して使ふ人形と、箱の中に手をさし込んで使ふものと、見た所は大變差別のあるやうだが、その距離はごく僅かである。少くとも、所謂すり芝居すりしばいの起源をたづねるには、鷹使ひの習慣のこまやかな研究が前提となつて居なければならぬと言ふ處で、この話をとぢめたい。

横著をして、若い私の友人に、この文を綴つていたゞいた感謝を申し添へたい。

鳥の聲

昭和二十三年十月「婦人の友」第二卷第十號

444

ほととぎすの鳴く聲も、やゝ遠のく頃になりました。今年のほととぎすを送る氣持ちで、その話をしようと思ひます。併し私は、鳥の事は一向に知りません。鳥の生態などの研究は、他の方々の立派な書物が出てゐますから、それを参考にして頂きたいものです。

ほととぎすに氣をつけてゐますと、私の家のあたりでも、もう舊曆の二月頃から鳴くのがある様です。普通は、舊曆五月になると鳴くとされてゐて、人々も、ほととぎすが鳴くからもう五月だ、といふ様に考へて來たのです。あの聲は、さゝなき期をすぎた鶯とちよつと似てゐます。ほととぎすが、鶯の卵を取つてその巢へ自分の卵を入れ、鶯に孵させるといふ事を觀察してゐたのは古代からで、萬葉集にも出てゐます。舊曆五月頃渡つて來る鳥なのですが、土地によつては前後してゐますが、大體その地へ來る日が決つてゐます。併し、渡つて來ないで、土地に定住してゐるのもあるらしいのです。それが何かの都合で、二月頃にもう鳴くのだらうと思ひますが、此は、内田先生その他の方に伺つて見なければ決りません。昔の人々は、山に籠つてゐて、五月頃

になると出て來ると考へてゐた様です。それで、山ほととぎすといふのが歌詞、即、文學語なのです。又もとつびと山ほととぎすとも言ひます。このもとつびとは、ほととぎすに對して枕詞です。古なじみの人が、時を経てしか訪れなくなつてゐる。其がもとつび人なのです。古なじみの人が、思ひ掛けぬ時に戀人の所を訪ふ様に、一年間鳴かずゐて、ひよつと出て來ると言ふ意味で、もとつびと山ほととぎすといふのです。

普通には、夜最繁く鳴く様に考へてゐますので、昔の人は、結婚とある聯想をもつて考へてゐました。つまり、日本の結婚の古い形では、祭りの夜、神様がをよめの家を訪ねて來て、戸の外で名告り（ナ）をします。それを聞いてをよめが結婚してよいと思ふと、はじめて家の中へ入れるのです。人々も此形を承け繼いで、男が女の所へ夜かよつて行きます。いよく結婚出來ると訣ると、露顯といつて女の父母に名告つて、正式に申し込むのです。

萬葉集に、雄略天皇が茶を摘む少女に結婚を申し込まれた、と傳へる長歌が出てゐて、その最後の句が「……吾こそは告らめ。家をも名をも」となつてゐます。近頃の學者は、天子様が自分の名を言はれるのはをかしい、「……吾こそは告らし……」だと言つてゐますが、それはとんでもない誤りで、どんな身分の上な人でも、名を言はなければ女の方で許す筈がありません。こんな處で、古代生活を誤解するのです。此が名告りです。なのりに關係ある歌で、天智天皇の御製だと傳へのある、

鳥の聲

445

朝倉や 木のまる殿に吾がをれば、なのりをしつゝ行くは たが子ぞ (新古今集卷十八)
といふのがあります。「私が、朝倉の木のまる殿に居る時に、名告りをしいくして行くのは、何處の誰の子だ」と言ふ意味ですが、女が名告りかけをする筈はないから、天智天皇の御製とするのは間違ひです。

とにかく、結婚の望みを承知させる爲に、女の家を外を、何の某と名告つて通るのですが、それを、夜鳴いてとほるほととぎすの聲に聯想して考へてゐたのです。

こんな風に言ふと、ほととぎすは、豊かな聯想のある幸福な鳥に思へますが、江戸時代の人たちは、特別に忌み嫌ふ訣ではないが文學的には「冥途の鳥だ」と言ひ、「血を吐いて八千八聲鳴くのだ」など言ひます。此は、支那の幾つかの暗い傳説が影響してゐるのでせう。日本でも古くから、しでのたをさと言ふ名稱がありました。又、死出の山といふのがある。所謂冥途にある山で、そこにゐる鳥だから、さう言ふ名があるなど申しますが、本たうはそれとは何の關係も無い、唯の「しで」といふ山の地名に過ぎぬのです。

昔の人は動物の鳴き聲を、いろんな變つた風に聞いたのです。猫は「みようく」、犬は「びようびよう」と記されてゐます。つまり、地方により、時代によつて、聞き方が違ふのです。ほととぎすも近代では「てぺんかけたか」「ほぞんかけたか」と鳴くと言ひますが、今の若いあなた方が、豫備知識なしに聞かれたら、どう聞えませうか。昔は「しでのたをさ」と呼び立てるやうに

聞いたのです。

いくばくの田を作ればか。ほととぎす。しでのたをさを、あさなくよぶ (古今集卷十九)
と言ふ歌があります。しでの田を作るのを監督するのが、しでの田長です。「どれほどの田を作つてゐるからか、毎朝々々ほととぎすが、しでの田長くとわめき立てゝゐる」との意味です。しでの田長がうつかりして、田植の時期を遅らせるといけないから催促してゐるのだと考へたのです。之を冥途(死出)の山の鳥と考へるのは、昔の人が中途半端に解釋した、所謂ほろく・えちもろぢいで、本來は鳴き聲から即興的に思ひついて、人をわらはせた狂歌の様なものです。併し、何故ほととぎすが、しでの田長など關聯して考へられるかと言ふと、之には理由があります。あの鳥が鳴き初めると、人々は、田の苗代の爲事を始める時が来たといふ知らせの様に思つたのです。昔は、年中行事を曆に記す事はせず、皆、經驗にばかり頼つてゐました。之は、日本人が遠い祖先から傳へて來た事を、信じ行つてゆく、美しい頑固性を持つてゐた爲で、ほととぎすが鳴けば苗代の爲事にかゝるのだと言ふ、簡易な農事曆の一つであつた訣です。

鳥の聲
信濃なるすがの荒野に、ほととぎす鳴く聲きけば、時すぎにけり (萬葉集卷十四、三三五二)
すがの荒野はあちらこちらにこゝだといふ處があつて、結局何處か訣りませんが、「すがの荒野で鳴いてゐるほととぎす」。その聲を聞いてゐると、あゝ、もう時が過ぎてしまつたのだ」と一應意味は通りますが、どんな時が過ぎ去つてしまつたのか、肝腎の所がはつきりしません。更

に、旅人が、「春には歸る約束だったのに、ほととぎすが鳴いてゐるのを聞くと、もうその時も過ぎて、夏が来てしまつたのだ」と思つてゐる歌だとすると、大分、詠り易くなりますが、尙、すつきりしない所が残ります。一體、昔の歌は、深く考へてゆくと九分九厘までは詠るのですが、極僅かな所が詠らないで残るのが常なのです。そして、實はその明らかにし切れない部分が、次の時代へその歌の傳つてゆく生命になるので、ある時代に解釋が固定してしまつて、生きてゆく部分のなくなつた歌は、傳つて行きません。

「春に歸る約束だったのに、夏になつてしまつた」といふのは、私達が補つて考へてゐるので、眞實さうした意味だかどうか詠りません。私には、どうも苗を植ゑ付ける時を教へる歌の様に思はれます。

あなた方は、かう言ふことを、おもしろい事とも思はないでせうが、中世時代には、ほととぎすを聞いた事を、よく誇つたものゝ様です。あんな聲を聞いた所で爲様も無いことなのですが、それを誇りにしてゐたのは、何かの理由があるに違ひないのです。それは一口に言へば、靈魂信仰と深い關係を持つてゐるからだと言へます。

人間は、體の中に各靈魂を持つてゐます。自分のものだからと言つて、此ばかりはどうもならない。それを自分の意志によつて變へよう、動かさうと思つても、どう爲様ありませんが、昔の人々はそれについて、まう少し自由な考へを持つてゐました。魂が遊離した状態にある人を、か

げのわづらひと言つてゐますが、つまり古人が考へた離魂病です。今日では、誰も信じる人が無いから、そんな病氣も、自然流行しません。併し、沖繩などでは、まだ之が信じられてゐます。魂の事を沖繩ではまぶいと言ひ、子供などがちよつとびつくりすると、まぶい落しといふ状態になります。此は、ゆたといふ呪術を行ふ巫女にまぶいを籠める呪をしてもらふと、又魂が這入つて直る。素人でも、まぶいこめをする人が澤山居ます。かうした魂の信仰は、日本でも随分久しい間信じられてゐました。

それと、話は逆で、人のからだへ力強い魂を入れる事も亦行はれました。中世より前、古代のことです。奈良朝などよりもつと前の話になります。その著しい例は、天子には天皇靈といふべき偉大な靈魂が必要であつて、此が這入ると、天子としての立派な徳を表されるものと考へてゐました。そしてその徳をみいつといふ語で表してゐます。御稜威といふ字で書くあのいつです。此は天皇靈の信仰上の名稱でした。他の人々にも各その相應した魂が身に這入らなければならなかつたのです。からだに這入つて結合したたまの作用をたましひと言つてゐます。近代では、靈魂その物をたましひといふ様になりました。併し、たまは時が経つと、その威力を減退するものと信ぜられてゐて、大體一年に一度たまを入れ替へる儀式をします。更に、人が死んだり、氣絶したりするのは、中に宿つてゐるたまが、永久又は一時的に出て行つてしまふからで、それを呼び戻すと回復すると信じてゐました。同様に、人が激しく怒ると、たまが遊離してしまふと考へて

みました。譬へば、雄略天皇は古代的な性格で、所謂「心うつくし」と言ふ語をそのまま表した様な方ですが、度々激しい怒りを發してゐられます。所がその怒りは、魂を鎮める力のある詞によつて、ふつと鎮まつてしまふ。その例がいくつも傳つてゐます。その詞が歌だつたのです。つまり、魂の遊離を信じると共に、それを再び體へ鎮める技術を心得てゐたのです。後代は、人が死ぬと、屋根の上などで、たまよばひと言つて、魂を招きよせる式をしました。

たまは見つ。ぬしは誰とも知らねども、むすびとどめつ。下交のつま

といふ歌が残つてゐて、早くから呪ひ歌になつてゐます。人魂が飛んでゐるのを見ると、此歌をうたつて下まへのつまの所を結んだのです。歌は「その主は誰か訣らないが、とにかく、その靈魂を、私のしたまへのつまに結び留めた」といふ意味で、今では、そんな事がと思はれますが、つひわれ／＼の祖母や母に到るまで、皆それを信じてゐました。

かうした靈魂の信仰が訣つてゐなければ、萬葉集の歌は大部分が理會出來ません。

淡路のぬしまが崎の濱風に、妹が結びしひも吹きかへす (卷三、二五一)

男が旅に出る時、妻は自分の靈魂をわかつて、守りとして男のからだにつけてやりました。そのたまの結び籠めること及びその籠めた所を、ひもと言ひ、その緒をひものをと言ひました。後にはそれを下紐の様に考へて、誤つて性欲的な事に解釋して來たのです。此歌でも訣る様に、下紐とは全然別で、此は恐らく上の衣の肩の所からさがつてゐる紐の緒なのでせう。

又こんな話もあります。室町時代の日記類を見ると、夜何か名前を呼ぶ聲がする、ひよつと不用意に返事をする、死んでしまふと言ふ事があります。それを呼名の怪と申しました。それと似た話で、源三位頼政が、鶴を退治した事が傳へられてゐます。近衛天皇の御代、宮殿の屋上で毎夜鳥が鳴いて、その爲に帝が御病氣におなりなされた。神経が衰弱せられた訣でせう。頼政が之を射ました。鶴の鳴く事は昔の歌にも詠まれてゐて、晝聞いても憂鬱になつたらしいです。本來はとら鶴といふ鶴の一種です。平家物語には、頭が猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の姿だと非常に誇張して書かれてゐますが、元の話は小さな鳥なのです。

鳥の中には靈魂を誘ふものがあつて、それに誘ひ出されると、病氣になつたり、死んだりするものと信じてゐました。此は古い歴史があるので、日本でも、西洋でも、靈魂を持つて歩くものを鳥だと考へてゐました。西洋には、白鳥自身が神であつたり、靈魂の運搬者であつたりする傳へが澤山あります。日本でも、鶴(白鳥のこと)や雁が靈魂を運んで來る鳥として考へられてゐます。これらの鳥は、靈魂を人の體へとどけて行くものと考へられてゐました。その時に、靈魂を人の體へつける技術と言つたのも傳つてゐたのでせうが、その方は何時の間にか忘れられてしまつて、話だけが傳へられて残つてゐるのです。

昔丹波の國、比治山の上の天眞名井に澤山の少女が天から下りて來て、天羽衣を脱いで水浴してゐました。所が、麓に住む和奈佐老夫が羽衣の一つを盗み去つた爲に、その少女は天へ歸る事

が出来ず、老夫の家で育てられる様になりました。それ以後、不思議に老夫の家は富み榮えましたが、やがて少女は、無情な和奈佐夫婦に家を追ひ出されて、嘆きながら途中で飢死してしまいます。かういつた型の話が、日本に幾つか傳つてゐます。日本ばかりでなく、南洋諸島をはじめ西洋にも廣く分布してゐて、白鳥が著物を著てゐると少女となり、それを脱ぐと白鳥になるので、白鳥處女傳説といふ名で呼ばれてゐます。有名な三保の浦の天人の話は、羽衣をとり返して飛行するといふ幸福な結末になつてゐますが、他に傳へられてゐるものは、羽衣を取られて漁夫の妻になります。その間に出来た子供が、美しい羽衣の隠してある所を見付けて、何心なく其事を歌にうたふ。母の天人はそれを聞いて、再び天へ去つてしまふ事になつてゐます。土地によつて色々な形で傳へられてゐますが、結局は、靈魂を運んで来る鳥がある、といふ信仰から出てゐるのです。羽衣を著ると飛行自在だが、之を奪はれると、靈力を失ふといふので、靈魂を鳥の形で考へたのですが、此と靈魂を運ぶ鳥の考へとは、元一つなのです。さて靈を持ちこぶ鳥があれば、逆に靈魂を持ち去つてしまふ鳥の事も考へて来る筈です。昔の人は靈魂が外へふらふらと出てゆく事を「あこがる」と言つて非常に恐れてゐました。今は、この語を誤解して憧憬することだと思ひ、文學的な語となつて居ります。それで、夜寝てゐる間に、ひよつと鳥に呼ばれたら大變だといふので、色んな豫防策を考へました。夜中、寝ないでゐるのが安心だ。さう考へて夜を守つて起きてゐる。中でも、ほととぎすの初音を、ぼんやりした不用意な氣持ちで聞く事を恐れて、

その時期になると、ほととぎすの聲を聞き洩さぬ様に夜通し起きてゐるといふ様な習はしが出来て來たのでせう。

さういふ風にして、ほととぎすの初音を待ち焦れる習慣の起つて來る過程がわかつて來ます。長い時間の経過によつて、不幸を恐れた事が、全く反對に、幸福なよい事の様になつて來る一つの例だと思ひます。

東北地方で田植多の時に、えぶりと言ふ道具を使つて、田の表面を平にならします。之は、本來稻の稔るやうに、土地の靈魂をよい状態に田へ鎮めて置く爲に使はれるのです。又東北地方では、幼い子供を入れて置く畚を、ひづめ・いづめ・いぢごと土地によつて色々な名で言ひますが、ある地方ではえぶりと言つてゐます。それは搖籃と似た意味で、さう呼ばれてゐるので、つまり、子供が聲をあげて泣くのは、その聲をいか／＼と擬聲してゐるのを見ても訣る様に、激しく怒つてゐるのだ、と考へたのです。さういふ時に靈魂が遊離し易いので、子供を揺ぶりながら心を鎮まらせるといふ意味で、えぶりと言つたのです。

鳥の聲
之と考へ合せると、田に使ふえぶりの目的も決つて來ます。百姓が田の畔を丁寧に塗り固めるのも、今は合理的な意味からばかり考へてゐる様ですが、昔は田の靈魂の脱出を防ぐといふ信仰的な意味があつたのです。青森縣に、えんぶりといふ藝能のあることは御存じですか。之を行ふ藝能の興行團體があちこちの村にあつて、派手な服装で歌や踊りや、ちよつとした輕演劇風な演

目を持つてゐる。今は何時でも頼まれ、ばやる様ですが、昔は初春の行事に限られてゐたので、春田打ハルタウチと言つて、春の初めに一年間の田の行事の眞似事をして置きます。すると、田の精靈がその呪術に感染して、その年はちようどそれと同じ事が、田で繰り返されると信じてゐました。だから、田に、稻が山の様に積まれてゐる様な眞似をします。そして此行事の一番中心になるものが、先に言つた田のえぶりで、えんぶりの人が、えんぶりの變化した棒を杖にして、出ます。がちや／＼音がします。此えんぶりを振りまはして藝をするのです。

この様に、昔の人々は靈魂信仰を深く信じてゐました。そのかたみとして、今日なほ我々の生活の上に、色んな形で印象されてゐる訣です。さういふ行事について、現在表面上の關係が認められないからと言つて、知らないで過してゐるのは、あまり寂寥な生活と言はねばなりません。生活の型の上に、昔と今とが、どんな關係で繋つてゐるか深く省る必要があります。それは、何も昔の生活をまう一度復興させようと言ふのではありません。我々が今日、なぜかういふ生活をしてゐるのか。その理由を知る事なのです。

今、日本は、非常な状態に立ち至つてゐます。だからと言つて、うろたへて、自分たちの型として傳つてゐるものを失はぬやうにしたいものです。我々の祖先は、こんなに根強い習慣を傳へて生活して來たのだ、と言ふ事を、明らかに知つて、闇の中をあるく唯一の燈として行きたいものです。

草相撲の話

昭和六年九月「郷土科
學講座」月報第一號

我々には、相撲と言へば、春場所・夏場所の感じだけしかなくなつたが、誹諧の季題では、これが秋の部に這入つて居る。宮廷の相撲の節會が、初秋の行事だつたからである。しかし、實際に諸國の村々では、今でもこれを秋に行つて居るところが多い。

宮廷では、早くに、すべての行事が整頓せられて、相撲節會なども出來たのであるが、これは、村々の行事がとり入れられたと見るよりも、宮廷も、もとは一箇の邑國であつたので、その當時から行はれて居たと見る方がよいと思ふ。

村々で行ふ相撲の事を、草相撲と言ふのは、今では、民間の相撲の意味だと思はれて居る様だが、實は、相撲の古い形は、體に草をつけて行つたのである。これは、古代の信仰では、遠くからやつて來る異人ストレンジャーの姿だつたのである。日本紀・風土記などに記されてある例で言ふと、蘇民將來を訪ねたときのすさのをの命の姿がそれであつて、謂はゞ、草人形である。草相撲と言つたのは、それから出て居ると思ふ。それが、段々、もとの形が忘れられた爲に、此語には、民間のもの

な時期に、此神事が行はれたのだと思ふ。もとは、もつと演劇的要素の多いものだったと思ふが、それが、力競べにのみ興味が傾いて来たのは、此、時期の関係からであつた。即、神と精靈との争ひといふ原の意義が忘れられて、部落同士の争ひが主になつたからだ。これも、もとは豊年の神を取り合ふ争ひであつたのが、後には、たゞ年占だけの考へで、勝てばいゝといふ風になつた。これが、諸國でやかましく言はれる様になつたのは、宮廷で、諸國から秀手ホテと言ふものを集め、宮廷を中心として、國を東西に分け、いづれが豊年であるかを占つた事からであるやうだ。秀手といふのは選手の事である。

とにかく、相撲は、もとは力競べだけでなく、もつと演劇的要素の豊かなものであつたと思ふ。今も、土俵入りなどいふ事が行はれるが、宮廷の相撲の節會にも、舞ひが伴うて居る。しかし本來は、相撲そのものが、もつと演劇的なものだったので、それは、春の初めに、遠くの神が来て、その年を祝福して、田の行事をして見せて行く演劇的所作が行はれた、その復演であつたと思はれる。即、田の作の實らうとする時期に、まう一度それを行つたのが古い形であつたと思はれるのである。

言つた意味があるといふ様に考へられて来たのであるが、同時に、くさくさとは、病氣といふ事と殆同義語だつたので、その聯想から、病魔退散の相撲といふ様にも考へたらしい。しかし、村々に残つて居るものを見ると、今でも、實際に、體に草をつけて行つて居るところがある。

何故、相撲をするには、體に草をつけて異人の姿をしなければならなかつたか。それは、此神事がもとは、神と精靈との争ひを表象したものであつたからだ。即、遠くから、威力のある神がやつて来て、土地の精靈を征服する形だつたのである。そして、外から来る神は大きく、精靈は小さいと考へて居た。だから、相撲は、もとは大きいものと小さいもので取り組んだのであるが、後に、力競べの方に興味が傾く様になつて、大人の相撲と子供の相撲とが、別々に行はれる様になつたのである。

村々で行はれる相撲の場所には、大抵、田の用水がある。川・池のほとりが選ばれるが、これは水の神の信仰があつたからだ。しかし、農村では、常に信仰の變化が激しいので、後には、水の精靈が相撲を好むと考へる様になつた。それから、河童が相撲を好むといふ傳説なども出来たので、河童は、實は水の神がこんなにも形を變へてしまつたのである。中古以後、相撲の節會に、左方の力士は葵花、右方の力士は瓠ヒヤゴ花を頭へ挿して出たが、瓠は水に縁のあるものだったので、水の神の所屬の標シメルらしく、葵は、それに對立する神の一種を示したのだと思はれる。

相撲が、初秋に行はれるのは、もとは、二百十日・二百二十日の厄日を控へた、農村では最大切

宮廷と民間

——正月行事を中心に——

昭和十一年
一月「國本」

昭和の春に何を問題とするか。まづ正月年改るといふ事から考へて見よう。正月行事の中心は何處において考へたらいか。それには、宮廷の生活を中心とするか、民間の生活を中心とすべきか、といふ二つの觀察點があると思ふ。常識的な見方からは、民間傳承（民俗）は、單純なものが複合して、複雑になつて來たと考へるのが正しいと思はれようが、勿論さういふ事もあらうし、且理論としてはまことに結構な筈だが、實證して行く段になると、困難なのである。それよりも觀察のし易いのは、宮廷の生活様式が貴族へ、貴族から更に下級の社會へと漸層的に下つて行つたと思惟するのが、最觀察し易い方法を持つて居る。それには常識一遍の説明も出来るが、それでは足りない。

日本では、神祭りの主體となるのは、宮廷の神祭りで、その祭りに於ける主體は、歴代聖主であられた訣だ。主上の御生活には、日常の生活のほかに、神としてのあらたまつた御生活があつた。

そのはれの生活は更にけの生活の規範であつて、同時に我々のはれ及びけの生活の典型であつたのである。言ひ換へれば、我々の生活に祭りの方式を攝り入れることは、我々の日常生活の刺戟になるから、出來れば、さういふ生活の様式を常に反覆してゐたいと思つて來る。昔の人は、さういふ風に次第々に祭りの方式を實生活化して來た。祭りの衣服が、日常化する事が屢ある。此がはれの装束である。本道の晴の生活は、男として祭りに參與して重大な神事を行ふ際の服装で、世降るに従つて褻の生活に轉化してしまつてゐる。謂はゞ、祭りの時の生活を日常の生活に攝取しようとするのは、誰もが持つてゐる情熱である。しかもこのはれの生活法が、けの生活の規範なのである。

正月に門松を立てるが、宮廷では立てられない。京都に宮廷が在した時もなかつたのに、風俗畫の類には、御所の御門に、松の立つてゐる圖があるが、繪空事だと思はれる。これなどは、宮廷の生活を下の生活で割り出してゐるものである。だが一面、さうした事から漸次、民間の生活が宮廷へ這入つて行つた事もあるのである。

宮廷と民間

宮廷では、一番先に考へられることは、初春に、聖上御誕生の形を行はせられる、といふ事である。日本では、曆を幾度も變へられてゐるが、新しい曆について、その時季々に附屬した新しい行事が起り、又曆が改正せられて更に行事がふえて來る。かうして違つた時季に、精神が同じで形式の異つた行事が並び行はれてゐる。

我々に本道の年の暮と思はれるのは、十二月三十一日以前の忙しい気分であるが、田舎に行くとき舊曆をとつてゐるから、又違ふ。或はその妥協形式の一月遅れの曆を使つてゐる。その他、幾種かの曆が行はれてゐるのである。これには外國渡來の曆法に限らず、もつと古い行事も這入つてゐる。霜月は年の暮で、しはす(師走)は、終極といふ事であるから、實際は、古代においては、霜月の終りの極僅かの幾日かを言つたものであつたのである。ところが後には、師走が一个月分の長さになつて來てゐる。併し、霜月の行事が、師走に持ち越して來たかといふと、さうではない。行事は時期と關係が深いから、そのまゝの時に行ふ。さうして、更に違つた事が十二月に行はれて來た。年の暮に何か行はねばならぬ気分があつて、段々にふえて來る。考へても、年越しと節分とは、同じ気分がする。地方によつては同じ行事を年越しに、又節分にしてゐる。更に或地方では小正月を大年にして、其前晚の十四日の夜を十四日年越しとしてゐる。曆が幾度となく變遷した俤を止めたのである。霜月も、嚴格に考へると、神無月の終り頃といふ感じが古典には深く残つて居る。宮廷の行事を見ても、神無月・霜月は、神事が多い。この期間に、聖上が嚴重なる物忌みの生活を遊してゐられる。御一代一度の大嘗祭にも、新嘗祭にも、その様が窺はれる。かうした様式を古語で申すとふゆごもりである。

ふゆごもり、はるといふ用語例に見えるは、はれと同語で、成長したこと、生成以前の形をふり捨てることである。ふゆごもりを、學者が、草木が冬眠状態から、蟄蟲の冬眠の状態から、

孟春に入つて新芽をふき、活動を開始することだと言つてゐるのは、いけない。

はらふなる語も、はる、はれと同系の語で、はらひすて、出現すると、誕生の形になる訣である。聖上の籠らせられる物忌みの中から、出て來られるとは、その時期が、はるまつりである。はるは、はるまつりを過程において考へぬと、言語的にも想像出來ない。はるについて言ふべきは、ふゆである。ふゆは靈を分割することだ。その事を、日本で古くからみたまのふゆと稱してゐる。

貴人が御靈を分割して、人々にも與へられることである。宮廷においては、その分靈を臣下が戴くのである。ところがはるになると、それと逆に臣下から自分の靈を献上する自分たちの生命・活動力の源になるものを、目上にさしあげるのである。此風、民間に久しく相續せられて、今でも、藝人などが、親方筋へ鏡餅をもつて行き、親方でもその鏡餅の數を誇る。餅の中には靈が這入つて居る。後には靈の象徴と考へたのであつた。宮廷の朝賀の式は、天子に靈を奉るのである。四方拜は、元旦未明に北斗星を拜む儀式をなされる。其形式は支那のものであらう。併し、精神はわが古典からも窺はれるものである。平安朝に這入つて初めて起つたと考へるのはいけない。その事後、天子、朝賀をお受けになる。朝賀には元旦の詔旨をお下しになり、これは天子御一代の即位式の詔旨と同じ價値あるものと稱せられてゐた。宮廷の儀式でも「大事」と稱せられてゐる。宮廷の御生活でも最上の様式であつた。その時、大倭根子天皇といふ唱言をなされる。それ

が聖上の御名になつてゐる。天子誕生の形式で、初一聲をあげさせられるので、此時新しい御威力がおよびになるのである。すると、臣下の代表者が出て——古く國家組織の單純な時代には、すべての臣下が出たのであらう。——賀正事を奏上する。よは靈といふことで、後ほど齡といふ意義になつてゐる。この賀正事の詞章に乗つて、臣下の家々の守護靈が這入る。譬へば、物部氏のよごとによつて、物部氏の靈が這入り、それによつて物部氏を治める御威力がお出来になり、更に物部氏を宰と仰ぐ配下の民團をも、統一されることになる。かくて、日本國中の靈を併せられるのである。

更に宮廷では古くから孝道を尊ばれて實行なされてゐた。宮廷では、伊勢神宮へ荷前使イセノミカヒを出され又、當今に御縁の深い御陵にも同じく荷前使を差し遣された。さうして、天子の御父母に對する敬禮を行はせられる。御父母と在す方は前代の聖上・皇后で入らせられる。これは朝覲テウギンノキヤウカウ行幸と稱してゐる。御父母の御健康の祝福に參られるのである。それが民間の年賀と精神を同じくする。目下の者が目上の人の處へ、靈を奉りに行く。これををがみに行くと言つてゐる。その際の唱言がおめでたごとである。あなた様は結構に今年をお過しなさいといふ内容である。ところが、近世になつては、めちやくちやに誰にも言つてゐるが、これは、世の中の階級制度が自由になつて、町人生活から胚胎してゐるので、町の生活ではお互にばとろんであり、檀那であるからだ。其で相互におめでたうを言ひ交す必要が生じたのである。

門松のはなし

昭和八年一月「歴史教育」第七卷第十一號

正月に門松を立てる訣を記憶してゐる人が、今日でもまだあるでせうか。此意義は、恐らく文獻からは發見出來ませぬ。文化を誇つたものほど早くに忘れてしまつた様です。僅に、圏外にとり残された極少數の人達の間にも、かすかながら傳承されてゐる事があるので、それから探りを入れて、もう一度これを原の姿に還し、訣ればその意義を考へて見たいと思ふのです。

今日では、門松の形が全國的に略きまつてしまひましたが、以前は、いろ／＼違つた形のものであつたのです。今日の様な形に固定したのは、江戸時代に、諸國の大名が江戸に集つた爲に、自然と或一つの形に近づいて行つたのだと思ひます。或は、今日の形は、當時最勢力のあつたものの模倣であつたかも知れません。

繪で見ますと、江戸時代のものにも、葉のついたまゝの竹が、松よりも高く立てられてゐるものもあり、松だけのものもあり、更に變つた形のものもあつたらしいので、「松枯れで、武田首なきあした哉」の句は、松平と武田とを諷したのでせうが、形が、略今日東京で立てるのと似てゐた様

に思はれます。

今日東京で立てますのは、削いだ竹が中心になつて、それに松があしらはれてゐるのが本式とされてゐます。今では、此形が全国的にまねられてゐるのですが、それでも、古い習慣を守つてゐる地方には、尙、お國風と見られる、松が主になつて、その根元に笹の葉が挿されてゐるもの、松だけが柱に結びつけられてゐるもの、その他色々違つた形のものがありません。此らを見ますと、一體門松は、竹が中心なのか、松が中心なのか、と考へて見なければなりません。

しかし、ところによると、松も竹も立てないで、全然別のものを立てゝゐるところもあります。譬へば、箱根権現の氏子は、昔から、竹も松も立てないで、櫛を立てます。此には傳説が附隨してゐるので、箱根権現が山を歩いてをられるとき、松葉で眼をつかれた、それで氏子は必片目が細いと言ひ、松を忌むのだと言ふのですが、此様な話しは、諸國にある餅なし正月の話などと、同じで、合理的な説明に過ぎません。今日の考へから言ひますと、櫛は佛前のもになつてをりますから、それを門松の代りに立てるのは如何にもかしいと思ひますが、昔は、櫛が幾種もあつたので、櫛も、櫛の一種だつたのです。

それなら、何故櫛を立てるか問題になるのですが、かうした信仰は、時代によつて幾らも變つてをりますから、一概に言ふ事は出来ませんが、正月の神を迎へる招ぎ代まきしろであつたかとも見られます。さういふ考へも成り立たなくはないのです。しかしこゝには、まう少し正月に即した考へ

を立てゝ見ませう。

日本には、古く、年の暮になると、山から降りて来る、神と人との間のものがあると信じた時代がありました。これが後には、鬼・天狗と考へられる様になつたのですが、正月に迎へる歳神様としがみ（歳徳神）も、それから變つてゐるので、更に古くは、祖先神が来ると信じたのです。歳神様は、三日の晩に尉と姥の姿で、お歸りになると言ふ信仰には、此考妣二位の神來訪の印象が傳承されてゐる様です。しかし此話しは、既に度々してをりますので、こゝには省略したいと思ひます。とにかく、此信仰には、現實との結びつきがありました。さうした山の神に仕へる神人じんがあつて、暮・初春には、里へ祝福に降りて来たので、その時には、いろ／＼な土産ものを持つて来て、里のものと交易して行つたのです。此交易をした場所を、いちと言ひました。後の「市」の古義なのです。山人・山姥が市日に来て、大食をした話し、無限に這入る小袋にものを詰めて行つたと言ふ傳説は、さうした、山人が里のものをたくさんに持ち還つた記憶があつて出来た話だと思ひます。山人が持つて来た土産には、寄生木かき・羊齒の葉、その他いろ／＼なものがあつたので、今も正月の飾りものになつてゐますが、削りかけ・削り花なども、その一種だつたのです。太宰府その他で行はれる鶯替への神事は、その交易の形を残したのでせう。鶯も、削りかけの一種と見られるからです。里の人達は、これらのものを山人から受けて、これを、山人の被ひをうけたしるしとして家の内外に飾つたのでした。

これから考へて見ますと、門松も、やはり山人のもつて来た山づとの一種であつたに相違ないのですが、其木は必しも一種ではなかつたかと思ひます。それには、かう言ふ事が考へられるのです。此山人の祝福には、その年の田の成りものを約束して行くのが大切な行事だつたので、その爲には、今も正月の神事として残つてゐる田遊び・お田植多の様な所作も見せて行つたのですが、また山から下りて来る時に突いて来た杖を立てゝ行つて、それに根がつくのが非常に善い兆だとしたのです。だからそれには、根のつき易い、いろ／＼な木が立てられて行つた訣です。これが松に固定したのには、訣があつたと思ひます。とにかく、今日の様な門松になつて行つた道筋を考へて見ませう。

私は、此數年間、毎年正月になると、三河・遠江・信濃の國境に近い奥山家へ、初春の行事を採訪に出かけましたが、こゝの門松は、また形が違つてゐるのです。門神柱、或は男木などと言はれる、栗・檜などの柱が二本立てられ、これに注連をはり、その下に松が立てられるので、その松の枝には、やすと言ふ、藁で作つた、つとを半分にした様なものが掛けられ、その中には、餅・黍シトキなどが入れられるのです。此形は、盆の聖靈棚に非常に近いと思はれます。

日本には、魂迎へをする時期が、盆と暮と二度あつた事は、徒然草四季の段を見ても訣る事です。が、此は、元來は初春だけのものだつたのです。それが二度になつて、一方は佛教との習合によつて非常に盛んになり、初春の方は、正月の行事が行はれた爲に魂祭りとしての信仰は、却つて

忘れてしまつたのです。しかし、此魂祭りなるものが、古い時代のは、今の佛教式のものではなく、暮・初春に、山から——もつと古くは海の彼方から——來訪すると信じた祖先神を祀る事だつたので、さうした神を迎へる祭壇が、即、たな或はくらだつたのです。七夕も、後には支那の乞巧奠信仰がとり入れられて星祭りになつてしまひましたが、此語に印象されてゐる日本本來のものは、さうした遠來の神を迎へるべく、をとめが海岸に棚を作つて、神の齋衣を作る爲の機を織りながら待つてゐたので、此がたなばたつめでした。門松が、やはりさうした神を迎へる爲の棚であつたといふ記憶を、かすかながらでも残してゐるのが、此三・信・遠國境の山村で見た門神柱です。普通の家では、此門神柱を二本しか立てませんが、家によると十數本も立てるのがあります。その意味は、もう忘れられてしまつてゐるのですが、老人達の話しを綜合して考へますと、それは、本家が、分家の數だけの柱を立てるらしいのです。盆や正月に、子方が親方の家へおめでたうを言ひに行く慣例は最近までありました。柱を分家の數だけ立てるのは、此記憶が底にあつたからでせう。處で、此柱を十數本立てた形は、恰も、とり入れた稻を乾すはざと同じ形なので、事實この門神柱の事も、はざと言つてゐるのです。さうして見ると、此二つは、偶然似てゐるだけではなく、稻を乾すはざも、元は實用の爲に作つたものではなく、やはり田の神を迎へる爲の棚であつた事が考へられるのであります。

かやうに、此地方の門松は、柱が主體で、松は客體と見られるのですが、而も、此十數本も立て

た柱の下にも、一々松を立てるのは、如何にも意味のある事だと思はれます。即、此松を添へると、山から迎へて来た靈が、その柱に宿ると考へた遠い昔の人の信仰が、如實に想像出来るではありませんか。今でも、此松を山から伐り出す事を、伐るとは言はないでおろすと言うてゐますが、古くは、はやすと云ひました。松ばやしがそれです。はやすは、はなす・はがすなどゝ一類の語で、ふゆ・ふやすと同じく、靈魂の分裂を意味した語なのです。だから、松を迎へる事は、分靈を迎へる事で、松は即、その靈ののりものだったのです。

次に、此松の枝にやすをかける訣ですが、昔の人は、かうして迎へて来た靈、或はやつて来た靈には必、不純なものが随伴すると考へたのです。盆にも、正式に迎へる聖靈への供物の外に、無縁佛の供物を作りますが、それと同じ様に、歳神様にも、家へ這入つて貰つては困る神が附随して來るので、それを防ぐべく、此やすをかけて供物をするのです。

とにかく、こゝの門松には、古い信仰が残つてゐるのです。此門神様の周圍に、鬼木或はにう木と言つてゐる、薪に十二月或は十三月と書くか、十二本或は十三本の筋をひくかしたものの（元は、閏年だけ十三月としたのですが、後には、今年も此様に月が多いと祝ふ意味で、平年にも十三月と書く様になつたのです）を並べ、又たくさんの薪を積むのですが、これこそ、前に申した、山人の山づとで、鬼木と言つたのは、鬼が持つて來ると考へたからでせう。にう木と言つたのは、丹生と關係のある語で、みそぎを授ける木の意であつたらうと思はれます。處によつては、此丹

生木の事をみづきとも言うてゐますが、此語も、やはり水の祓ひを授ける木の意であつたと思はれます。此丹生木は門松に立てる外に、小正月に、家の出入口や、祠・墓などにも立てます。今は、その家のものが立てるのですが、元は、山人が來て立てゝ行つたのです。

皆さんは、奈良朝頃、宮廷に御籠木の式と言つて、正月十五日に、宮廷に仕へてゐた宮人・役人、又は畿内の國司達から宮廷の御薪を奉る式のあつた事を御承知でせう。宮廷の御儀になつたのは、一種の固定で、これも、元は山人の山づとであつたので、それを群臣がまねて、天子への服従を誓ふ式としたのだと思ひます。江戸時代に、門松の根をしめる木をみかまぎと言ひましたが、奈良朝に行はれた宮廷の御籠木とは全然形の違ふ、かうしたものゝを、どうして同じ名で呼んだか、それは、かうした民間傳承があつたからだと思ひます。

かうして段々見て來ますと、今の門松は、此、門神柱の柱が竹に變り、その頭部が削がれたのだと考へてよい様です。竹を二本立てゝ注連をはつた風習は、京の大原にも、武藏の秩父にもありました。大原のは、その注連繩に農具を吊したと言ひますから、七夕の笹に人形を吊し、聖靈棚に素麵や田畠の成りものを吊すのと似てゐたと言へませう。

鬼と山人と

昭和三年頃草稿

470

木地屋にもならずすんだ「山村」が、何處か此邊にもあつて、今も榮えて居るかも知れない。今度十月の十日夜にでも来て、そつと、あの崖の上の家むらなどは見てゐてやらう。さつき道を教へた我勢らしい上様などは、向うの萱山へ上つて、楯形の月のあかりの下で、杓子ををこつかして躍り出し相だぞ。だから、貴人を連れて逃げたの、憚りながらやんごとない御血筋の續きだのと言つてゐる山家の村々の中には、源平どころか、もつと古く、里の祭りと絶縁して引きこんだ末がないとは言へない。

寢静まつた様な山の姿を仰いで、なぜのあんな高い麥の葉生えの中に、子どもが立つてゐる。お前は唄を謡うてゐるね。もう、あしたが小正月なのに、「正月どんく」。どこまでござつた。……でもあるまいに。そんな唄謡うても、學校の先生は叱らないかい。私は、聲をかけて通つてやりたい様な氣がした。こんな時分から、もう青空のふさぎのむしを吸ひこんで居るのだ。山家々とあしげに言やると「山家鳥蟲唄」の後生樂はぬかしてゐるけれど、花の木と言へば、向山

も背戸山も、辛夷花や、躑躅まで根こそぎ杉苗と栽ゑ替へた。何の色よい花が咲かう。冬だから、行きすがりの旅だから、よい様なものゝ、此處に住みついて居る身になつたら、貉の奴め。はいからにでも化けて來いと呼びかけたくなるだらう。こんな同情は、要するに、十足もあるけば消えて了ふ、其よりも、やつぱり嬉しさうな人が、忘れた時分に一人づゝ行き違ふ。其に話しかけた方がよい。

門松は小正月にもまだ置いてある。少しづゝは飾りをへらす相だけれども。暮に迫つて恵方の山へ、お松様を迎へに行つて、家の軒先へはざを立てゝ、其に括りつける。家の格で、三本は、五本は、五本は、正月に來る年神様の伴れだか何だか、大年の晩遅れて來る客人がある。「どこへでもえゝで、宿を貸せろ」と言つて來るのだ。目には見えないが、きつと來る。こんな客人は年棚の外に、祀つてやる事もあり、門松ぎりで遠慮して這入つて來ない衆も居る。こんな話を聞いた。

鬼と山人と
正月の鏡餅も、小餅を幾つも年棚へ供へたりするの、此から見れば理くつは見透けて居る。海岸の村に我々の先祖が、一年の間きり物を思はなかつた時分からきまつて、初春には歸るお客人があつたのである。山へくと這入つて行つて、常世神を忘れ干した後も、やつぱり變らず戻つて來る。山の神だけが春のまれびとではなかつた。年を二つに割つて上元中元と言ふ事を考へる様になつてからは、二度遠い旅を還つて來る。中元には、于蘭盆に迎へるお聖靈と言ふ事になつ

471

てゐるが、正月にはそんな忌はしい事はけぶりにも言はない。歳神様だの歳徳様だの、正月様だの、法華寺などでは、歳徳大善神と言ふ掛軸を掛ける。さうしてあげるのは、まづ第一に十二或は十三の其年の月數に準へた小餅である。壹岐の島などでは、扇をあげる。あけると、高砂の尉と姥の繪がある。季節の替り目は魂の浮動れ易い時である。殊に初春と初秋には、生き身の魂さへ、ぢつとして居られなくなるらしい。死人の魂は固より、ふらくと遙かな海のかなたの國土から、戻つて來るのである。常世と言ふのは、實は海岸の村の海に放つた、先祖代々の魂が到り盡して常は安住してゐる國の名であつた。村の元祖を一人又は男女二人として、其に多くの眷屬として、個性のない魂が集つて居る。其先祖を代表した魂が、常世の神となり上り、なり替つて、醇化した神となつた。さうして、死の國と常世とは別になつて了うた。常世の元の形の記憶はまだなくなりきららない中に、常世神に縁ない山國に移つた村々は、常世をもつと、理想化して高天原を考へた。さうして常世神の性格の一部を山の神に與へた。けれども、初春毎に來ては、一年を祝福しては去つた先祖の魂の、祝福はせなくなつても、ともかくも戻つて來る事だけは忘れなかつた。生憎佛教はさう言ふ事を思ひ出させる様出來てゐた。平野・山國に國作りしてからは、村々を訪ふ春の神は、歳神と言ふ名に變つて來た。大歳神とはあまり關係はなさ相な性格である。海を控へた村々の時代には、海阪遙かに來ると見た常世神が、平野山國となつて、山を背景にした。だから歳神は、山から來る。但し、山の中ではなく、野越え山越え來るのらしい。

山の端から天に上るのでもないらしいが、處によれば、歳徳は西天に歸る様にも考へてゐる。「どこまでござつた」と言ふから見れば、「杖つきもつかずも行きて」と言ふ様に、水平的に長い道來るのである。正月の神様は、先祖の魂の變形で、伴神と言ふのは、お盆と言へば伴聖靈と謂はれるものである。門松の處きり踏みこまぬのは、盆にも來る無縁精靈と言はれるものである。常世神を失うて、おとなしい歳神を得た海に縁ない地方の人々は、どうしても、常世神との誓約によつて、初春毎に村を祝ひの壽詞を唱へに來る山の神に、常世神の性質を段々多く持たせて行つた。常世の神の姿は、初めは恐しい怪物に考へてゐたらしいが、段々平和で力ある一柱又は、年老いた尉と姥の姿にしてゐた。此は古典に證據がある。常世神の老人夫婦の姿が、歳神になつても残つてゐる。さうして此間の記憶が、田樂・能樂以前にも溯り得る神事演劇の上の翁なのである。ところが、歳神の信仰はあまりに、抽象的であつた。村人の心は憑む所を考へ出さずには居られなくなつた。

山の神は海岸を見捨てゝからは、親しみ易くて頼み易いので、段々善的な神として行つた。併し常世神以來、祝福がすめばすぐにも還つて欲しい様な長い氣むつかしい所のあるのが神であつた。山の精靈も神に近づいて、醇化して行く程、段々氣のとりにくい長い處が出て來た。かうして人間との交渉は、山の神よりも、その巫女の山姥に代役して貰ふ傾向が出來て來たのかも知れない。水邊の海村にゐた頃は神を迎へる爲には、海において身を清めた。此神に應接する條件が、次第

に擴充せられて、襖被を生んだのである。穢れた爲に祓ふのではなく、神を迎へ、神に接する爲であつた。さうした常世神の爲の習慣が、山の神の上にもくり返され、不淨を忌む神であり、血を忌む神であると言ふ風に考へた。

おにと言ふ語は、日本固有の語で、隠でも陰でもなかつた。鬼をもものと訓じ（此は魔の略格かも知れぬ）、おにと稱したのは、語に両面の意があつたからである。おにの第一義は、「死人の魂」で神に近いものと思ふ。其が段々悪く考へられて安住せぬ死靈の様に思はれて行つた。恐らく常世神とまでならぬ先祖の靈と常世神との間の、死の國の強力者とも言ふべき、異形身を考へては居たであらう。死の國において、皆現世の身を失うて變形するものと考へて居たのである。神と死靈との間の妖怪でゐて好意あるものと言ふ位の内容であらう。身躰の大きい事が恐らく必須條件であらう。ものは本身を持たぬ魂で、依るべのないものである。だから、常に魂のうかれる時を窺うて、人に依らうとするのである。人に災する物の中、庶物の精靈はたまであるが、これは、唯浮遊してゐるのである。時々動物などの身の中に憩ふこともあるやうである。其變化した考へ方から人の魂でも、身を離れて悪化した場合には言うてゐる。おにの居る處は、古塚・洞穴などであるらしい。死の國との通ひ路に立つ塚穴である。神の奴隸・從者・神の弟子・神になる間の苦しみの形と言ふ様な意味を持つて來たのは第二義らしい。悪事をせない様に、神の所屬にせられてゐるのであつた。だから、常世と此土との間の洞穴や海底にゐるものと考へられてゐる。煉

獄の所生で、此時期を過ぎれば神になれるのであらう。おにと謂はれる物は、八瀬のおにも、大峰のおにも皆山の洞穴に縁がある。鬼隄皇女など言ふ名も巖穴洞穴に關係あり相だ。手長と言ふのも、神社におけるおにである。神奴として、異形身なるものをいふのだ。

地獄の生類の名としたのは、第三義で、佛教以後である。御靈になつても、おにとは謂はなかつた。巨大さがない爲である。

さすればおには、恐らく大人の義で、おほひと同義である。おには空想の所産で、山人・山の神は人間であるが、おには先住民をさう考へてゐたのであらう。先住民は巖穴に住むものと見、其が神力で従へられたものゝ子孫が、神奴のおにだとするのだ。巨人傳説の上の大人を先住民と見てゐたのである。八幡の大人彌五郎の如きも、神奴の先祖を形に表したのである。八握脛七束脛など言ふのも、先住民の名として大きな者なることを示す。智恵の勝利を示すと共に、威力を見せる手段であらう。大太郎法師も、八幡系統の高良山の大多良男命大多良女命なのである。ひいては、寺にまでも此信仰が這入つて、金剛力士を門の兩側に立たせることになつた。異教の村の神を征服した姿を見せるので、八幡には昔は、彌五郎を門にすゑたに違ひない。神と神との争ひに小さな神の勝利を示す事から、轉じて人の上にも移されたのだ。阿倍貞任も巨人であり、松岡五郎も巨人、三浦荒次郎も巨人だつた様に、わが國では被征服者が巨人化するのである。

雛祭りのおこり

昭和八年三月「家庭」第三卷第三號

三月の節供を上巳ジャウシの節供といひます。三月の始めの巳の日に行ふお節供といふ訣です。支那から傳つて來たものだといふ人もありますが、本道は支那から來たものとは日本のお節供は異つて居ります。日本に昔からあつたものと、支那から來たものが後に一緒になつて今日のやうなお節供になつたのだらうと思はれます。この三月のお節供を桃の節供といひます。今では三月には桃が咲いて居りませんが、本道は桃の花の咲く頃の節供であつて、昔の人は桃の酒を供へ、自分達も飲んで、それで健康になると思ひました。桃酒といふのは桃の花や麴などで作つた一夜酒（一晩で出来る酒）で、甘酒のやうなものです。

さて三月の上巳の日は大潮で、この日は昔は禊ハヒぎの日でありました。

お節供といふのは、節の變り目にもいみをしてものを供へるといふ意味で、後にはお節句とも書くやうになりましたが、本道はお節供であります。後にはものを供へることを忘れて家庭のお祭りとなり、その儀式的事をいふやうになりました。

そしてこの三月のお節供といふと一番先に私達が思ひ浮べるのは雛遊びのことであります。昔の本にも、ひなの殿・ひなのみやなどいふことが書いてあつて、雛を神のやうに思つてゐて、今私達の思ふやうにその頃から雛を天皇様と皇后様と思つてゐたやうであります。しかし雛といふのは、田舎にはもつと前の形のものがありません。

千葉の木更津の邊りへ行くと雛を川へ流しに行きます。「またござれ」といつて流すのです。かうして雛はもとは捨てたものであつて、後に雛が餘りに立派になつたので捨てないやうになつたのであります。

この雛をまつるといふのは、始終側に置いて大事にしておかねばならぬといふところから來て居ります。側においておくといふのは、その家に棲んでゐる人の穢れ（禍や病氣などの悪いもの）を吸ひとつてくれるもの、そのものは大事だけれども恐いもので、本來ならば手にもつことも憚るものであります。その形は大抵人形ヒナガタですが、中には動物（主として犬系統のもの）の形をしてゐることも、藁人形や又は紙で人の形を作ることもあります。この始終人間の側において、その家の人の穢れを吸ひとつてくれる人形（その他いろんな形のもの）を捨てる日が、先に言つた三月三日の上巳の節供であります。

ひなといふ語ははつきり訣つてゐませんが、多分雛形、つまり模型の意味でせう。人間の穢れをとるために祓ハラヘひをする、その時に自分の着てゐる着物なり、人間の形をしたもの（人間のひなが

た)に自分の穢れた魂をうつしてそれにお祓ひをしてきよめるといふ意味です。

この人間の代りの模型のやうなものは初めは捨てたのでありますが、後には傍へおくものが出来たのであります。穢れを吸ひとるからそれは穢れたものでありますが、それ故に又家庭の中の靈物であります。古くなつた道具に性が這入つたり、動物に魂が這入つたりする物語がありますが、それと同じにこのひなは初めは穢れを吸ひとらせる道具であつたが、それが魂のあるものゝやうに考へられて來、捨てなくなつて來る、すべて人形の起りはこれであつて、捨てなければならぬものがいつか子供の相手になつたりするのであります。家の中に人間と同じやうなものが住んでゐて、時あつて我々の目に見えてくるといふ考へ、家の中に人形がゐて、人間と同じ活動をしてゐる考へであります。奥州に座敷わらし(人形)といふのがあり、それを家と結びつけて家の中に精靈が棲んでゐて、それが氣が向かなくなると家を出てしまふ、そしてそのために家が衰へると、土地の人達は考へてをります。雛に對しての考へ方もかうした種類のものであります。

もと／＼雛祭りの中心は、祓ハヒに使ふものを川へ流す行事にありました。人間の穢れを吸ひとらせて祓をしたあとのお雛さまを川へ流すに當つて別れの式をしてゐたのでした。その式が雛祭りになつたのであります。雛が立派な人形になつたから捨てなくなりましたが、かういふ訣ですから、本道は雛祭りは川邊でしなければならぬのであります。古い書物には川邊で雛を送り流すお祭りをしてゐたやうに書いてあります。そして雛は五月にも八月にもありました。それは季節の

變り目毎に祓をして、雛を捨てたからであります。三月三日にすると決つてはをりませんでした。世の中が太平でのどかになると、一般の人が京都の貴族の家庭ですることを眞似て、雛も貴族風な上等な人形を飾るやうになりました。今のやうな宮廷の風俗や儀式に因んだ人形を飾るやうになつたのも、貴族の家の雛を眞似たからであります。地方では、昔からの習はし通り、穢れた雛を捨てるのと同時に、家の奥座敷には立派なお人形を飾つて、それは捨てないでゐました。かうしてだん／＼雛祭りの起りが忘れられて、祓のために雛を使ひ、それを流してしまふといふおまつりではなくなり、たゞ、お座敷に雛を飾つて、それを樂しむといふことに變つてまゐりました。今お雛さまといふのは、この立派になつた人形のこと、美しく可愛らしいものだといふので大切に飾りますが、もと／＼お雛さまの起りは右のやうなことにあるのであつて、その家にある道具の中で、そのやうな深い意味をもつてゐる大切な道具でありました。

三月三日に雛祭りをするやうになつたのは、三月三日は大潮であつて、穢れたものを川へ流すと、それが海へ流れ出て、恰度大潮である海の水が、その穢れを遠いところへ持つて行つてくれるといふ考へからであります。

ひめなすびとひなあそびと

— 崇神紀より —

昭和八年十月「水鏡」
第二十卷第十號

崇神天皇の御代に大彦命が將軍として北陸道に下られた時、腰裳をつけた少女が命に歌ひかけたと言ふ歌が、通常雛祭りの雛の起源や歴史に引用されてゐるが、古事記にはそれが、

大毘古命、高志國に罷り往ます時に、腰裳服せる少女、山代の幣羅坂に立てりて、歌ひけらく、

是はや 御間城入彦はや。御間城入彦はや。己がをを竊みしせむと、後つ戸よい行き違ひ

前つ戸よい行き違ひ 窺はく知らにと 御間城入彦はや

とあり、日本紀には、

(天皇、將軍を四方に遣し給ふ時) 大彦命 (北陸に趣かむとて)、和珥坂の上に到れるに、少女ありて、歌ひけらく、

御間城入彦はや。己がををしせむと 竊まく知らに、ひめなそびすも

一云

おほきどよりうかゞひて、しさむとすらくを知らに ひめなそびすも
となつてゐる。この「ひめなそび(比賣那素寐)」が雛遊びであるとされてゐるが、それは誤つてゐる。

この歌句のうち「己がを」は、「を」は「たまのをの命」などの如く今日猶不明の語であるが、大體鎮魂と關係あるものと見ることが出来る。即、鎮魂の時に魂箱に魂を入れてあると假想して、それを緒で結んで敷へながら揺ると、目的の人の體に魂がつくと考へてゐた。それが次に何時か飛躍して、生命とか生活の意義を表す語となつて、「たまのを」の「を」も廣くなつて來てゐる。「おのがををぬすみしせむと」は盗んで殺さうとする意で、「しせむ」となる以前は、「心もしぬに」などの如く勢がなくなることの「しぬに」の語根「しぬ」が屈折して活用する、それが人を死なせるとなると、語根しがすと結合して「しす」が殺すとなる、即、「しす」「しいす」と言つても支那の「死」とは關係ないと見るべきである。で「ぬすみしせむと」は、「を」を盗んで殺さうと言ふことで、「を」と言へば當時それで決つたのである。この句は命を殺さうとしてゐるものゝあることを暗示して知らさうとしてゐるのである。

ひめなすびとひなあそびと
次の「ひめなそび」であるが、これは「ひめなあそび」と言ふことで、所有格「の」が熟語として意義を失つて固定したのであるが、それを「ひなあそび」雛遊びとくのはあたらぬ。語そのものが解釋出來ないでゐて、その解のつかない語をさして當時既に雛があつたとして、雛祭り

の起源や歴史をとくことは出来ない。こゝの「ひめなそび」即「ひめのあそび」の「ひめ」は雛を意味しないし、又當時は未だ雛はなかつた筈で、雛の發達はもつと後代のことである。「ひめのあそび」の「あそび」は鎮魂の手段は全部「あそび」で、踊りも音楽も時には狩りもさうである。結局「ひめなそび」は如何なることか不明である。

そこで雛が「ひめなそび」と關係ないものとする、では「ひな」は何かと言ふことになる。雛祭りなど言ふ「ひな」の語自身意味が訣らないが、大體民俗的なことであらうと言ふことは訣る。即、他にこれと似た民俗と、「ひな」と言ふ發音に近い語とを比較してゆくと、ある點迄判然として来る。

古來史上の事實として傳へられてゐることも、民俗的なことが多い。偶然に一度あつたことが歴史であり、幾度も繰り返されて來てゐるのが民俗であるが、その一度あつたと稱する歴史のうちにも民俗的のものが多くある。これらを、特に民俗的なことを偶然起つた歴史上の事實と考へただけであると説明するが、さうばかりでもないことも亦訣つてゐる。民俗的な考へ方になれてゐて、事實歴史であつたことも發想上民俗的な表現法にしてしまふから、民俗と似てゐても歴史である場合もある筈である。たとへば、源頼朝が伊豆の蛭ヶ小島に流されたのは事實らしい。處がこの蛭ヶ小島の「ひる」の語から考へると、少くとも民俗から考へると、如何にも流されたものにつきさうな名で、足腰が立たず舟に乗せられて流されたと言はれてゐる「ひるこ」と言ふ神等

の所謂貴種流離譚の一つの集りを考へても、頼朝配流の地名には、この流され神の名「ひる」が這入つてゐると疑はれる。又頼朝配流の物語は、伊豆地方にもく別の貴種流離譚があつて、それと歴史上の事實とが結びついたと考へてもよいと思ふ。このことは、たとへば神武天皇に諸國の傳説がついてゐる例を見ても證明出来ることである。で、頼朝配流は全然傳説であるとされさうであるが、暫らく歴史が民俗に似てゆくものとしておきたい。

この「ひる」と「ひな」と關係がある。

「ひる」—— 蒜は地下莖をもち、年々春毎に芽を出すものであるが、「ひる」のうちにもう一つ考へるべきは、尾張・美濃・信州伊那へかけて、蠶の蛹を「ひど」と言ふが、これは「ひどる」と關係がある。蛾が「ひどる」であるが、沖繩では蝶を「はべる」と言つてゐる。これを見ても、蛾と蝶とが似てゐる點からも、蛾の「ひどる」が蝶のことにもなつてゆくのであるが、その蝶「ひどる」と蛹とが又共通になつて蛹が「ひど」になつたのである。

岩手を中心に奥州の山の中に「おしらさま」と言つて、桑の木の三又の處を頭にして着物をきせたものがある。地方によつてこれを地藏さんと結びつけてゐるが、本來は神らしい。大體三月節供頃になると、「いたこ」(巫女)が山から出て來て「おしらあそび」をして村の家々を廻る。この奥州で「おしらさま」と言ふのは中央の發音では「おひらさま」で、例外なく「おひなさま」としてよい。即、「ひな」が東北に行つて「しら」となつたのである。近年柳田國男先生はこれ

を蠶神であるとされた。方言で「ひいら」「ひら」等もあるから、「おしらさま」は蠶神で蝶だつたことが決る。

我々のもつてゐる「ひる」「ひら」「ひな」等の語に特殊な意味がある。普通「ひな」は雛形、即大きなものを小さく表したものである。これには鳥の「ひな」(雛)と言ふ考へが働いてゐる。小さなものとしてそれが出てゐる。少くとも蒜は地中の玉の様なものから芽が出て来る、その點に意味があるので、鳥の「ひな」も殻の中から思ひがけないものが出て来る有様、又はそのものを「ひな」と言ふと考へる。又昔風に言ふと、人體についてゐる穢れを移すもの、紙など切つて人體に模して作つたものを「ひな」とか「ひなな」とか言うてゐるが、人の「ひながた」が「ひな」「ひなな」であると言ふ考へ方は如何と思ふ。なぶるものもあるが、民俗によると、人形を恐れるものがある。これは人の穢れを吸ひ取つてもつてゐると考へてゐるからである。處がそのうち我が國では遊びの方が發達して來てゐる。これらを人の雛形と思つてゐるが純然たる雛形でないのが澤山にある。「ひな」の語の中に、別々の「ひな」と言ふ語があり、そのうち似てゐるものをもつて見ると、都から遠方の場所を「ひな」と言ふが、これは都を離れた地方の國と言ふことらしい。即、異郷と言ふ意をもつてゐる。この異郷をば、恐い所と幸福な所との二様に考へる。異郷である「とこよ」はもと暗い國であつたのが、次第に理想的な國と考へられる様になり、豊かな長命の圓滿な戀愛の國とも考へられて來てゐる。萬葉集で「長命」を「とこよ」と

してゐる。大伴旅人の妻をいたむ歌に、

吾妹子が見し とももの浦のむろの木は、とこよにあれど、見し人ぞなき (卷三、四四六)

とあるこの「とこよ」は、常世の所産であるから永久不變だとしてゐるらしく、これを見ても次第に異郷がよい所とされて來てゐるのが決る。この「とこよ」と「ひな」は同義語と思はれる。異つた地方で行はれてゐたのが「とこよ」の方が發達して残り、「ひな」は都に對し未開の所として残つたらしい。つまり歌の上では「ひな」は明るいものになつてゐるが、本來は暗澹たる所、即、遠い異郷と言ふことらしい。

三月節供に紙雛をつくる理由は、人間の穢れをそれに移して川へ流したのであつて、雛の起りはそこにある。穢れを移すのには必しも小さくなくともよく、大きなものであつてもよい。二百十日前の雨風祭り、稻蟲除けの人形等を作るが、これらは考へ方によると、それら自身が悪事をはやらせに來ると見られるが、善神と悪神とは性質が或點似てゐる。古代には年一度又は何年目に一度と遠い國から神が來て、土地の精靈を抑壓して歸つて行つてくれると考へてゐた。さう言ふ善神も怒らすと極端に悪くなるとして、風神・疱瘡神なども通つてくれるのはよいが、残られると困るとした。それでこれらの神を送る歌は神をほめてゐる。來てくれないと困るが長くゐられると困るからである。沖繩では疱瘡のことを「ちゆらかさ」と言つてゐる、「ちゆら」は美しいことで、「美しいかさ」と言ふので、疱瘡神をたゞへたのであるが、それが單に疱瘡のことにな

つたのである。雨風祭りとか蟲追ひとかに人形の出て来るのは、かう言ふ工合にこらしめてやる
と言ふのではなく、事實は村の穢れを吸ひ取つて持つて行くと考えたのである。祝詞にも穢れの
流れてゆく順序がある。つまり異郷から来た穢れを吸ひ取つて行くもの、それが大きい人形であ
つても亦「ひな」である。

一方小さなもので、貴族の家の中にゐて、人間の穢れを吸ひ取るものもあつて、それと見られる
のに我が國の天皇の御傍の矮人があり、支那の弄臣、西洋の Fool があつて、これは何處へでも
出入するものとなつてゐる。我が國の小子部は天皇の御命令の小人を集めずに蠶を集めて来た
言はれてゐる。これは宮廷の矮人・小人を管理した家柄と言ふことになるが、この傳へでは蠶と
一寸法師とが一緒になつてゐる。采女舎人なども國々の精靈として宮廷によせてゐるから、信仰
的には一種の小人である。小さいものが穢れをとると言ふ信仰になる。後にはかく小さいものば
かり残つて来るので、大きなものは「ひな」と言ふ聯想には這入らなくなるが、もとは大きなも
のもあつたのであつて、根本を言へば「ひな」は「とこよ」と同義語で、異郷・他國と言ふこと
らしく、其處から時あつて出て来て、國々のいろ／＼の穢れをとつて行くものと考へてゐたので
ある。

以上で、崇神紀の歌の「ひめなそび」が雛の歴史と關係ないことは明らかになつたと思ふ。

宵節供の夕に

昭和二十四年三月二日
NHK婦人の時間放送

今日は三月二日。明日はもう、上巳ジャウシの節供ホウクである。温かなれば温かなで、静かであれば、静か過
ぎる冬だと言つて、氣候の不順を歎いた寒い三月ミツキも、これでどうやら、過ぎて行きさうだ。私の
生れた上方カミガタではこゝ四五日を「奈良の水取り」と言つて、冴え返る春の寒さのどん底のやうに言
つて来たものである。

東京都など明治文化の中心となつた地方では、太陽曆が壓倒的な力を持つて、「年中行事」も、日
どりは一々新しい曆にくみ替へて、凡一個月早めに實行して来た。其で、桃の節供にあげる花も、
もう四五日前から、室ムロ咲きの桃の枝を飾つてゐる筈である。

幸に、震災などに遇はなかつた家——いや震災から立ち直つた家々では、可愛いその家の女の子
の寂しい春を豊かにする爲、立て雛の畫の像を掛けたり、雛の御殿を組み立てたり、そのうへ、
菱餅や白酒を整へて明日の節供を待つてゐることであらう。

もうさう言ふ楽しみに別れて、何年にもなる人々——母や叔母、時には姉なる人が、子供等に指

圖して、幼い人に返つたやうに、心ときめかして居ることだらう。

どうか、さう言ふ幸福な家々が、一軒でも多くあるやうに、又その嬉しさにほころびた少女たちの笑ひ聲が、日本の土をとよますやうであつて欲しいものだ。

私どもは男だけれども、さう言ふ母なり、姉なりの持つて来た清い心を感じることが出来る。幼い娘たちの喜び遊ぶを見て楽しむと言ふよりも、自身まづ、こみあげて来るやうに懐しい、若き日の思ひを押へかねてゐる様子が、浮んで来る。

箱を出づる顔忘れめや。雛二對

この燕村の句など、讀むと同時に起る感情に連れ、意味は流れるやうに響いて来る。中世から近代へかけての、日本女性の溜め息のこもつてゐる、と言ふ氣のする句である。

雛祭りが近づくと、去年の春からちよどまる一年、棚の上に堆い埃をかついてゐた箱をおろして来て、雛段へ据ゑようとする。此が女の子らに出来ることではないので、成長した婦人が、手を貸してやらねばならぬ。箱の蓋をとる時、軽く起るあるためらひ。嚴重に守られて来た貴重なものを見ようとする時、起る氣持ちと、おなじものだらう。古い雛が、去年のまゝの姿であるだらうかと言ふ、ちよつとした不安が、心を掠めるのだ。箱の蓋をとつて、絹や、薄絹をめくると共に、あらはれて来る雛の顔——。物心づいて以來、馴れ馴染んだ親しい顔である。まぎ／＼と印象してゐるとほりの雛の顔だ。だが、あまり馴染んでゐる爲に、見ないでゐる間の印象は、實

際今見る雛の顔容よりは、平凡化してゐる。はつとして見る此親しみ深い顔は、記憶を超えて、懐しい昔顔である。常日頃繰り返す近代の生活——。其日々に見ることのない優雅な昔を夢みるやうな顔。どう努めて見ても、想像には浮んで来ない靜かな美しさ。去年とり出す時も、こんな氣がしたやうに思ふ。をと／＼しもさうであつたやうな氣がする。記憶に持つて居た顔よりも、目に見れば、更に優雅な雛の容貌——。

此國の女性の年毎の「春の思ひ」の幽けさは、かう言ふ心持ちに深く根ざしてゐるのであらう。日本のをとめの心を譬へにとつて、言つて見よう。胸の渚に寄せる感情の波皺が、淡い記憶の痕を残して行く。をとめ子は、やがて叔母となり、母となつて、遙かな想像の青海を心に描くやうになるのである。曾て自身がさうだつたやうに、たゞ喜んでばかり居て、何もえうせぬ小さい女の子の爲に、雛段の飾りつけから、種々小道具の出し入れ、節供の眼目なる飲食の世話まで、一々心をくばるのである。

昔の母達がしたやうに、雛の箱のあけたてに、男雛・女雛の顔々、そのうちけぶる眉のにほひ、つる／＼とした塗り地の、やゝ灰ばんだ頬のあたりの幽かなよごれまで、記憶のまゝの倂で、箱の中から現れて来る。悲しみと言ふには、あまり穩やかに、喜びと言ふよりは、靜か過ぎた思ひ——、母の傳へた祖母の愁ひ、祖母よりも更に遠い曾祖母の願ひ——

我見ても久しくなりぬ。住の江の岸の姫松 幾代經ぬらむ

と言ふ歌がある……その住の江の松ではないが、かう言ふ心の底の幽かなる思ひも、家々の女性
の間に、消えることなく、傳つて來たのである。子なり、孫なり、曾孫なる今後の日本婦人たち
もこの傳來の靜かなる思ひは、うけついで行つてくれることだらう。何時からとなく、男の子は
雛祭りの傍觀者となつてしまつてゐた。だが其だけに、家族のうちの女性の動靜を、ぢつと觀察
してゐた訣である。

箱を出づる顔忘れめや。雛二對

あゝこの顔——覺えてゐたとほりの雛の顔——。懐しい昔顔の^{メウ}女夫の雛。幾代の若い母たちの感
動を、脇から見てゐた、代々の男の子の、人間としての同感が、歌はれてゐるのである。

先日もある處で、曾ての大貴族だつたお人に逢つた。思ひの外、のどかな氣持ちで暮してゐられ
るやうなので、こちらの心も安らかになつたが、その時、出たのが雛のはなしであつた。

「古くから、雛はおまつりになつたでせうな。」

「我々の家では、最近まで、さう言ふことはなかつたものです。」

「でも、何か其に似たことがおありになつたでせう。」

私が、お尋ねすると、

「さう。天兒さんと言ふのが、ありましたつけ。箱の中に入れてあつて、めつたに見ることもさ
せませんでした。何だか、こはいものゝやうに、思はせられて來ましてね。」

「どんな形を致して居りました。」

「長い脰つきが、世間で言ふ縫ひぐるみの犬のやうなもので、四方の端が、足のやうになつて居
て、丸い頭が縫ひつけてあつたやうです。」

宮廷にも雛を祭つてゐられたことはあるやうだが、此もはやりすたりで、臣下の屋敷のやうに、
いつの時代にも、あつたとは言はれぬかも知れぬ。このおはなしに出た、天兒や、其から這子の
やうなものが、始中終居間のうちに置いてあつて、身に染みついた穢れや、近寄つて來る物の汚
れを吸ひとらせたことは、近世まで變りなく續いてゐたやうである。

ある時期には宮廷でも、一部には、「雛の殿」と言ふものを設け、それに男神・女神の形が据ゑて
あつたことは疑ひがない。源氏物語などにも、さう言ふ記事がある位だから、さう言ふものゝ中
には、臨時に作つて、からだを撫でゝは、けがれを移して棄てると言つた物もあつたらうし、凡
半年一年と言ふ長い間——年二度の祓へから祓へまでの間は、据ゑおきと言つた形で、飾つたの
もあつたやうである。

此等のものを、形代・人形・ひゝなど、自由に呼び習はしてゐた。其うち、段々拵へて手のこ
んだ、形も人の模型のやうなものを、おもにひゝな又はひなと言ふやうになつて行つた。其でも、
臨時に流し棄てるやうな物でも、紙をひとばさみで切つたやうな物でも、雛と言ふことはあつた
やうだ。

三月上巳ジヤウシの節供に關聯した人形なら、一往、雛といふ名でよぶことに定つてゐたやうである。この上巳の祓へと言ふのが、變つたところを持つてゐたらしく思はれるのである。三月上の巳ミの日に行つたから、上巳の祓へなので、此日どりは、中國傳來のものと言つてよい。だから日本には、日本固有の禊シヅメぎが、三月の初めにあつたことも、事實である。今も潮干狩りの行はれる時期で、殊に三日の日を大潮としてゐるが、此は必しも、自然の事情まで其に順應する訣ではないが、大體この日の前後に、海の潮の満ち干が目立つて激しくなるのが、日本群島をとり圍んだ海洋の習はしなのである。此が、信仰に結びついて、毎年三月三日、住吉の汐干祭りといふのが行はれた。此日は、住吉社前の海の潮が遙かに落ちて、西は淡路、南は紀伊の淡島に及ぶとまで言はれてゐた。其から、此日の海道遙を亦、「住吉の汐干」と言つて、古い誹諧の季題であつた。

古くからの言ひ傳へには、住吉の姫神が、女の病ひに苦しまれたのを、宮の片扉カタヒラを外してのせ、神樂太鼓を添へて海に放つたのが、流れついて紀州加太カガの淡島の社になつたと言ふ。

劫初以來呪はれた女人の苦しみを救ふ爲、此社を本社とする神人と言ふ者が、諸國に多く立ち廻つた。淡島願人アシマダランニンと呼んで居た。女の集る宿や、町に出入りして、籠の鳥のやうな人々の爲、その悲しい姫神の由來を説いて聞かせたものである。心素直で、人を疑はなかつた昔の日本の女性は、髪カミの毛や、頭の飾りなどを之に與へて、おのが身の罪障消滅の爲の代參を頼んだ。だから戀人に逢はれぬ男が、此淡島願人の姿になつて、吉原町に入りこんで、思ふ女性と、悲しい物語をする

と言つた、わびしい空想を書いた戯曲も作られた。今もその抒情的な部分の斷篇化した歌が、「淡島」といふ曲になつて、長唄や常磐津節に残つてゐる。住吉の神の人形に、姫神自身の姿を添へて、之を舞はして慰まれたのが、男雛・女雛の初まりとする淡島の昔語りを、説經のやうに語りひろめたのも、此人々である。

上巳の節供に人形を流す習はしは、その日を離れても行はれてゐた。春の大潮の満ミし干ヒきする日を、われ／＼の祖先は、常世の浪の來寄る日と考へてゐた。老いたるは若やぎ、病めるは癒え、すこやかなる者は愈榮ユキえるといふ——常世國の春の潮を浴むることを競うてした。

此日の禊シヅメぎの信仰は、天平テイヘイに出來た出雲風土記にも、明らかに記されてゐる。夏・冬二度の大祓のやうな穢れを祓ふと言ふ信仰は、之には含まれてゐなかつた。この喜びの日を、中國の信仰を持ちつたへた人々が、やはり唯の大祓に近い日としてしまつたのだ。だから人形は流すが、其は流しするものではなかつた。春の潮に乗つて來られた常世の國のまればと神を、送り返すものとして、雛流しの風は傳つたやうである。

祭り過ぎて後、送り雛の習はしを、重くしてゐる地方が、今も相當にある。

水邊の村の處女たちは、かくて又來年も、常世浪の岸うつ日、春潮に乗つて來て下さるやう、雛に別れを惜しむのであつた。逢へば別れねばならぬ。此が昔の神祭りに絶えぬ歎きであつた。だからかういつてゐる。今も、明日のゆふべの雛の別れの悲しみの詞が、あらかじめ耳もとに聞

えて来るやうだ。

おおくる おおくる。お雛さま おおくる。

來年もまた ござあれ。來年もまた ござあれ。

雛祭りとお彼岸

昭和十一年二月二十九日「東京日日新聞」

明治以後、曆法の變化によつて年中行事の日取りが變つたものと、變らないものがある。だから、三月の行事といつても舊曆によつて行つてゐる行事はもと二月であつたものが三月のこととなり、舊曆の日取りをそのまま新曆に移したものは依然として三月に行つてゐる。後者でいへば東京の雛祭りがさうだが、多くの地方では未だに舊曆で行つてゐる。譬へば雛の節供（節の祭りととも供へ物をする意味）に用ゐる桃の花なども、新の三月三日には室咲きを用ゐなければならぬ、といった錯誤が起つてくる。前者の方でいへば彼岸會の如きものがある。この二つを中心に新舊三月の行事を解説してみよう。

現在では彼岸の中日が、春秋兩季の皇靈祭と重つてゐるので一層複雑になつてきた。だが普通彼岸會なるものは佛説によつて成り立つといふが、根柢から佛敎的のものではない。たゞ彼岸會を修することのはじまつた頃——凡、平安朝初期とする説が正しからう——には、春分・秋分の日から各七日間行つたことは事實で、こゝから彼岸會の根本精神を解く手がかりも生ずる。つまり

この季節に當つては、日が正東から出て正西に入る。いはゞ彼岸なる阿彌陀の淨土に最短距離を示す日であるわけだが、かうした曆法を詳しく知らない時代の人が、勿論こんなことを考へるわけはないが、曆法を理會すると同時に、それ以前の信仰を合理化し、新しい年中行事が起ることになる。即ち、彼岸會の考へられる以前にその根柢があるわけだ。叡山の坂本には古くから彼岸所なるものが廿一个所あり、恰度古く叡山にあつた彼岸談義所に相當してゐる。春分・秋分に當つて、そこで談義を行つたところから起つたものと思はれる。國々ではこの頃から晩春へかけて女の山籠りが行はれ、叡山でもこれより遅れて、里の女達がみな山に登つて山の花を折りかざす行事があつた。

恐らくこの行事に關聯して起つたものが比叡の談義所だと考へられる。その遺風と思はれるものが今もあつて、地方ではなほ「日の友」など々稱して彼岸の中日、東に日の上る頃から、西に日の沈むまで、篤信者が野に出て一日歩き廻つてゐる。この行事は恐らく山籠り——山に遠い地方では野遊び——の風習をほかにしては説明出來ない。比叡について大阪の四天王寺の彼岸會は見逃すことができないもので、その中日には、善男善女が寺の西門に集つて日を拜む習慣がある。四天王寺の塔は極樂淨土の東門に向つてゐると信ぜられ、春秋彼岸の中日が一等適切に西方淨土と相向ふ日と考へたものである。これらが彼岸會なる風習がわが國に生じた、最強の佛教的根據といへばいへるが、むしろ春分に近い春の日に山籠り・野遊びをする風習があつたことを示して

みると見るべきであらう。

山籠り・野遊びといふのは、里の神事に先立つて女だけの共同の物忌みの日があつたわけで、里の異性達の届かぬ場所に籠ることによつて行はれるのである。これが後には春の行樂として、運動會・修學旅行などの古風なものゝやうな形をとつた地方もあるわけだが、この山籠り・野遊びが雛祭りと結合してゐる地方が多い。雛祭りは王朝の風流に幻惑されて、支那傳來のものばかりと思はれてゐるが、平安朝の物語類をみると、現在でも地方に残つてゐる禊ぎが行はれた名残であることを示してゐる。譬へば光源氏、須磨謫居のくだりにも、三日の節供に大きな人形——自分の姿に似せた人形を船にのせて流す描寫がある。

近代でも川に近い地方では、この日形代を川に投ずることがあり、「お名残り惜しや。來年もござれ」といふ類のことをいふ。このこと及びいはゆる立雛の形から、雛人形は襦袢に用ゐる形代の變化と考へるべきである。その形代を直ちに流し捨てることもあつたらうが、常に座右において親しんだことから人形となつたが、何故上巳が女、端午が男の節供となつたかといふと、前述の山籠り・野遊びの時季になつてゐたに過ぎないのである。

民族精神の主題

昭和二年十一月「國學院雜誌」第三十三卷第十一號

民族精神の史的研究を立ちどとする學者の間に通じて、大きなまちがひが、尠くとも一つは行はれてゐる。世界中の民族文明の基調を定めてゐる思考の法則が、いつでもいんど・ぎりしあの論理學の中に含まれてゐるはずとする豫斷を離れ得ぬ事である。民族の特殊文明の發生は、ある點以上は説明のつかぬ事になるはずである。國民思想・民族精神を論ずる先輩たちが、どんなに分類を正確にし、項目を細やかにしたところで、功利と合理とが、ゆきとまりになつてゐる。

西洋論理學は、佛家古渡りの因明だけの爲事はして居ない。其だけ同じものが、長く沁みこんで、用のなくなつた頃にやつて來たのであつた。因明以前に、民族論理を國際的思考法に近づけたのは、道儒二教の持つ論理であつた。道教の方のは、歸化人らの接觸から、最早く影響を示してゐた。此三つの教理と學問とが、三段に古い形を變形させて居る。比論も、逆推理も、詭辯も、正しいものであつた。五因・三段論法のどの行からはじめても、古代論理では確かな結論に達してゐた。淮南子の説話と、日本紀の傳へとの違ふ點は、一は常に相對であつた。一二の相對から、

三が分出すると言つた考へ方は、道教論理の印象として、我が國にも古く現れてゐる。佛敎や西洋哲學から、記紀其他の古典を説明しようとした者は、常に失敗である。叡山・高野の神道觀を始めて、たゞ今の哲學者の論などに到るまで、皆一種の技巧を見せてゐるだけである。

私は古代論理について、十二分の實證を具へてゐる。日本國民の特殊性情を論じようならば、まづ此用意は忘れては物にならない。私は、文法の上にも、此例をいくつも見てゐる。道德・宗教・藝術・社會組織の上にも、此思考法の倣が、はつきりと印してゐる。

古傳承の呪詞や、敘事詩の詞章が、民族論理の發生處であつた。だから其後は日本文學が、文學論で説明しきれぬ變態な表現法を持つことになつたのである。殊にこれの著しいのは演劇・舞踊の方面である。よくも此まで、西洋藝術の制約をのり出したと思はれる程である。其原因は一言に言へる。此方面が、一等長く神の論理に隨うてゐたからだ。

氏神及び「やしろ」

昭和三年頃草稿

500

春日の社の齋はれた地は、大春日部の本貫であつた。此處に枚岡から移されることになつた理由は、今も見える地勢に因つてゐる。又その地に絡んだ物語・舊事に對する信仰から來たものもある。

大春日部は、私部の劃時代式の意義を持つたものであつた。私部が、天子の日記部・日置部に對して、后妃の爲に後れて出來た新規な、私的のものである處から、私の字を代表的に使ふのである。私部の中、古いのは丹波氏に屬するものが多い。恐らく水の神及び、禊ぎの信仰を本意として、日記・日置に對して、存立を認められたものと思ふ。だから、子代でも勿論名代でもなかつた。其が、混亂を來したのである。私部が次第に、ある后妃との關係に止る様になつて、子代の様になり、其名や、家名を冠する様になつたのだ。

皇妃の、天子の禊ぎに與る事は、私が別に書き續けてゐる（民族二の六・三の一……）。

大春日皇后の名代大春日部その他の起原論は、私部の私領の意に變化しかけた記念である。

春日の地が、加茂の前型と見るべき地勢を見せてゐる。此は、禊ぎの地であつたのである。其と共に奠都のはじめには、地主神であつた。前代久しく續いた三輪山に似た畏怖を宮廷生活に抱かした。三輪山に穴師山ある様に、大春日部の氏神に對して、御蓋山に續く添上の「山村」の地があつた。だが、奈良の都では、神の種姓を替へる様な事實を現じたらしい。狹井の社などは、其原形を小さく残すものだが、春日氏の神は、藤原氏の神と一つになつて行つた。私部の春日氏は、天子の禊ぎを新しく専らにしようとした藤原氏と、水神所屬高級巫女を出す家として、一つものと考へられ出した。中臣から藤原氏に改めたのも、ふちはらが禊ぎの部曲の名であつた爲である。

春日の神は、詮じつめれば狹井社となつた。此が三輪系統のものとせられるのは、宮廷との關係からである。春日社・枚岡社を一つに見做す様にした原動力は、祝詞の威力と、中臣氏の其を専ら代宣つ位置になつた爲とである。春日の神を禊ぎの神として、藤原の神の祝詞を唱へる。春日の神は、即中臣藤原の祖神であり、中臣の氏女は、春日氏の女でもあつた。枚岡にあつたのも、更に大原野に移つたのも、皆かうした方式で、神の同化を行つたのであらう。

率川の流れは、加茂の御手洗川と同じである。私は思ふ。思金神の異稱と信じられる天兒屋命は、中臣氏の祖先と信じられる原因を持つて、信じられて來たのである。此祝詞神の唱へ出した詞章を傳誦する者は、其子孫とせられるはずだ。だから、關係のなき相な常陸の武神や、物部氏因縁

氏神及び「やしろ」

501

の鎮魂神を祀りながら、尙兒屋根命を祖神として系統を組織してゐた。中臣天神壽詞を見ても知れる様に、「山の水の司掌」「山の神の神人」であつたらしい。

春日の社は、大春日の氏神としても、中臣藤原の氏神としても、不都合はなかつた。神名によらず、土地及びその性格の差別によつて居た古代には、春日・中臣の祖神は、一つ神の別名と考へてもよかつたのである。

畏るべき地主神が、かうして中臣藤原の祭神となり、祖神となつて了うた。私かに言ふ。春日の神は、合理的に藤原の氏神とせられるが、石上神が物部の祭神で、祖神でなかつたのが變じたと同じ道筋を、新時代式の變化を加へて辿つたものらしい。だから、中臣の常陸出貫を説くのも、春日の祭神は固より、枚岡や、大原野の神名が、果して最初のまゝか、どうかは知れない。

春日の社は、春日氏の社を藤原化し、地主神を變じて、宮廷の古來の隨神としたものと見られる。かうした、水に近い地に、宮城を定める事は、飛鳥末・藤原以來の、支那式の風水信仰である。神社以前の神は、靈魂から具體化して、地物をその身柄と考へられる様になつた。更に住宅地の精靈或は、氏族守護神は、高い架け造りの里遠く又は、家より高い、無蓋・有蓋の建て物に祀つた。

其爲には、天上にあるものとせられる神の爲には、天の御柱を聖地の四方に立て、屋根は高天原の八尋殿の物を翳すとした。此が、諏訪の御柱の古義であり、天の御柱が、一本の「心の柱」

を意味するものでなかつた事を示すのである。此が「ヤシロ屋代」であり、屋と見立てた原義を見せるのだ。

天つ社・國つ社の分け目は、こゝにあつたかと思ふ。國つ社は地物や、高倉や、櫓を以てするものである。天つ神・國つ神の拜祀の處とは、言ひきれない。國つ社は、元來天つ社から類推したもので、「やしろ」は、かうした造りに言ひそめたのであらう。三輪は、天つ社を尊稱と考へる時代になつても、「やしろ」のなかつた事は、明らかである。三輪の殿戸も、神殿の戸とは言ひ難いのである。三輪系統の「みもろ」の社地は岩窟が中心である。

「やしろ」が、皆屋根を持ち、住宅風のものに改つたのは、奈良を去る事遠くはなからう。神の來訪時に、主人の出で居て待つ「出居」や、家いへつ神の代表なる火神の居處を、一定した部分にし、棚・さずき・高倉類が、次第に住宅様式に近づいた。「神の屋」又は神序カミタテなる屋そのものなのに、「やしろ」を稱へた。

だが、やしろは「神屋と見なすべきもの」の義は、外れない。屋は、屋根の下は、床をかゝぬ地上をも言ふ處に、「との」と違ふ處がある。

諏訪系統の諸社の様に、社殿の四方に、御柱を立てるのは、形式化して残つたのである。

「神のやしろしなかりせば」の歌を見ても、神殿及び其屋敷の存在を呪ふ氣持ちにとるのは、早くからの理會であらう。併し、春日野の平蕪の中をきり開いて、御柱を立て、あるのを見て、此

邊に種を蒔きたいと考へさうな事を戀の比喻に使うたと見る方が確かに穩やかである。此歌の出來たらしい奈良の都の末頃にも、社殿がなかつたとは言へない。しかし、かうした發想は、前々の類型を思はせる式のものであるから、他の「やしろ」に寄せた專有者を呪うた古民謡を地方化・時代化したものとも考へられる。

私の「やしろ」説が正しいとしても、かうした異論は豫期してかゝらねばならぬ。だが、歌の解釋としては、此意見を採る方が、順當である。此「やしろ」の中に、「心御柱」式に、一本の柱を立てるのは、國つ社の風が移つたのだ。加茂の「みあれ野」は、其が壞れたものらしい。かうした「みあれ野」風の標め地が、春日の社にもあつて、御蓋山かけての山野にあつたかも知れぬ。さうして、其を後まで「やしろ」と言うたのかも知れぬ。何にしても、「やしろ」の、形式的の神又は、假りの物だつた俤は、後まで残つてゐた。「川社」などは——棚の變化したもの——宮でも、殿でも叶はなかつたのである。後世の社は、宮の様式となつた。唯、宮廷尊仕の社殿と、其以外の神殿とを、區別するだけの語になつた。

「みや」の屋敷内の、部分的の建て物を殿というたらしい。だから、殿の綜合が、「みや」であつた。「との」は、一つ殿の中に、區劃した部分をも言ふ事になつた。八神殿などの殿も、此「との」である。だから「相殿」と言ふ祀り方も、殿を一つにする事ばかりではない。おなじ殿の内のしきりを隔てた神々にも言うたらしい。

相殿の神は、一方が主神で、他は奉仕者であつた。其が後には、奉仕者が、主神の意思を傳へる處から、尊奉せられて神格を考へられたものを、同殿に祀つたのが初めらしい。

姫神は疑ひもなく、ある時代又は、數代續いて一人と考へられた高級巫女である。此は或は、中臣の氏女から出た人神と言へるだらう。此姫神の信仰が終に主神を、女神とする事にもなる。此姫神が生んだと信じられる主神の子を若宮・御子神・王子など言ふ。姫神は、平安初期に設けられた藤原氏の齋女よりも、古い常任の巫女であつたであらう。

春日の祭りに事へた山人は、大原野にも仕へてゐる。春日では、此人々の一部が猿樂の四座になつたらしい。大和猿樂の仕へた若宮祭りは、王朝末からの事である。猿樂として分化したのは、更に後れてゐる。此御祭りミツリ以前から、春秋の本社の祭りにも參加してゐたであらう。が、此新興の祭りと共に、榮えて來たらしい。

若宮の祀られたのは、源氏の畏れの深まつた頃であつた。源氏の氏神八幡神を若宮として、本社の本社の力で抑へようとしたのであらう。さうして八幡流に冬の神樂を奏して、其威靈を鎮めようとする目的に叶ふ様になつたらしい。

かうした怖しい託宣が、巫覡・寺僧の間に廣まつた時代である。「あまた源氏のある内に、八幡太郎は畏しや」。八幡神が春日神に替らうとするなど言ふ夢想が、かうした社の建立を導いたのだ。源氏は、又之を凌がうとして東大寺を氏寺にして、藤原の氏寺に對した。

記紀通じての難語の中、此語などが尤なものであらう。記の「かれ、こゝにあまつひこほのに、ぎの命、天の岩くらを離れ、天の八重たな雲をおしわけて、いつのちわきにわきて、天の浮橋に宇岐土麻理蘇理多々斯互筑紫の日向の高千穂のくしふる嶽に天降りいましき」とあるのが、紀では、此語の一部を語源的に「浮渚」の字面に宛てた。「則、櫛日の二上の天の浮橋より、浮渚在平處に立ちて（本文）」とある、一書に、「浮渚在平地に立たして」と、二つある異本が等しく宛て字してゐる。記の方は用言の中止法と見て、「そりたゝし」の修飾と考へてゐるらしく、紀の方は、どれも平處の修飾ととつてゐる様である。記の方は確かに動作を表すものと信じてゐたらしいが、考へて見れば編纂以前既に訛つてゐたものとも見られる。「うきじま」を紀のとほり「浮島（＝渚）」と見、「り」を「に」の轉音と見るとも出来る。さうすると文意を理會し乍ら記録したもの（顯事Ⅱあらはりごとを、あらはににごとと言ふ、大國主國讓りの條の轉訛例が、殊によく似てゐる。）とすれば、「（天の浮き橋に、浮き島に）そりたゝし」と言つた風に、そりたゝしの

對象語は二つある訣になる。さうして、更に考へれば、「天の浮き橋即浮き島にそり立たし」と言ふ様にもとれる。併し恐らくは、既に形式固定して、意味の辿れなかつたものと思はれる。其が日本紀の引いた方の傳承になると、言語情調の分解を試みて、「うきじまりなる……」など言ふ形になつてゐる。

この語の解釋いろく試みられてゐるが、古事記傳はじめ、どれも採るに足らぬ考へである。唯これに似た形がある。清寧記の袁祁命の歌、

大君のみこの柴垣。夜布志麻里、斯麻里母登本斯、きれむ柴垣。やけむ柴垣

日本紀武烈初年に、

大君の耶陞の組み垣。圍めども、なをあましにみ、かゝぬ組み垣（平群、鮪）
臣の子の耶賦能之魔柯枳（一本、耶陞哥羅哥枳）。下とよみ、地震がより來ば、やれむ柴垣

（天皇）

うきじまり
想像する事が許されるなら、此記紀の歌は、元の形は、「大君のやふの柴垣。やぶしまり……」と言つた様なのであつたのが、分裂して、幾とほりにもなつたのではあるまいか。やぶは八編と啓とを懸けたので、固く人を警戒してゐる様子を嘲笑して、そのとほりにしても、遂には、柴垣同様、其が破れて人に奪はれようと言ふのだらう。やぶは「やぶさか」の語根である。「しまる」は、宣命の慣用語として、官吏の勤勉を勵ます詞に度々出てゐる（續紀）。務む（つとむ・いそし

む)と言ふ語と對語句になつてゐる。今日もある用語例の放漫と反對であると同時に、勤勉の意の深い語である事が察せられる。

枕詞の一つの様式として、連用形から固定させて獨立性を持たせるものがある。「あられふり：(十かしましきしみ)」「安見爲給」など、連體的語感を避けた一面もある。此例から見ると、「うきしまり」も「うきしめる」と言ふ風な熟語動詞のしむの完了形の「しめり」と言ふ連用形とも見える。さう見ると、「たひら」「たゝす」などの枕詞と考へる事も出来さうだ。今一步進めて考へると、「天浮橋より(一書)」のよりに注意を集めてよい。此よりは進行の意義の動詞の對象語につく互爾乎波であるから、「天の浮橋をばうきしまり」となるので、大體天の浮橋を行きとほりと言つた事になりさうである。天の浮橋をばうき(行き)畢りて、とも説けさうである。「そり立たす」は勿論古事記傳の言ふ様な「反る」ではない。地上におり立つ状態を言ふ語らしい。傳誦時代の意義の無反省から來た訛りもあらう。書寫の謬りも考へられるが、まづ今の處では、死語と見ておく外はない。強ひて言へば、語原不明の「揃ふ」と言ふ語の原形が「そる」であつたかも知れぬ。人數を揃へてなど考へる事も出来る。尙試みに二説を述べて、後人の爲の暗示に残せば、「うき」には「うけひ」(本論「ほ」の條参照)の意があるかも知れぬ。「うけひ」の動作を「うきしまり」と言うたとも見える。又「うき」は盞の事であるから、酒を天の浮橋の上で用ゐて、宴を行つたか、占ひをしたか、祈禱をしたか、さうした風のめどもつく。何にしても、多

くの例がさうである様に、枕詞と見れば無雜作に紛れてとほるが、其外は、見當のつかぬ語である。私は思ふ。記紀の記録せられた以前既に久しく、意義不明の文句として、併し乍ら、天孫降臨を説く神聖・嚴肅な詞句として、故意の變形・改竄なく、傳誦せられて來たものと考へる。其が、敘事詩傳誦者の系統によつて、多少無意識の訛傳を交へた儘、尊重せられて來たのである。訣らぬ乍ら、「神語」としての信用から、文獻にまで、其儘載せられたのだと思ふ。當時の人々の言語情調から、意義の髣髴だけは感受してゐたであらう。さうして其に満足して、記は勿論、紀さへも譯文の爲に、意義變化を虞れて國語式發想をとつたものと思ふ。

さうすると、結局此語は、大和宮廷を中心とする村々の間の語部の傳誦した、啓示によつて知り得た「國のはじまり」を説く所の、神口うつしの神語として、長く村々に傳つた敘事詩の一部の固定した語なのである。知らず識らずに變化する文句の中、此單語(?)が極めて早くから其儘固定してゐたのである。傳誦者の口で訛られ易いのは、後世までも意義の通り易い部分であつて、却つて夙に死語となつたものは、注意を集注する爲か、變形なく残るのである。その爲に、周りの文句との聯絡・調和などに、不思議な姿をして残るのであつた。「うきしまり」の前後の文句の如きは、比較的生命長い語であつた爲、言語情調の赴くまゝに、傳誦者の口拍子やら、俗間語感からして、極めて自然な變化を受けて來たものなのである。さうして後に見ると、愈意味の通ぜぬものになつて了うたのだ。語部と語部の敘事詩の固定後の記録と言ふ事を考へないでは、か

うした語の存在は理會せられまい。意義明瞭な部分は、明瞭なるが爲に、愈變易の力を蒙り、不明瞭の部分は、其故に却つて、保存せられ尊奉せられるのである。

神語の意識的改竄はあるべき事でない上、筆録する事になつても、意義の拗曲する事を氣遣うたのである。此點殊に、日本紀の純漢文式讀み方を採るべき事を主張する人の、一步譲らねばならぬ所である。自然の拗曲を経た敘事詩を傳誦し乍ら、村々の語部が、わが傳承を尊しとした様子が、記紀並びに紀の一書の此種類の類例から、はつきりと想像せられる。此條の文ばかりについて言ふと、古事記の文が一番元の形に近いものでないかと考へる。日本紀の方は、宛て字から推しても、語部の理會が、浮洲（＝渚）・浮島などに傾いてゐた事と思ふ。

私は、私の民間詞曲採蒐の経験から見て、傳誦者の理會が、採蒐者・筆録人の解釋の基礎になる事を信じる。諷誦者の口ぶりによつて氣分の上で意義を感得する事は勿論、難語句の意義は傳誦者以外に問ふ外はない。其爲、意識しても、意識を離れても、記紀の筆録者又は、其原書の編者の理會が、語部の理會及び傳統的解釋によつて、支配せられてゐた事を疑はない。唯その間の消息を傳へた古事記の序文にすら、外的に書かれた爲、内容として傳らなかつたものと考へる。

天孫降臨の條の如きは、明らかに咒言と敘事詩との過渡の倂を見せてゐるものである。最尊い常世神がはじめて此世に降り、更に屢、影向ある事の事始めを説く事は、地上の庶物神を鎮定する事に役立つのである。此事は、天壓神アマノオシガミの項で詳しく述べたい。其が段々擇ばれた人間の本由（五

伴ノ緒の子孫）君主の祖先觀と結びついて來た事は、君主及び擇ばれた家族の皆神事に關係あるものなる事を見ても明らかであらう。

に_レぎの命以前に、其父おしほみ_レの命の降らうとせられた事を説くのも、初まりの君主と神との關係を示すもので、神の子（_二日のみ子_一）の考へが二重に働いてゐたのだ。おしほみ_レの命は神の子であるが、更に神の子の觀念を著しくして、に_レぎの命が降られる様に事情を傾けたのであつた。

神の子の考へは、いざなぎ・いざなみの命にも出てをるから、二重になつてゐる。更に出雲側を見れば、大汝・少彦名を主神としてゐるから、今から考へても、單純に祖先神の一度限りの降臨を説いた物語ではなかつたのである。

其ばかりではない。神武の大和入りの條（日本紀）を見ても、降臨する神としての考へ方が、天皇を迎へた人々の心持ちの描寫にまじつて現れてゐる事は疑はれない。（天壓神參照）

あめのおしがみ

天壓神と、日本紀には二個處に宛てゝある。此度は結論から述べる。「おし」は、平安の宮廷にも残つてゐて、後の「うし／＼」とおなじ語なる事を思はせてゐる「おし／＼」（多くをしと書く）と言ふ警蹕の語の固定以前の形であるらしい。天子の御座處から外へ出られる時は、警蹕同殿の中でも、この「おし／＼」を唱へて、前を驅うたのである。行幸には勿論である。天子の臨まれる事を示す外は、人を拂ふと言つた考へは、後にくつついたのである。此は目に見える人間よりも、庶物の精靈並びに、目に見えぬ存在に對して、神の來た事を示す語で、身をかはず事を命ずる様な形を採る語だと思ふ。だが古代から、神及び神の代理者の出御を示す喚び聲として用ゐたかどうかは疑問である。唯想像出来るのは、ある神に不在でない事を示す語といふだけである。

私は常世神又は、その醇化した上位の神の名が、ある時代に此「おし」なる語を冠して表された事を推測してゐる。「おし神」が臨む事を言ふ爲に出來た呪言か、其神の來る時に常に用ゐた聲

なる爲に例の「おし／＼の神」と言ふ様な觀念から出た名か、定められない。神によつては、をうをうと言うたのもある様だ。ほう／＼と唱へた後世の上流の警蹕は此から出た。

どちらにしても一種の固有名詞の感じを持つ語であつて、神及び神の代理者なる君主の在處を示すといふ事だけは動くまい。まづ元來が神の名とする考へから發足點をつくる。神名及び古代の人名その他神聖觀を持たれた物の名に、「おし」の字のついたので多い。忍・押の字を用ゐるか、假名を利用するが、壓の字を使うてはゐない。

身毒丸

大正三年頃稿
「みづほ」第八號

514

身毒丸シトクマルの父親は、住吉から出た田樂師であつた。けれども、今は居ない。身毒はをり／＼その父親に訣れた時の容子を思ひ浮べて見る。身毒はその時九つであつた。

住吉の御田植オシノヅ神事の外は旅まはりで一年中の生計を立て、行く田樂法師の子どもは、よた／＼と一人あるきの出来出す頃から、もう二里三里の遠出をさせられて、九つの年には、父親らの一行と大和を越えて、伊賀伊勢かけて、田植能の興行に伴はれた。信吉法師というた彼の父は、配下に十五六人の田樂法師を使うてゐた。朝間、馬などに乗らない時は、疲れると屢ヨク若い能藝人の背に寝入つた。さうして交る番に皆の背から背へ移つて行つた。時をり、うす目をあけて處々の山や川の景色を眺めてゐた。ある處では青草山を點綴して、躑躅の花が燃えてゐた。ある處は、廣い河原に幾筋となく水が分れて、名も知らぬ鳥が無數に飛んでゐたりした。さういふ景色と一つに、模糊とした羅衣ウスギヌをかづいた記憶のうちに、父の姿の見えなくなつた、夜の有様も交つてゐた。その晩は、更けて月が上つた。身毒は夜中ナカにふと醒ました。見ると、信吉法師が彼の肩を持つて、

揺ぶつてゐたのである。

——おまへにはまだ分るまいがね」といふ言葉を前提に、彼れこれ小半時も、頑是のない耳を相手に、滞り勝ちな涙聲で話してゐたが、大抵は覺えてゐない。此頃になつて、それは、遠い昔の夢の斷れ片ツギの様にも思はれ出した。唯この前提が、その時、少しばかり目醒めかけてゐた反抗心を唆つたので、はつきりと頭に印せられたのである。

その時五十を少し出てゐた父親の顔には、二月ほど前から氣味わるいむくみが來てゐた。父親が姿を匿す前の晩に着いた、奈良はづれの宿院の風呂の上り場で見た、父の背を今でも覺えてゐる。蝦蟇の肌のやうな、斑點が、膨れた皮膚に隙間なく現れてゐた。

——とうちやんこれは何うしたの」と咎めた彼の顔を見て、返事もしないで面を曇らしたまゝ、急に着物をひつ被つた。記憶を手繰つて行くと、悲しいその夜に、父の語つたことばがまた胸に浮ぶ。

身毒丸

父及び身毒の身には、先祖から持ち傳へた病氣がある。その爲に父は得度して、淨い生活をしようとしたのが、ある女の爲に墮ちて田舎聖の田樂法師の仲間ウチノカミに投じた。父の居つた寺は、どうやら書寫山であつたやうな氣がする。それだから、身毒も法師になつて、淨い生活を送れというたやうに、稍世間の見え出した此頃の頭には、綜合して考へ出した。唯、からだを淨く保つことが、父の罪滅しだといふ意味であつたか、血縁の間にしふねく根を張つたこの病ひを、一代きりにた

515

やす所以だというたのか、どちらへでも臆氣な記憶は心のまゝに傾いた。
身毒は、住吉の神宮寺に附屬してゐる田樂法師の瓜生野といふ座に養はれた子方で、遠里小野の部領の家に寝起きした。

この仲間では、十一二になると、用捨なくごし／＼と髪を剃つて、白い衣に腰衣を着けさせられた。ところが身毒ひとりには、此年十七になるまで、剃らずにゐた。身毒は、細面に、女のやうな柔らかな眉で、口は少し大きい、赤い唇から漏れる齒は、貝殻のやうに美しかった。額ぎはかちみ上げへかけての具合、剃り毀つには堪へられない程の愛着が、師匠源内法師の胸にあつた。今年、今年と思ひながら、一年延しにしてゐた。そして、毎年行く國々の人々から唯一人なる、この美しい若衆はもて囃されてゐた。牛若というたのは、こんな人だつたらうなどいふ評判が山家片在所の女達の口の上つた。

今年五月の中頃、例年行く伊勢の關の宿で、田植多踊りのあつた時、身毒は傘踊りといふ危い藝を試みた。これは高足駄を穿いて足を擧げ、その間を幾度も／＼長柄の傘を潜らす藝である。苗代は一面に青み渡つてゐた。野天に張つた幄帳の白い布に反射した緑色の光りが、大口袴を穿いた足を擧げる度に、雪のやうな太股のあたりまでも射し込んだ。關から鈴鹿を踰えて、近江路を踊り廻つて、水口の宿まで来た時、一行の後を追うて来た二人の女があつた。それは、關の長者の妹娘が、はした女一人を供に、親の家を抜け出して来たのであつた。

耳朶まで眞赤にして逃げるやうに師匠の居間へ来た身毒は長者の娘のことを話した。師匠は慳貪な聲を擧げて、二人を追ひ返した。

何も知らぬ身毒は、其夜一番鶏が鳴くまで、師匠の折檻に會うた。

夜があけて、弟子どもが床を出たときに、青々と剃り毀たれた頭を垂れて、庭の藤の棚の下に茫然とゐる身毒を見出した。源内法師の居間には、髪の毛を焼いたらしい不氣味な臭ひが漂うてゐた。師匠は晴れやかな顔をして、廂に射し込む朝の光りを浴びてゐた。然しそれは間もなく、制吒迦童子と渾名せられてゐる弟子の一人に肩を扼せられて出て来た、身毒の變つた姿を目にした咄嗟に、曇つて了つた。

何も驚くことはない。あれはわしが剃つたのだ。たつた一人、若衆で交つてゐるのも、目障りだからなう。

身毒を居間に下らした後、事あり顔に師匠の周りを取り捲いた弟子どもに、こたはりのない聲でから／＼と笑つた。

瓜生野の田樂能の一座は逢坂山を越える時に初めて時鳥を聞いた。住吉へ歸ると間もなく、盆の聖靈會が来た。源内法師はこれまで走り使ひにやり慣れた神宮寺法印の處へさへも、身毒を出すことを躊躇した。そして、その起ち居につけて、暫くも看視の目を放さなかつた。どうも、うは／＼してゐる、と師匠の首を傾けることが度々になつた。

田樂師はまた村々の念佛踊りにも迎へられる。ちようど、七月に這入つて、泉州石津の郷で盆踊りがとり行はれるので、源内法師は身毒と、制吒迦童子とを連れて、一時あまりかゝつて百舌鳥の耳原を横切つて、石津の道場に着いた。其夜は終夜、月が明々と照つてゐた。念佛踊りの濟んだのは、かれこれ子の上刻である。呆れて立つてゐる二人を急ぎ立て、そゝくさと家路に就いた。道は薄の中を踏みわけたり、泥濘を飛び越えたりした。三人の胸には、各別様の不安と不平とがあつた。踊り疲れた制吒迦は、をり／＼聞えよがしに欠をする。源内法師は鏝でも磨つて除けたいばかりに、いら／＼した心持ちで、先頭に立つてほく／＼と歩く。久かたぶりの今日の外出は、鬱し切つてゐた身毒の心持ちをのう／＼させた。けれどもそれは、ほんの暫しで、踊りの初まる前から、軽い不安が始中終彼の頭を掠めてゐた。彼は、一丈もある長柄の花傘を手に支へて、音頭をとつた。月の下で氣狂ひの様に踊る男女の耳にも、その迦陵頻迦のやうな聲が澄み徹つた。をり／＼見上げる現ない目にも、地藏菩薩ながらの姿が映つた。若い女は、みな現身佛の足もとに、跪きたい様に思つた。けれども身毒は、うつけた目を睜つて、遙かな大空から落ちかゝつて來るかと思はれる、自分の聲にほれ／＼としてゐた。ある回想が彼の心をふと躡かせた。彼の耳には、あり／＼と火の様なことばが聞える。彼の目には、まざ／＼と焰と燃えたつ女の奏が陽炎うた。

踊り手は、一樣に手を止めて、音頭の絶えたのを訝しがつて立つてゐた。と切れた歌は、直ちに

續けられた。然しながら、以前の様な昂奮がもはや誰の上にも來なかつた。身毒は、歌ひながら不機嫌な師匠の顔を豫想して慄へ上つてゐた。……あちらこちらの塚山では寢鳥が時々鳴いて三人を驚かした。思ひ出したやうに、疲れたゞの、かひだるいだのと制吒迦が獨語をいふ外には、對話はおろか、一つのことばも反響を起さなかつた。家へ歸ると、三人ながらくづほれる様に、土間の庭の上へ、べた／＼と坐り込んだ。

源内法師は、身毒の襟がみを把つて、自身の部屋へ引き摺つて行つた。

身毒は、一語も上つて來ないひき緊つた師匠の唇から出る、恐しいことばを豫想するのも堪へられない。柱一間を隔いて無言で向ひあつてゐる師弟の上に、時間は移つて行く。短い夜は、ほのぼのあけて、朝の光りは二人の膝の上に落ちた。

藝道のため、第一は御佛の爲ぢや。心を斷つ斧だと思へ。

かういつて、龍女成佛品といふ一卷を手渡した。

さあ、これを血書するのぢやぞ。一毫も汚れた心を起すではないぞ。冥罰を忘れなよ。

身毒はこれまでに覺えのない程、憤りに胸を焦した。然しそれは師匠の語氣におびき出されたものに過ぎない。心の裡では、師匠のことばを否定することは出来なかつた。

經文を血書してゐる筆の先にも、どうかすると、長者の妹娘の姿がちらめいた。あるときは、その心から妹娘を攘ひ除けたやうな、すが／＼しい心持ちになることもある。然しながら、其空虚

には臍氣な女の、誰とも知らぬ姿が入り込んで来た。最初の寫經は、師の手に渡ると、ずた／＼に引き裂かれて、火桶に投げ込まれた。身毒は、再度血書した。それが却けられたときに、三度目の血書にかゝつた。その經文も穢らはしいといふ一語の下に前栽へ投げ棄てられた。

連夜の不眠に、何うかすると、筆を持つて机に向つたまゝ、目を開いて睡つた。さうした僅かの間にも、妹娘や見も知らぬ處女の姿がわり込んで来る。

四度目の血書を恐る／＼さし出したときに、師匠の目はやはり血走つてゐたが、心持ち柔い表情が見えて、

人を恨むぢやないぞ。危い傘飛びの場合を考へて見る。若し女の姿が、ちよつとでもそちの目に浮んだが最後、眞倒様だ。否でも片羽にならねばならぬ。神宮寺の道心達の修業も、こちとらの修業も理は一つだ。

寫經のことには一言も言ひ及ばなかつた。そして部屋へ下つて、一眠りせいと命じた。經文は膝の上にとりあげられた。執着に堪へぬらしい目は、燃えたち相な血のあとを辿つた。

自身の部屋に歸つて来た身毒は、板間の上へ俯伏しに倒れた。蟬が鳴くかと思つたのは、自身の耳鳴りである。心づくくと黒光りのする板間に、鼻血がべつとりと零れてゐた。さうしてゐるうちに、放散してゐた意識が明らかに集中して来ると、師匠の心持ちが我心に流れ込む様に感ぜられて来る。あれだけの心勞をさせるのも、自分の科だと考へられた。身毒は起き上つた。そして、

机に向うて、五度目の寫經にとりかゝるのである。夢心地に、半時ばかりも筆を動かした。然し、もう夢さへも見ることの出来ない程、衰へきつてゐる。疲れ果てた心の隅に、何處か薄明りの射す處があつて、其處から未見ぬ世界が見えて來相に思はれ出した。身毒は息を集め、心を凝して、その明るみを探らうと試みる。

源内法師は、この時、まだ寫經を見つめてゐた。さうしてゐるうちに、涙が頬を傳うて流れた。俄かに大きな不安が、彼の頭に蔽ひかゝつて來た。九年前のあぢきない記憶が頭を擡げて來たのである。四卷の經文をとり出して、紙も徹るばかりに見入つた。どれにも思ひなしか、鮮かな紅の色が、幾分濃んで見えた。

部屋には、大きな楡形の窓がある。それから見越す庭には、竹藪のほの暗い光りの中に、百合の花が、くつきりと白く咲いてゐる。

師匠が亡くなつてから、丹波氷上の田樂能の一座の部領に迎へられて、十年あまりをそこで過して居つたが、兄弟子の信吉法師が行方不明になつた頃呼び戻されて、久しぶりで住吉に歸つた。氷上で娶つた妻も早く死んで、固より子もなかつた。兄弟子に對する好意、妻や子に對する愛情を集めて、身毒一人を可愛がつた。二年三年たつうちに、信吉法師が何處かの隅から、今にも戻つて來て、身毒を奪うて行き相な心持ちがした。思ひなげな目を舉げて、覗き込む身毒の顔を見ると、いよ／＼愛着の心が深くなつて行く。

信吉法師が韜晦してから、十年たつた。彼はある日、ふと指を繰つて見て、十年といふことばの響きに、心の落ちつくのを感じた。信吉の馳落ちの噂を耳にしたとき、業病の苦しみに堪へきれなくなつて、海か川かへ身を投げたものと信じてゐた。遠い昔のことである。ある時信吉法師は寂寥と、やるせなさを、この親身な相弟子に打ちあけて聞かしたのであつた。源内法師は足音を盗んで、身毒の部屋の方へ歩いて行つた。

身毒は板敷きに薄縁一枚敷いて、經机に凭りかゝつて、一心不亂に筆を操つてゐる。捲り上げた二の腕の雪のやうな膨らみの上を、血が二すぢ三すぢ流れてゐた。

源内法師は居間に戻つた。その美しい二の腕が胸に烙印した様に残つた。その腕や、美しい顔が、紫色にうだ腫れた様を思ひ浮べるだけでも心が痛むのである。そのどろ／＼と蕩けた毒血を吸ふ、自身の姿があさましく目にちらついた。彼は持佛堂に走り込んで、泣くばかり大きな聲で、この邪念を拂はせたまへと祈つた。

五度目の寫經を見た彼は、もう叱る心もなくなつてゐた。

程近い榎津や粉濱の浦で、漁る魚にも時々移り變りはあつた。秋の末から冬へかけて、遠く見渡す岸の姫松の梢が、海風に揉まれて白い砂地の上に波のやうに漂うてゐる。庭の松にも鶉の棲む日が來た。住吉の師走被へに次いで生駒や信貴の山々が連日霞み暮す春の日になつた。弟子たちは畑も畝うた。獵にも出かけた。瓜生野の座の庭には、櫻や、辛夷は咲き亂れた。人々は皆旅を

思つた。源内法師は忘れっぽい弟子達の踊りの手振りや、早業の復習の監督に暇もない。住吉の神の御田に、五月處女の笠の動く、五月の青空の下を、二十人あまりの菅笠に黒い腰衣を着けた姿が、ゆら／＼と陽炎うて、一行は旅に上つた。横山のかげが、青麥のうへになびく野を越えて、奈良から長谷寺に出た一行は、更に、寂しい伊賀越えにかゝつた。草山の間を白い道がうねつて行く。荒廢した海道は、處々叢になつてゐて、まひ立つ土ほこりのなかに、野櫛ノヅトが血を零したやうに咲いてゐたりした。小汗のにじむ日である。小さな者らは、時々立ち止つて、山の腰から泌み出てゐる水を、手に受けたためては飲んだ。さうして隔つた人々に追ひすがる爲に、顔をまつかにしては、はしり／＼した。

國見山をまへにして、大きな盆地が、東西に長く擴つてゐた。可なりな激湍を徒渉りして、山懐に這入ると、養田に代掻く男の唄や、牛の聲が、よそよりは、のんびりと聞えて來た。其處は、非御家人の隠れ里といつた富裕な郷であつた。

瓜生野の一座は、その郷士の家で手あついてもなしを受けた。源内法師は、すぐ明日の踊りの用意にかゝる。力強い制吒迦は、屋敷の隅の納屋から樽材などをかつぎ出すその家の下部らに立ちまじつて、はたらいてゐる。

身毒丸

身毒は、廣々とした屋敷うちを、あちらこちらと歩いて見た。

それは、低い田居を四方に見おろす高臺の上を占めて、まんなかちよんぼりと、百坪あまりの

建て物がたつてゐるのであつた。

廣くつき出した縁の上には、狐色に焦れて、田舎びた男の子や、女の子が十五六人も居て、身毒らの着いた時分から、きよとく、一行の容子を見瞻つてゐた。彼らの目色には、都人の羨しさを跳ねかへす妬み憎み、其から異郷人に對する害心と侮蔑とに輝いてゐる。若い身毒は、何處へ行つても、かうした腫に出會うた。さうして、かうした度毎に、身の窄まる思ひがした。

子どもたちは、やがて、外から見え透く廣い梯子を傳うてつしの上にあがつて行つた。

一行の爲に、南開きの、崖に臨んだ部屋が宛てがはれた。

源内が、家のあるじに挨拶に行つた間を、ひろくと臥てゐた人たちの中で、ぽつつりと一人坐つてゐた、彼を見とがめた一人が、どうしたのだと問うた。

どうもしない、と應へるほかには、いふべき語がわからない心地に漂うてゐたのである。

がらんとした家の中は、遠くから聞えて来る人聲がさわがしく聞えた。子どもらは、いろんな聞きも知らぬ唄を、あどけない聲で謡うてゐる。身毒は、瓜生野の家を思ふた。しかし女氣のない家の中に、若い男や中年の男が、假に宿つてゐるといふだけで、かうした旅の泊りとちがうた處がないのだ、といふ心持が、胸をたぐるやうに迫つて来る。

くたびれたく。おや、身毒。おまへも居たのか。おまへはいつも、わるい癖ぢやよ。遠路をあるくと、きつと其だ。なんてい不機嫌な顔をする。

身毒は、黙つてゐることが出来なかつた。

わしは、今度こそ歸つたら、お師匠さんに願うて、神宮寺か、家原寺へ入れて貰はうと思つてゐる。おい、又變なこと、言ひ出したぞ。おまへ、此ごろ、大仙陵の法師狐がついてゐるかも知れんぞ。今迄躰を立てゝゐた制吒迦が寝がへりをうつて顔を此方へ向けた。年がさの威嚴を持つたらしいおつかぶせる様な聲である。

さうだともく。師匠のお話では、氷上で育てた弟子のうちにも、さういふ風に、房主になりたいく言ひづめで、とゞのつまりが、蓮池へはまつて死んだ男があつたといふぜ。死神は、えてさういふ時に魅きたがるんだといふよ。氣をつけなよ。

又、一人の中年男が、つけ添へた。

おまへらは、なんともないのかい、住吉へ還らんでも、かうしてゐても、おんなじ旅だもの。せめて、寺方に落ちつけば、しんみりした心持ちになれさうに思ふのぢやけれど。

あほうなことを、ちんぴらが言ふよ。瓜生野が氣に入らぬ。そんなこと、おまへが言ひ出したら、こちとらは、どうすればよい。よう、胸に手置いて考へて見い、師匠には、子のやうに可愛がられるし、第一ものごゝろもつかん時分から居馴れてるぢやないか。何を不足で、そんなことを言ひ出すのだ。

と分別くさい聲が應じた。

けれどなあ、かういふ風に、長道を來て、落ちついて、心がゆつたりすると一處に、何やらかうたまらんやうな、もつと幾日もくくぢつとしてゐたいといふ氣がする。

熱し易い制吒迦は、もう向つぱらを立て、一撃を壓しつける息ごみでどなつた。

何だ。利いた風はよせ。田樂法師は、高足や刀玉見事に出來さいすりや、佛さまへの御奉公は十分に出來てるんぢや、と師匠が言はしつたぞ。田樂が嫌ひになつて、主、猿樂の座方んでも逃げ込むつもりぢやろ。

煮え立つやうな心は、鋭い語になつて、沸き上つた。身毒は、其勢にけおされて、おろくとし

てゐる。あひての當惑した表情は、愈疑惑の心を燃え立たせた。

搖拍子。それを、圓満井では、えら執心ぢやといふぞ。此ばかりや瓜生野座の命ぢやらうて、坂下や氷上の座から、幾度土べたに出額をすりつけて、頼んで來ても傳授さつしやらなんだ師匠が、われだけにや傳へられた搖拍子を持ち込みや、春日あたりでは大喜びで、一返に脇役者ぐらゐにや、とり立てゝくれるぢやろ。根がそのぬつぺりした顔ぢやもんな。……けんど、けんど、佛神に誓言立てゝ授つた拍子を、ぬけくゝと繁昌の猿樂の方へ傳へて、寝返りうつて見る。冥罰で、血い吐くだ。……二十年鞆鼓や篳ばかりうつてるこちとらとつて、うつちやつては置かんぞよ。制吒迦はとうく泣き出した。自身の荒ら語は、胸をかき亂し、煽り立てた。

分別男は、長い縁を廻りまはつて、師匠のゐる前まで、身毒を引き出した。

源内法師は、目を瞑つて、ぢつと聞いて居た。分別男の誇張して兩方をとりもつた話ぶりに連れて、からだ中の神経が強ばつて行くやうに思はれた。自身がまだ氷上座に迎へられて行かなかつた頃、瓜生野家の縁の日あたりで、若かつた信吉法師の口から聞かされた一途な語を、目のあたりで復、聞かされてゐるやうに感じた。彼の頭には、卅年前と目の今の事とが、一つに渦を捲いた。さうして時々、冷やかな反省が、ひやり／＼と脊筋に水を注いだ。彼は強ひて、心を鎮めた。さうして、顔もえあげないである身毒の、著しくねび整うた脊から腰へかけての骨ぐみに目を落してゐた。分別男や身毒の豫期した語は、その唇からは洩れないで、勉る様な語が、身毒のさゝくれ立つた心持ちを和げた。

おまへも、やつぱり、父の子ぢやつたなう。信吉房の血が、まだ一代きりの捨身では、をさまらなかつたものと見える。

かういふ語が、分別男や身毒には、無意味ながら悲しい語らしく響いて語り終へられた。深いと息が、師匠の腹の底から出た。

分別男は、疝癖づよい師匠にも似あはぬことゝ思つて、拍子抜けのした顔でゐた。師匠ももうとる年で、よつほど籍が弛んだやうだと笑ひ話のやうにして制吒迦を慰めた。

あけの日は、東が白みかけると、あちらでもこちらでも蟬が鳴き立てた。昨日の暑さで、一晩のうち

師を先に、白帷子に赤い頬かぶりをして、綾蘭笠を其上にかづいた一行が、仄暗い郷土の家から、照り充ちた朝日の中に出た。さうして、だら／＼坂を靜かに練つておりた。制吒迦は、二丈あまりの花竿を立てながら、師匠のすぐ後に従うた。

一行が遠い窪田に着いた頃、ぼつちりと目をあいた身毒は、すまぬ事をしたと思つて床から這ひ出した。衣装をつけて鞆鼓を腰に纏うてゐた時、急にふら／＼と仰様にのめつたのである。鼻血に汚れた頬を拭うてやりながら、師匠は、も暫らく寝て居れと言うた。

身毒は、一夜睡ることが出来なかつたのである。今の間に見た夢は、昨夜の續きであつた。高い山の間を上つてゐた。道が盡きてふりかへると、来た方は密生した林が塞いでゐる。更に高い峯が崩れかゝり相に、彼の前と兩側に聳えてゐる。時間は朝とも思はれる。又日中の様にも考へられぬでもない。笹藪が深く茂つてゐて、近い處を見渡すことが出来ない。流れる水はないが、あたり一體にしとつてゐる。歩みを止めると、急に恐しい静けさが身に薄つて来る。彼は耳もと迄來てゐる凄い沈黙から脱け出ようと唯むやみに音立てゝ笹の中をあるく。

一つの森に出た。確かに見覚えのある森である。この山口にかゝつた時に、おつかなびつくりであるいてゐたのは、此道であつた。けれども山だけが、依然として圍んでゐる。後戻りをするのだと思ひながら行くと、一つの土居に行きあたつた。其について廻ると、柴折門があつた。人懐しさに、無上に這入りたくなつて中に入り込んだ。庭には白い花が一ぱいに咲いてゐる。小菊と

も思はれ、茨なんかの花のやうにも見えた。つひ目の前に見える櫛形の窓の處まで、いくら歩いても歩きつかない。半時もあるいたけれど、窓への距離は、もと通りで、後も前も、白い花で埋れて了うた様に見えた。彼は花の上にくづれ伏して、大きい聲をあげて泣いた。すると、け近い物音がしたので、ふつと仰むくと、窓は頭の上にあつた。さうして、其中から、くつきりと一つの顔が浮き出てゐた。

身毒の再寝は、肱枕が崩れたので、ふつ／＼と覺めた。

床を出て、縁の柱にもたれて、幾度も其顔を浮べて見た。どうも見覚えのある顔である。唯、何時か逢うたことのある顔である。身毒があれかこれかと考へてゐるうちに、其顔は、段々霞が消えたやうに薄れて行つた。彼の聯想が、ふと一つの考へに行き當つた時に、跳ね起された石の下から、水が湧き出したやうに、懐しいが、しかし、せつない心地が漲つて出た。さうして深く／＼その心地の中に沈んで行つた。

山の下からさつさらさらさと篋の音が揃うて響いて來た。鞆鼓の音が續いて聞え出した。身毒は、延び上つて見た。併し其邊は、山陰になつてゐると見えて、其らしい姿は見えない。鞆鼓の音が急になつて來た。

(附言)

この話は、高安長者傳説から、宗教倫理の方便風な分子をとり去つて、最原始的な物語にかへして書いたものなのです。

世間では、謡曲の弱法師から筋をひいた話が、江戸時代に入つて、説經師の題目に採り入れられた處から、古淨瑠璃にも淨瑠璃にも使はれ、又芝居にもうつされたと考へてゐる様です。尤、今の攝州合邦辻から、ぢり／＼と原始的の空象につめ寄らうとすると、説經節迄はわりあひに樂に行くことが出来やすいけれど、弱法師と説經節との間には、ひどい懸隔があるやうに思はれます。或は一つの流れから岐れた二つの枝川かとも考へます。

わたしどもには、歴史と傳説との間に、さう鮮やかにぎりをつけて考へることは出来ません。殊に現今の史家の史論の可能性と表現法とを疑うて居ます。史論の効果は當然具體的に現れて來なければならぬもので、小説か或は更に進んで劇の形を採らねばならぬと考へます。わたしは、其で、傳説の研究の表現形式として、小説の形を使うて見たのです。この話を讀んで頂く方に願ひたいのは、わたしに、ある傳説の原始様式の語りてといふ立脚地を認めて頂くことです。傳説童話の進展の徑路は、わりあひに、はつきりと、わたしどもには見ることが出来ます。擴充附加も、當然伴はるべきものだけは這入つて來ても、決して生々しい作爲を試みる様なことはありません。

わたしどもは、傳説をすなほに延して行く話し方を心得てゐます。

俊徳丸といふのは、後の宛て字で、わたしはやつぱりしんたくまるが正しからうと思ひます。身毒丸の、毒の字は濁音でなく、清音に讀んで頂きたいと思ひます。

わたしは、正直、謡曲の流れよりも、説經の流れの方が、たとひ方便や作爲が澤山に含まれてゐても信じたいと思ふ要素を失はないでゐると思つてゐます。但し、謡曲の弱法師といふ表題は、此物語の出自を暗示してゐるもので、同時に日本の歌舞演劇史の上に、高安長者傳説が投げてくれる薄明りの尊さを見せてゐると考へます。

あとがき

○全集第十七巻は「藝能史篇」第一とし、主として藝能史の總論及び各論、郷土藝能並びに年中行事その他に關する諸論稿を収録した。なほ、右の中に或は「民俗學篇」や「神道宗教篇」乃至は「雜纂篇」に收めるのが適當と思はれるものもあるが、收載量の關係からこの巻に收めたものがある。

○「日本藝能史序説」は昭和二十三年十一月、東京都民講座における四回講義で、収録の分はその第一回のものである。雑誌『本流』に掲載するため、著者は筆記の原稿に加筆し、殆ど倍近く増補したが、同誌が第一號で終つたので、一回分だけで中絶した。加筆原稿のまま印刷所に廻したらしく、文意不明の箇所もある。

○「日本藝能の特殊性」は昭和十五年三月、文部省の日本諸學振興委員會における講演の筆記で、後に同會の研究報告に掲載されたもの。恐らく著者はその筆記を見てゐないであらう。

○「和歌の發生と諸藝術との關係」は序論だけで中絶してゐる。それについて著者自身は次のごとく書き添へてゐる。

今度は、ほんの入り口に達したばかりである。もうこれを書き續ける時間も、其よりも根氣がなくなつた。いつか、後を見て書き續くをりがあらうと思ふ。

しかし右の書き續きは、遂に遺されてゐない。

○「神樂その二」は、西角井正慶氏の『神樂研究』に寄せた序の一部で、同氏との問答體となつてゐる。後年、著者は時々座談を催し、或は座談形式の文體で發表した論文があるが、蓋しその早いものであらう。

○「春日若宮御祭の研究」は、齋藤香村氏・北野博美氏等との座談會における問答の發問の部分を、後に本文に書き入れて綴り直したものである。

○「身毒丸」は、著者自身の小説——傳説の表現形式としての小説——としてゐるので、當然、「作品篇」に收めるべきであるが、しかし讀者の立場から言へば、これは「藝能史篇」に收めた方が便利だと考へ、敢てこの卷に入れた。「雪祭り・しなりお」をこの卷に收めたのも、同じ理由からである。「身毒丸」は田端憲之助氏の丹精によつて収録することが出來た。なほ、同氏の注意によつて誤植と思はれる個所を訂正した。

○この卷に収録した諸論稿の、草稿とした以外は口述の筆記、或は講演乃至講義の筆記であつて、筆者が目を通してゐないものも多い。就中、『民俗藝術』・『日本民俗』その他に所載の論稿は、殆ど北野博美氏の筆記に成るもので、時には掲載後やつと著者がそれと氣づいたといふ逸話もあるほど、同氏の筆記は著者の癖を眞似るに妙を得てゐた。少くともこの卷の四分の一は同氏の努力によつて日の目を見た訣である。

折口博士記念古代研究所

折口信夫全集 第十七卷

定價九五〇圓

昭和四十二年三月十五日印刷
昭和四十二年三月二十五日發行

編纂 折口博士記念
古代研究所

發行者 山 越 豊

印刷者 山 元 正 宜

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四



本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・口繪印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
函貼用紙 特種製紙株式会社
クロス 日本クロス株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社



